第３章　第２次調査（昭和39年）

近藤義郎著「日本塩業の研究」第15集、
昭和49年３月　日本塩業研究会発行より転載

1．はじめに

九州における土器製塩遺跡の存在については、長いあいだ手がかりをつかめなかったが、坂本経堯・乙益重隆・隈昭志の諸氏から教示をうけ、熊本県下の二遺跡を調査する機会をえてその端にふれることができた。その概要については、日本考古学協会第31回総会において「九州の製塩土器」と題して発表したが(1)、簡略な要旨が公表されているだけであるため、ここにあらためて紹介することにした。

調査した二遺跡のうち、天草郡五和町二江沖ノ原遺跡については、1963年12月に予備調査、1964年３月に小規模な発掘を実施した(2)。宇土郡三角町大田尾遺跡については、1964年３月31日に試掘調査をおこなった(3)。なお、山崎純男氏の教示によれば、天草郡大矢野町江樋戸の小鳩遺跡および天草郡苓北町富岡出来町遺跡も同種の遺跡とおもわれるが、詳細不明のため、ここではふれない。これら４遺跡とも、有明海から天草灘にかけての南辺に位置するが、この地帯にはさらに同種の遺跡が存在するものとおもわれる(4)。

なお調査にあたっては、葦原浩二町長をはじめとする五和町・同教育委員会、原田範行教諭ほか西山中学校二江教室の生徒諸君、宮崎教諭および二江小学校生徒諸君、柳原高太郎・平田百穂・勝木保の各氏をはじめ町民有志、本渡市文化財保護委員会亀井勇・鶴田倉造、三角町教育委員会、両遺跡の土地所有者、山崎純男・吉田義昭両君など天草高等学校生徒、肥後考古学会の三島格氏および坂本経昌・富田紘一の両君、岡山から筆者に同行し発掘作業の中心となった西尾満雄・鷹羽千明・木村祀子・難波俊成・春成秀爾の諸君、そのほか多くの方々の援助をうけた。発掘調査費については、五和町および日本塩業研究会から助成をうけ、整理研究については、朝日学術奨励金の一部をあてた。また、遺物整理および実測に関しては、寿村和子・国末和江・佐藤敬二郎・岸本雅敏の諸君の助力をえた。冒頭に列記して感謝の意を表する。

注 (1) 近藤義郎「九州の製塩土器」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』18頁1965年

(2) 沖の原遺跡については、縄文時代に属する包含層もふくめ、発掘報告書作成を準備する予定である。この遺跡については、隈昭志氏からはじめて注意を促され、のち同氏及び坂本経堯氏の尽力によって発掘をおこなうことができた。発掘地点は沖の原4584・及び4581-3番地である。

(3) 大田尾遺跡は、乙益重隆氏の教示によって調査することができた。

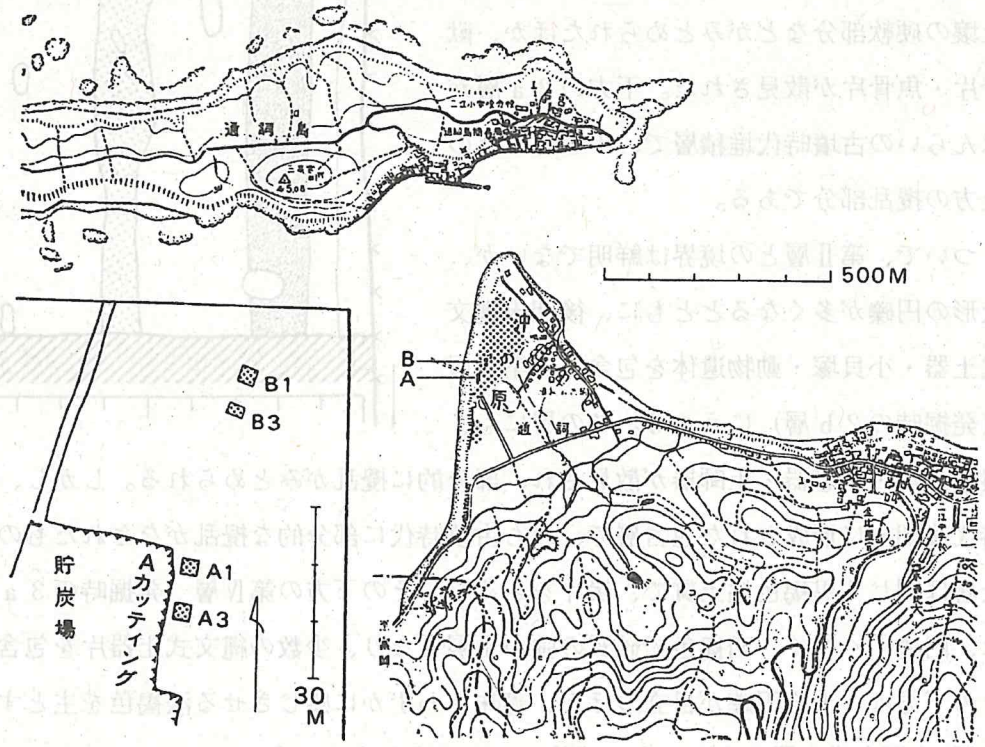
(4) 宇土郡三角町金桁小金桁小鹿里遺跡はその候補の一つとなるかもしれないが、1965年11月２日実査した折は、遺跡部分が埋没していたため、存否の確認はできなかった。発見者の枝森久一氏によると、かって幅約５メートル、奥行約２メートルほどの小洞穴から、脚の短い土器が沢山出土したという。いま崖くずれで埋没し、関係の土器片はまったくみとめられない。

2. 遺跡の概要

(1) 沖ノ原遺跡

天草下島の北端、五和町大字二江の西方にひろがる三角形状の砂嘴に立地する（第１図および第1図版）。砂嘴の北は狭い瀬戸をへだてて通詞島に、東は早崎海峡に、西は天草灘に面し、南はゆるやかな傾斜地をへて山につづく。砂として西幅は付け根部分で約460メートル、南北朝は約450メートルで、全体として北にむかってゆるやかに下降する。また、東よりの中央部がやや高く、西よりも小さな高まりがある。これらの高まりを５メートル等高線がめぐり、濃淡を問わなければ、この高まりの北西方にかけての一面に、製塩土器片の散布がみられる。その中心は、長年にわたる柳原高太郎氏の観察および坂本経堯氏をはじめ筆者等の表面観察並びに発掘所見によれば、砂嘴の北端に近い西側の、南北約190メートル、東西約40～80メートルの範囲である。その南側にややはなれて、製塩土器と土師器などを包含する層がみとめられるほか、柳原氏によると、山麓傾斜地の畑から土師器とともに、天草式土器脚片１が採集されたとの由である。そのうち、前者は、上記主要範囲の一部である可能性が高い。なお、遺跡の大部分は、現在畑地となっている。

遺跡の表土は、ほぼ全体にわたって、砂または砂質土壌であるが、その下方には、粘土質土壌・含礫土壌・礫層・粗砂層などの重なりがみられる。海浜では土砂が洗い流されて礫原となっており、とくに東側において海蝕が進んでいる。礫すべて円礫である。



第１図　沖ノ原遺跡（点部分が天草式製塩遺跡の推定中心部）

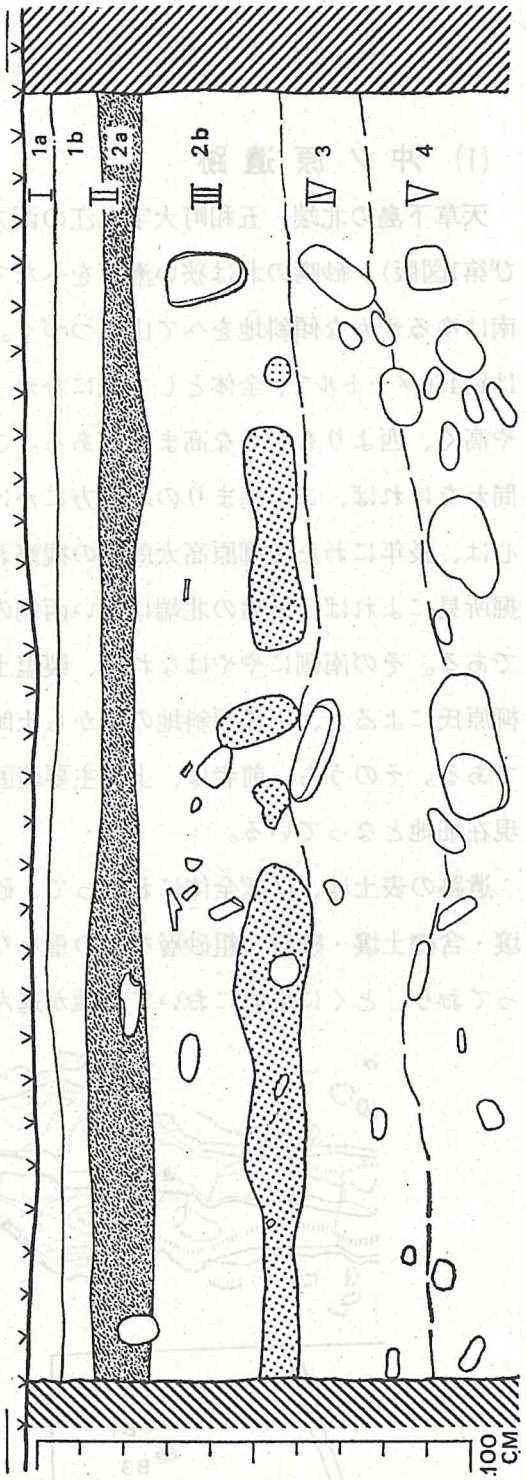
発掘は、砂嘴西側にあたるA・B２地点においておこなわれた。A区北端からB区南端までの距離は約26メートルである。A地点では、３メートル四方を２区画もうけ、A１区、A３区と呼んだ。B地点では、３メートル四方を１区画、３×２メートルの範囲を１区画とし、それぞれB１区、B３区とよんだ。また、貯炭場との境のA地点西側断面をAカッティングとよんだ。

発掘所見の概要は下記の通りである。

A地点（第２図および第2･3･4･6図版）

近世陶器・須恵器・土師器・製塩土器の破片少数をふくむ表層を第Ⅰ層（発掘時の１a層）とする。土器の多くは磨耗し、あきらかに攪乱層である。その下方に、製塩土器および須恵器・土師器を包含する第Ⅱ層（発掘時の１b層・２a層）がつづく。この層はおおむね黒褐色粘土質の土壌で、木炭片をまばらにふくむ。部分的に製塩土器片が多い箇所、土壌の硬軟部分などがみとめられたほか、獣骨片・魚骨片が散見された。下方の２a層がほんらいの古墳時代堆積層で、１b層はその上方の攪乱部分である。

ついで、第Ⅱ層との境界は鮮明でないが、大形の円礫が多くなるとともに、後期末縄文式土器・小貝塚・動物遺体を包含する第Ⅲ層（発掘時の２b層）にうつる。この層にも、製塩土器・須恵器・土師器が散見され、部分的に攪乱がみとめられる。しかし、ほんらい縄文時代後期末に形成された包含層で、のち古墳時代に部分的な攪乱がなされたものと判断された。土層は同じく黒褐色粘土質で、炭片をふくむ。その下方の第Ⅳ層（発掘時の３a層ないし３層）は、円礫すくなく、明褐色で砂質の強い土層となり、少数の縄文式土器片を包含する。さらにその下方は、大形円礫が目立つほか、青味をわずかに感じさせる淡褐色を主とする砂層で（第Ⅴ層）、縄文式土器１片のほか、遺物はみとめられなかった。



第２図　沖ノ原A３区東壁（乱線部２aは天草式製塩土器本来の層、点部分は縄文時代後期貝塚）

B地点（第3図および4・5図版）第Ⅰ層（発掘時の1a層）はA地点と同じく、天草式土器・須恵器・土師器を少数包含する表土攪乱層である。第Ⅱ層（発掘時の1b層）は、褐色ないし黒味がかった褐色の砂質土壌で、破砕小貝層や獣骨などの有機質を若干ふくみ、製塩土器・須恵器・土師器の破片の量がやや多くなる。古墳時代後期以降のある時期に攪乱された層とおもわれる。第Ⅲ層は、木炭片や獣魚骨・貝などの有機質を多くふくむ黒褐色の砂質土壌で、礫の多い個所、焼土のひろがり、いくつかの小混土貝層などがみられた。製塩土器を中心に、須恵器・土師器片が出土したほか、ごく少量の縄文式後期末の土器も発見された。この層は発掘時、焼土の拡り・小貝塚・礫の混入度・土層の部分的な相違などを手がかりに、3ないし4に分層された。赤変した焼土は、約1メートル四方ほどのひろがりをもち、周辺にはこわれて遊離した焼土塊がみられた。焼土の赤変部分はきわめて薄く、1センチ前後、厚いところで2センチという程度であったが、その下方深さ約5センチほどの間の土は堅くしまっていた。この堅い土層は、B1区にもみとめられたので、この層を境に、上を2層、下を3層とよんだ。2層には礫の混在がより多かった。B1区では、3層に小貝塚（混土貝層）が点々とみとめられたが、そのうちの大きなもので、範囲約1メートル×50センチほどである。ニナを主とする小貝層、カキを主とする小貝層などがあった。発掘時、貝層をふくむ層を3b層とし、その上方を3a、下方を3b下または3cとよび、B3区についてはほぼ相当する層を上下（3a・3b）にわけた。B1区の貝層下すなわち3b層下方では、太く短い天草式土器脚片の出土が目立った。

第Ⅲ層の最下層（発掘時の4a層）は、礫すくなく有機質の多い粘質のある黒褐色微砂層で、厚さは約20センチである。少数の天草式土器・須恵器・土師器・縄文式土器の破片を包含する。

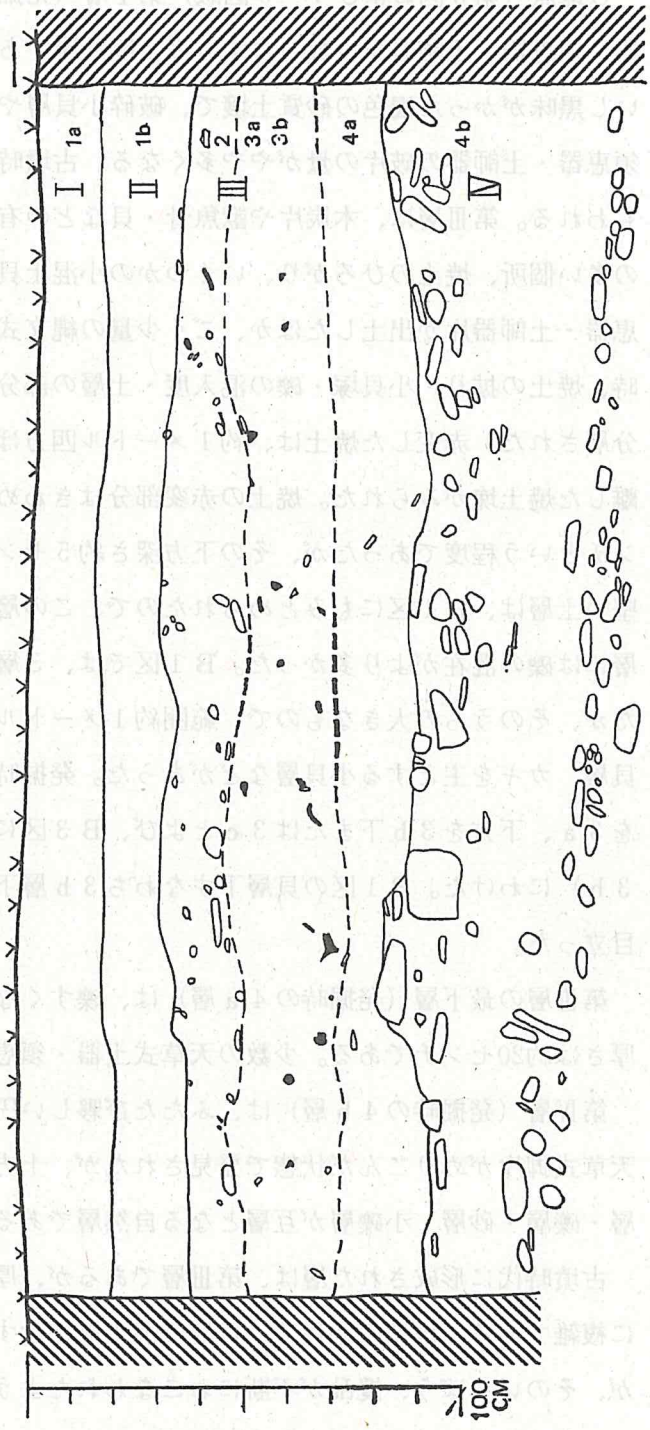
第Ⅳ層（発掘時の4b層）は、ふたたび夥しい円礫をふくむ砂層となる。B3区で太く短い天草式脚片がめりこんだ状態で発見されたが、上方からのおちこみと推定された。以下は、砂層・礫層・砂層・小礫層が互層となる自然層である。

古墳時代に形成された層は、第Ⅲ層であるが、厚さ約50～60センチのこの層の構成はかなりに複雑である。堆積の過程で、貝層や焼土層が示す生活面が形成されたことはあきらかであるが、そのいっぽう、攪乱が不断におこなわれたようで、破砕した貝殻や獣魚骨片などが上下全体に散在し、また新古両型式の須恵器も混在していた。縄文時代後期の地表は、おそらく第Ⅳ層上部ないし第Ⅲ層最下部（4a層）と推定されるが、あきらかではない。

遺跡の概略は以上であるが、要するにA地点は、縄文時代後期末の御領式土器を主とする包含層上に、古墳時代の集団が製塩土器を主とする堆積層をのこした個所であり、B地点は、おそらく縄文時代遺物がまばらに散布していた上に古墳時代集団が形成した堆積層である。小貝層・焼土のひろがり・局部的に堅い土壌面のほか、明確な遺構は、両地点ともに、みとめえなかった。B3区にみられた約1メートル四方の焼土のひろがりが製塩炉であったかどうかの確

証はないし、またＡ３区の第Ⅱ層東半部分にみられた非常に固化した土壌面の性質も明らかにしえなかった。製塩土器は各区とも、共伴の須恵器・土師器にくらべてはるかに多量に出土したが、いわゆる土器層を呈することはなかった。脚数片のまとまりはしばしば注意されたが、破片の多くはこの広大な土地に拡散したものと思われる。

製塩土器はことごとく破片であったが、とくに脚部片および口縁部片の残存状況が良好であった。木炭・灰も包含層各所でみとめられたが、炭層灰層をなす個所はみられなかった。獣・鳥・魚骨および貝類などの食料残滓が製塩土器包含層中にしばしばみられたが、このことを、上記した諸点とあわせかんがえると、発掘２地点とも、居住区と生産の場の両様相を示し、両者の中間的位置にあったという推定がみちびかれる。

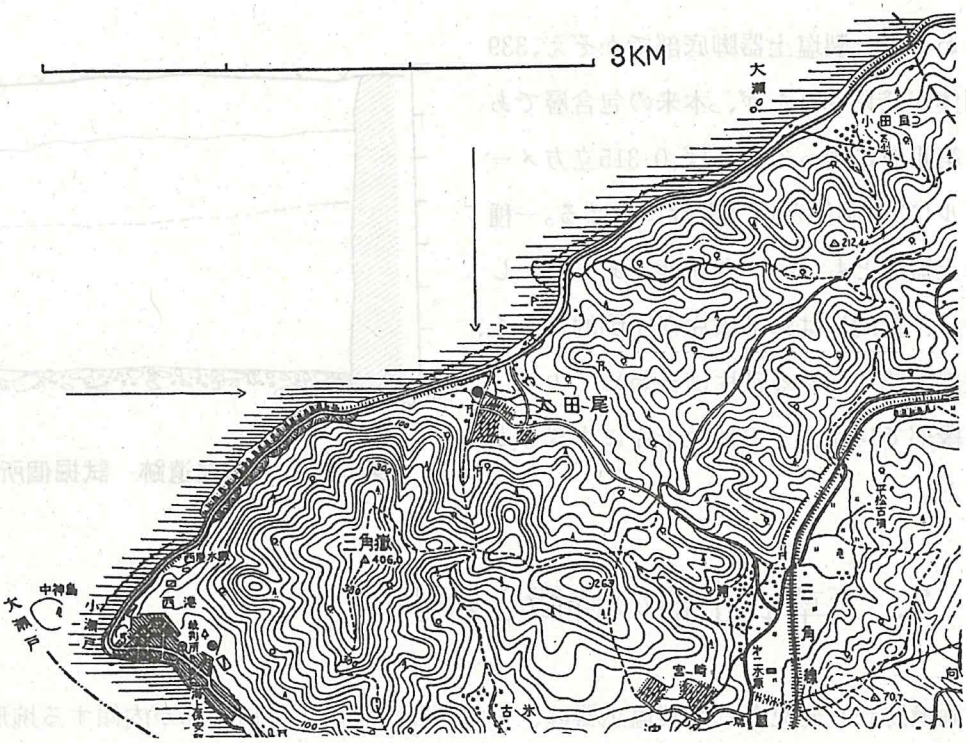


第３図　沖ノ原Ｂ３区南壁（黒は天草式製塩土器）

(2) 大田尾遺跡

宇土半島の最先端三角嶽東北の山麓、低く北東東にのびる丘陵の東南の緩斜面に立地する遺跡で、仏天川をへだてて、旧入江状の低地にのぞむ標高約12.3メートルの位置にある（第４図および第７図版）。現在は丘陵東側を迂回しないと海岸に出られないが、地形や遺跡立地からみて、かつては海水が入江をなして遺跡前方付近まで入りこんでいたものが仏天川と大川によって埋積されていったものと推定される。乙益重隆氏の教示によれば、大田尾一帯は昔から「潮の濃度が高く、良塩をつくる」という言い伝えがあるという。

1963年から1964年の春先にかけて、地主山本友一氏がミカン苗を植えるため、傾斜にそって



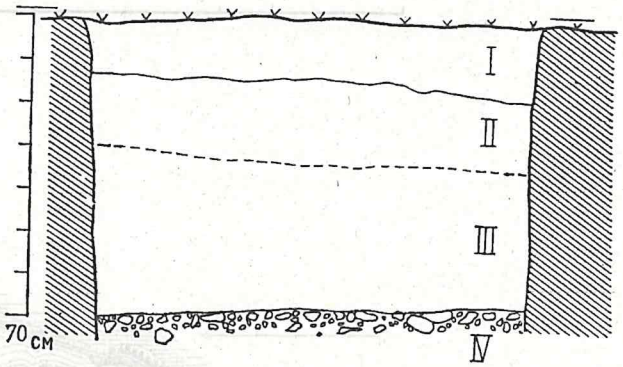
第４図　大田尾遺跡（黒点個所・二方向からの矢印で示す）

数本の溝をほったところ、夥しい遺物が出土したという。その報をうけた乙益氏が1964年２月13日に調査されたところによると、貝塚と製塩土器・須恵器・土師器の包含層がみとめられ、両者は接しながらも東西に主範囲をわかち、いずれも同じ古墳時代に属する。貝塚を構成する貝は、ハマグリ・カキ・ニシ・サザエ・シオフキ・ウミニナなどで、獣・鳥・魚骨を伴出する。乙益氏からの連絡をうけた筆者は、沖の原遺跡の発掘の帰途現地をおとずれ、すでに埋め戻されていた溝間のうち製塩土器包含個所を選んで、約１メートル四方の試掘的調査をおこない、あわせて表面観察をおこなった。

製塩土器を主とし須恵器・土師器・貝殻などをふくむ遺物は、ミカン園と化した畑地のほぼ全体に散見された。遺跡全体のひろがりは、未墾地や家屋もあって明確にはつかめなかったが、約30メートル四方を甚しくこえるとはおもえない。

試掘ピット（第５図）の第Ⅰ層（発掘時の表土層）は、小礫をふくむ厚さ12～18センチの褐色土層で、遺物をまったく包含しない。第Ⅱ層（発掘時の上層）は厚さ17～20センチの黒褐色土層で、製塩土器片若干と土師器片・須恵器片が発見された。この層は、つぎの第Ⅲ層に漸移し、その境界は明瞭でない。第Ⅲ層（発掘時の下層）は炭片・炭粉・灰を多く含有し、そのため黒色を呈する。粘質の強い土壌で、厚さ約30～40センチをはかる。製塩土器片をおびただしく包含するほか、須恵器４片・土師器12片が伴存した。この層の下方は、褐色の礫からなる第Ⅳ層で、遺物はみとめられず、自然層と判断された。古墳時代に形成された層は、第Ⅲ層であって、第Ⅱ層は第Ⅲ層の上部がその後攪乱されて二次的に生じた層である。この第Ⅱ層第Ⅲ層

あわせて、製塩土器脚底部でかぞえ、339個体が発見されたが、本来の包含層である第Ⅲ層に限っていえば、0.315立方メートルに324個体という多数にのぼる。一種の土器層ともいうべき状態であった。しかし、量的には脚部破片が圧倒的に多く、埦部の認知できる破片はきわめて少く、口縁部で14片、その他数十片にすぎなかった。



第５図　大田尾遺跡　試掘個所の位置

３．天草式土器の特徴と群別

両遺跡から発見された製塩土器は、一本の長い脚の上に口縁部が内傾する埦形の器がのる、きわめて特徴的な器形をもち、一見して他の土器類と区別できる。いま、各部の名称を第６図のようにさだめて、以下の記載の便とする。もっとも完形は１例もないので、図は模式図である。また、保存状態については、すでにふれたように、両遺跡とも、脚の保存がもっともよく、ついで埦口縁部、もっとも保存が悪く小片細片となっている部分は、口縁部より下方の埦部である。

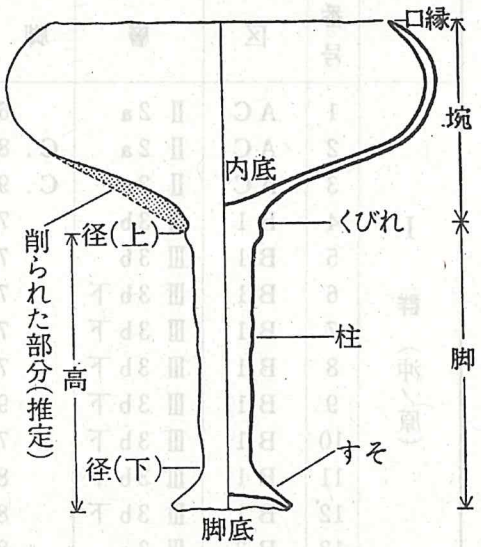
胎土に多くの砂粒、若干の細礫がふくまれる点で、埦と脚は同じである。とくに埦外表および脚は、ヘラみがきなどが施されていないので、手の感触で他種の土器から識別できるほどである。

製作は、まず脚をつくり、ついで埦をつくり足していったものとおもわれる。その際、脚と埦の境は粘土で太目に補強され、のち削りだされている(第８図版上)。脚には指と掌でにぎった痕が凹凸となってみとめられる。すそは、脚下端の粘土を拡張してつくりだしたにすぎず、叮嚀な整形はなされず、凹凸のはげしい不整形を呈することが多い。埦は粘土帯をつみあげてつくられたものと想像されるが、つぎ目などの痕跡はあきらかでない。全形がととのったのち、埦下底は上から下にむかってヘラ削りがれるが、その際、脚を指と掌でにぎっておこなわれたとみえ、削りをとめた痕がくびれとしてつくりだされる。ある程度乾燥してから鋭利なヘラで削られたもののようで、胎土中の数ミリの礫が切断されている場合がある。削り痕のカーブの具合からみても、おそらく貝殻ないしそれに類したものを使用したらしい。埦の外表は、粘土のつぎ目を消す程度に指先で整形されているが、なお、張りだした胴部を中心に皺状の小亀裂がみとめられる例が多い。内表は口縁から底面にいたるまで指などによる叮嚀な整形がなされている。口縁部は整えられることなく、うすくつくりはなされたままで、ととのった円を示さ

第1表　天草式製塩土器脚部計測表（単位：mm）（Cは推定値）

	番号	区	層	脚高	脚径 上	脚径 下	脚底径	備考
Ⅰ群（沖ノ原）	1	AC	Ⅱ 2a	65	42	26	52	高 65～95（平均78.9） 径（上）32～51 （下）24～31 底径 50～70（平均56.2）
	2	AC	Ⅱ 2a	C. 80	40	30	—	
	3	AC	Ⅱ 2a	C. 95	48	29	—	
	4	B 1	Ⅲ 3b	70	32	24	50	
	5	B 1	Ⅲ 3b	70	38	28	56	
	6	B 1	Ⅲ 3b下	75	38	29	61	
	7	B 1	Ⅲ 3b下	73	41	29	C.50	
	8	B 1	Ⅲ 3b下	78	43	29	C.70	
	9	B 1	Ⅲ 3b下	90	40	31	C.48	
	10	B 1	Ⅲ 3b下	75	45	26	C.52	
	11	B 1	Ⅲ 3b下	85	42	28	C.58	
	12	B 1	Ⅲ 3b下	85	43	31	—	
	13	B 3	Ⅲ 3a	85	51	30	52	
Ⅱ群（沖ノ原）	1	A 1	Ⅱ 1b	130	35	22	50	高 90～135（平均112.3） 径（上）27～42 （下）16～29 底径 41～67（平均49）
	2	A 1	Ⅱ 1b	125	31	23	57	
	3	A 1	Ⅱ 1b	135	36	21	47	
	4	A 1	Ⅱ 2a	125	37	17	41	
	5	A 3	Ⅱ 2a	C.120	30	21	45	
	6	A 3	Ⅱ 2a	107	42	29	C.67	
	7	AC	Ⅱ 2a	115	36	22	—	
	8	B 1	Ⅲ 3b	105	38	22	—	
	9	B 1	Ⅲ 3b	105	31	16	42	
	10	B 1	Ⅲ 3b	C.115	37	21	—	
	11	B 1	Ⅲ 3b	C.100	38	20	—	
	12	B 1	Ⅲ 3b	90	32	22	46	
	13	B 1	Ⅲ 3b	115	30	25	61	
	14	B 1	Ⅲ 3b	100	33	17	59	
	15	B 1	Ⅲ 3b	(55)	(22)	(15)	(41)	
	16	B 1	Ⅲ 3b下	105	27	22	45	
	17	B 1	Ⅲ 3b下	110	28	22	45	
	18	B 3	Ⅲ 3b	C.120～	—	21	43	
	19	B 3	Ⅲ 3b	C.105	36	20	—	
Ⅲ群（大田尾）	1		表採	135	32	21	45	高 135～150（平均139.2） 径（上）30～38 （下）18～22 底径 37～47（平均41.9）
	2		表採	137	37	21	37	
	3		表採	140	32	19	42	
	4		表採	140	38	21	—	
	5		表採	145	37	19	—	
	6		表採	150	30	22	47	
	7		Ⅱ	135	36	18	47	
	8		Ⅱ	140	34	19	43	
	9		Ⅲ	135	37	20	37	
	10		Ⅲ	135	38	21	41	
	11		Ⅲ	138	33	21	—	
	12		Ⅲ	140	34.5	21	40	
	13		Ⅲ	140	36	20	40	

ず、むしろ凹凸不整である。椀脚を通じて文様はほどこされず、また刷毛目・ヘラ磨きなどの整形痕もみられない。削りだしのほかは、すべて指と掌で製作したものとおもわれる。



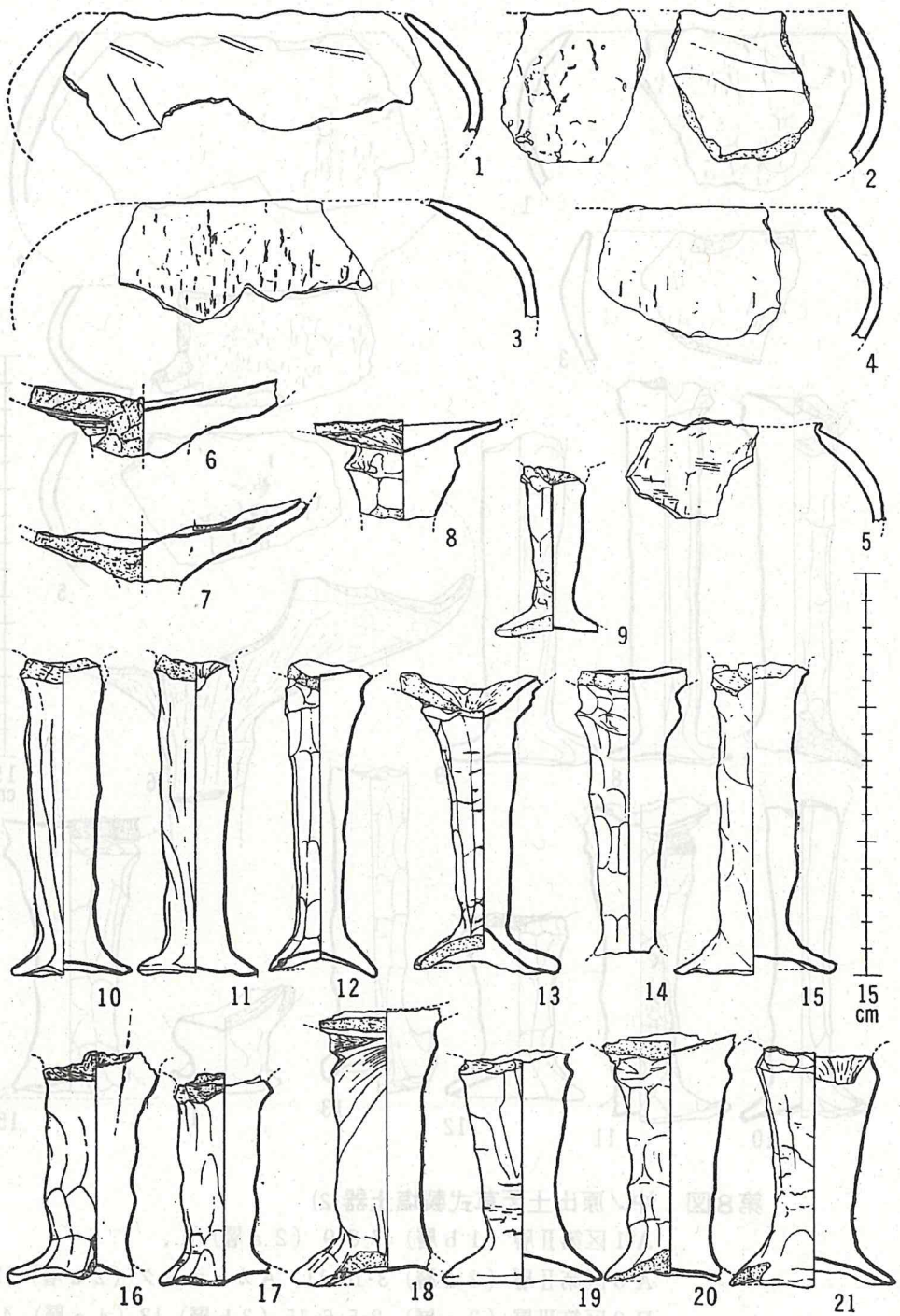
第6図　天草式製塩土器模式図

色調は、淡褐色を基調に、黄褐色・淡黄色・灰色・灰白色・灰青色・灰黄色・褐色・赤褐色などを呈するが、それは個体別の主色調の差であるとともに、同一個体における部分的な色調変化でもある。たとえば、淡褐色を主色調とする個体の一部が灰色と淡黄色、という具合である。伴出する土師器の多くが、内外表ともそのほぼ全面が褐色または淡褐色ないし明褐色である点と対照的である。これは、焼成そのものが土師器と異ったより「粗雑な」方法でなされたためか、あるいは製塩土器として加熱使用される過程でそのように変色したのか、明確には指摘できないが、おそらく両者とも作用したと考えてよいだろう。内外表に対して、器壁中の色調もさまざまである。椀部はうすくて熱の通りもよいためか、がいして淡褐色ないしそれに近い色調を呈するが、なかには灰色ないし灰黒色を呈するものもある。それに対して、脚は太いため熱の通りが悪いことがあってか、一般に灰黒色ないし黒色がつよい。もっとも、中には中心まで表面と同じ淡褐色系の色調を呈するものもある。

椀の大きさ・形状をよく復原できる資料は、大形破片が稀であることや、凹凸不整であることなどのため、ひじょうに少い。破片から復原できる一般的な器形は、底面からゆるいカーブで拡がりながらしだいにたちあがり、最大径の胴部をつくったのち、ほぼ同じようなカーブでこんどは内わんして口縁端にいたる形状で、他地方の製塩土器とちがい、径にくらべて浅い器形である。推定復原すれば、口径11～12センチ、胴径16～19センチ、深さ7～9センチ程度が一般であろう。次にみる脚の場合のように、いくつかの型式にわけることは、現状では困難である。以上の特徴をもつ土器を坂本経堯氏の命名により天草式土器とよぶ。

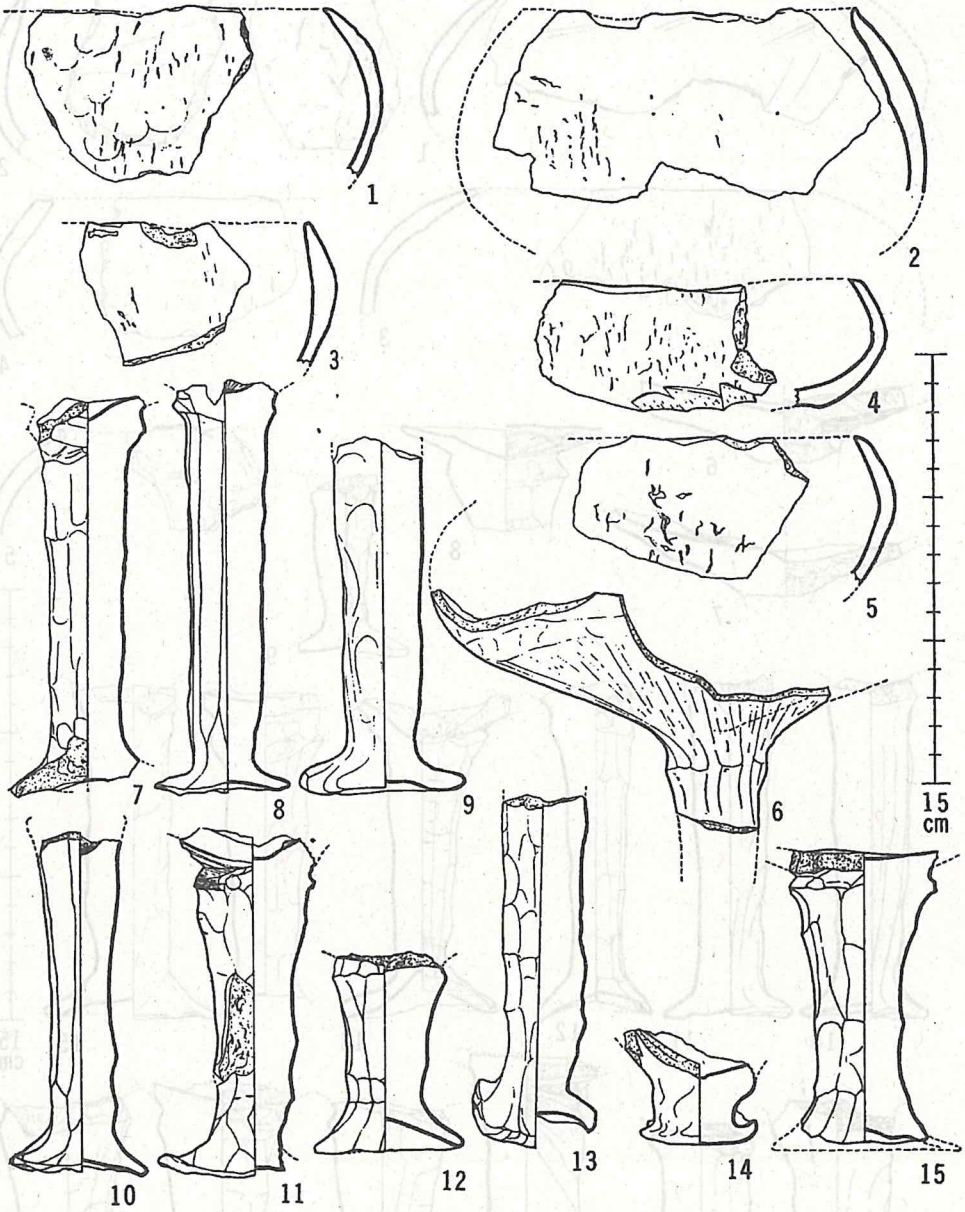
脚は、例外的に短小なごく稀な例をのぞくと、高・径の点で3群に区別できる(第1表)。いま、高・径とも測定ないし復原測定できる完形品ないし完形に近い品は、沖の原遺跡で32例、大田尾遺跡で13例、計45例である。

第Ⅰ群は、一見して太く短い特徴を指摘できる脚で（第7図16～21、第8図12・15および第8図版下)、沖の原出土品にみられ、大田尾にはみられない。その高（脚底からくびれ直下までとする。以下同じ）は、9.5～6.5センチで、大部分が8.5～7.5センチの範囲に入り、平均すると7.89センチとなる。柱には凹凸があり断面正円形を呈さない で、径はその平径はその平均



第7図　沖ノ原出土天草式製塩土器(1) B 1区第Ⅲ層出土品(3 b 層) 1～5
8・9・12～16 (3 b 下層) 6・7・10・11・17～21

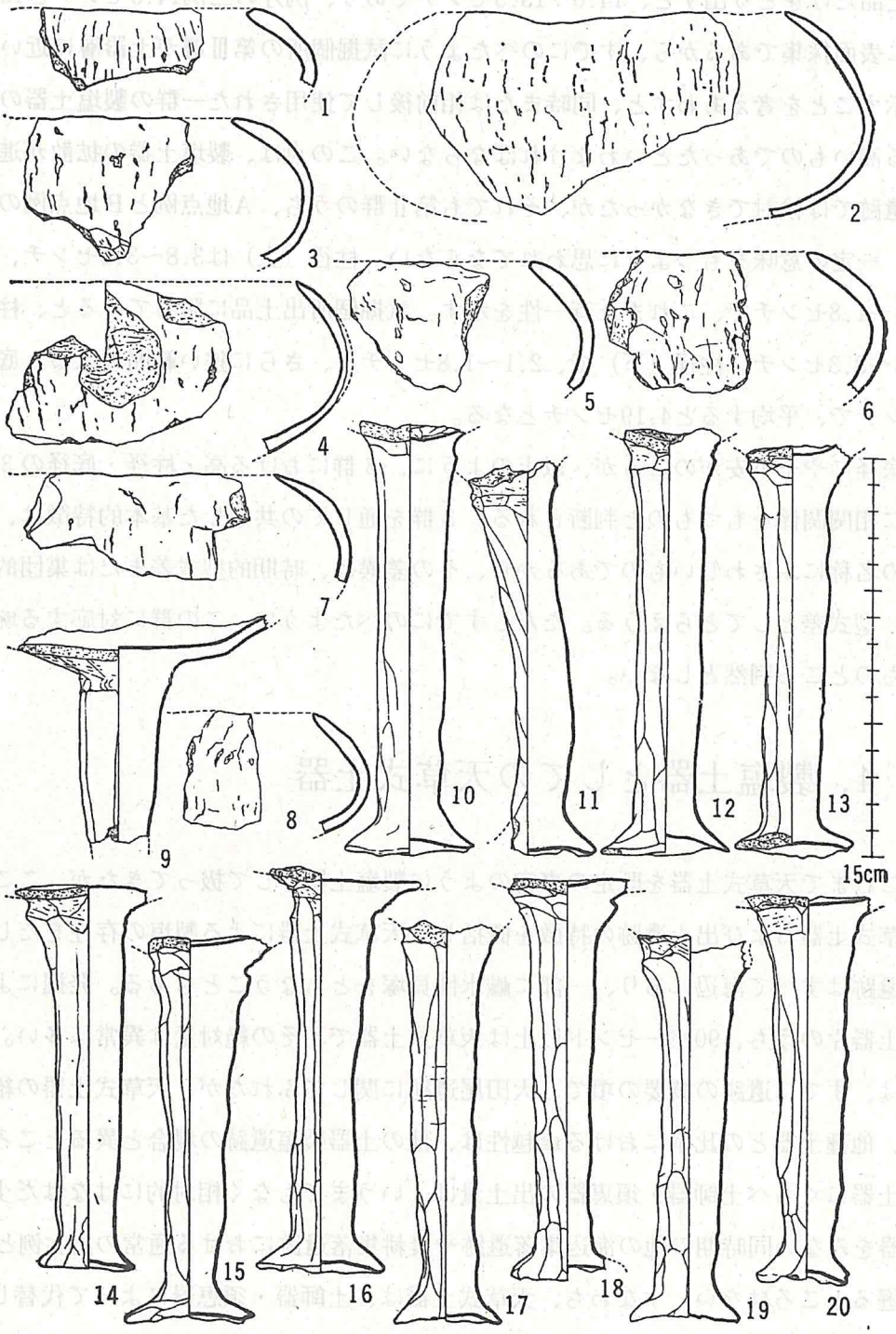
柱上方のもっとも太い個所と、柱下方のもっとも細い個所の2個所において測定し、前者を柱径(上)、後者を柱径(下)とよぶこととした(以下同じ)。柱径(上)は、5.1～3.2センチで、1例をのぞいて、3.8センチ以上である。柱径(下)は2.4～3.1センチで、同じく1例をのぞいて、2.6センチ以上である。すそ部を半欠ないし欠失している例が多いため、底径はあまり良好な資料といえないが、やはり、群ごとの特徴を示すようにおもわれるので、表示した。それによる



第8図　沖ノ原出土天草式製塩土器(2)
A１区第Ⅱ層（１ｂ層）7･8･9（２ａ層）１、
A３区第Ⅱ層（２ａ層）3･10･11、Aカッテング（２ａ層）12、
B３区第Ⅲ層（３ａ層）2･5･6･15（３ｂ層）13（４ａ層）４･14

と、5.0～7.0センチで、平均すると、5.62センチとなる。

第Ⅱ群の脚も、沖の原遺跡出土品で細く長い点で第Ⅰ群と容易に識別できる（第７図10～15、第８図７～11・13および第９図版下)。(以下の数値から、例外的な短細品Ⅱ－14（第７図９）をのぞく。）まず、高は13.5～9.0センチで、大部分が12.5～10.5センチの範囲に入り、平均は11.23センチである。柱径（上）は、4.2～2.7センチで、１例をのぞき3.8センチ以下で、第Ⅰ群とあきらかに対照的である。柱径（下）は、2.9～1.6センチで、大部分は2.3～2.0センチの範囲にはいり、これまた第Ⅰ群との間に相違を示す。底径は、6.7～4.1センチで、平均すると、



第９図　大田尾出土天草式製塩土器

表面採集　2･10～16、第Ⅱ層　1、第Ⅲ層３～９・17～20

4.9センチとなる。

第Ⅲ群は、すべて大田尾遺跡の資料である（第9図および第10図版下）。第Ⅱ群に以て細長いが、その度合はさらに強い。高径ともひじょうに斉一性を示す。高は、15.0～13.5センチで、２例をのぞき14.0～13.5センチという狭い範囲にはいる。平均値は13.92センチで、第Ⅱ群平均値よりも2.69センチ高く、第Ⅰ群平均値の倍に近い。なお、表面採集品をのぞき、試掘個所の

出土品だけをとり出すと、14.0〜13.5センチであり、例外の二例14.5センチと15.0センチはともに表面採集であるから、すでにのべたように試掘個所の第Ⅲ層が土器層に近い一括廃棄状態を示すことを考えあわすと、同時または相前後して使用された一群の製塩土器の斉一性はすこぶる高いものであったといわなければならない。この点は、製塩土器の拡散が進んでいた沖の原遺跡では検討できなかったが、それでも第Ⅱ群のうち、A地点例とB地点例の高における差は、一定の意味をもつように思われてならない。柱径（上）は3.8〜3.0センチ、柱径（下）は2.2〜1.8センチで、これまた斉一性を示す。試掘個所出土品に限ってみると、柱径（上）で、3.8〜3.3センチ、柱径（下）で、2.1〜1.8センチと、さらに狭い範囲に入る。底径は、4.7〜3.7センチで、平均すると4.19センチとなる。

底径にやや不安がのこるが、以上のように、3群における高・柱径・底径の3点の差異は相互に相関関係をもつものと判断される。3群を通じての共通した基本的特徴は、天草式製塩土器の名称にふさわしいものであるから、その差異は、時期的型式差または集団的（ないし地域的）型式差としてとらえうる。ただしすでにのべたように、この群に対応する椀差異は、こんにちのところ判然としない。

4．製塩土器としての天草式土器

これまで天草式土器を既定の事実のように製塩土器として扱ってきたが、ここであらためて、天草式土器および出土遺跡の特徴を概括し、天草式土器による製塩の存在をたしかめておこう。

遺跡はすべて海辺にあり、一部に鹹水性貝塚をともなうこともある。発掘によって発見された土器片のうち、90パーセント以上は天草式土器で、その絶対量は異常に多い。その点については、すでに遺跡の概要の項で、大田尾遺跡に関してふれたが、天草式土器の絶対量の莫大さと、他種土器との比率における卓越性は、他の土器製塩遺跡の場合と異るところがない。天草式土器にくらべ土師器・須恵器の出土量は、いうまでもなく相対的にはなはだ少いが、天草式土器をみない同時期の他の海辺集落遺跡や農耕集落遺跡における通常の出在例とくらべてとくに遜るところはない。すなわち、天草式土器は、土師器・須恵器によって代替しうる存在ではなく、この種遺跡において独特な用途をもつものであったことは確実である。

天草式土器包含層とくに大田尾遺跡試掘個所でみられたように密集する個所では、炭片・炭粉・灰が多いことが注意される。このことは、天草式土器が二次的加熱をうけたと考えられる点や、ことごとくが破片と化している点とかかわってくる。破損については、ほとんどが椀と脚との境付近で折損しているほか、椀の小片・細片化がいちぢるしい。大田尾遺跡の試掘個所では、すでにのべたように第Ⅲ層において、脚324個に対し、眼につくように口縁部片はわずかに14片、その他の椀破片数十片という状態で、その全量が脚324個にふさわしいとはとうてい考

えられない。この大田尾遺跡試掘個所の状況が、おもに脚を廃棄した場所であることに由来するため恰好な資料となりえないということになっても、沖の原遺跡発掘区において、脚部に対する埦部の数センチ角大以上の破片は、口縁部にやや目立つにすぎず、全体としてはいちぢるしくすくなく、多くが小片、細片ないし粉状と化している事実が注目されてよい。また、埦内底部などにみられる剝離の痕跡ないし剝離性をもつ例もみられるが、この現像と小片・細片化の事実とは無関係とはおもわれない。

以上のように、土器製塩がおこなわれたことがすでに証明されている他地方の遺跡遺物の状況と基本的に共通する諸特徴をそなえていることはあきらかであり、したがって天草式土器もまた製塩土器とみとめるほかはない。

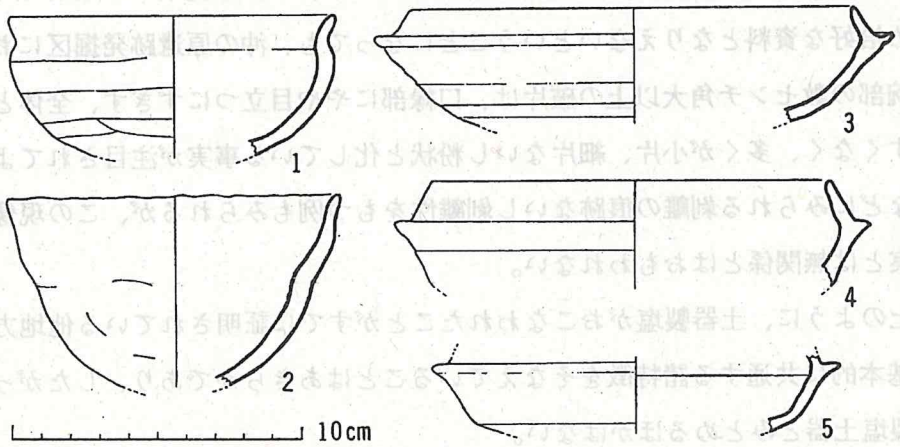
5．天草式製塩土器伴出の須恵器

さきに、脚に3群をみとめそれを型式差と考えたが、具体的にはいかなる差異であろうか。まず、伴出の土器とくに須恵器を手がかりに、編年差が存在するかどうかを検討しよう。

大田尾遺跡の試掘個所では、第Ⅱ層から須恵器8片（坏身2片、その他6片)、土師器片約40片（坏大形口縁部2片、甕口縁部2片のほか、多くは甕体部破片）が、第Ⅲ層からは、須恵器片4片（坏身2、瓶頸部1、その他大形品体部片1)、土師器12片(埦1、小形鉢1、その他甕体部片など10）が出土している。第Ⅱ層は第Ⅲ層へ漸移し、すでにのべたように本来の第Ⅲ層上部が当時またはその後に攪乱された層であると考えられるが、この点は第Ⅱ層において製塩土器脚部15個に対して須恵器片・土師器片の量がかえってⅢ層よりも多いという事実からもうかがえる。したがって、ここでは、主として第Ⅲ層出土品についてとりあげる。

第Ⅲ層発見の須恵器坏は、2片とも小片であるが、復原して図示した（第10図4･5)。ともに堅緻な焼成で、つくりも良好である。色調は灰青色である。形態からみて6世紀中葉に属するものと考えられる。瓶頸部片もこの時期に矛盾するものではない。また第Ⅱ層発見の坏（第10図3）は、この時期ないしやや新しいと考えられる。第Ⅲ層出土土師器の一つはかるく肩をつくりだした小形の埦（第10図1）で、褐色を呈し、胴部以下にヘラ削りの痕がみられる。復原できる他の一つ（第10図2）は、小形の鉢形で、赤味をおびた褐色を呈し、砂粒および細礫を多くふくむ点で、前者と異る。おそらく、この地の製塩集団の手になる品であろう。甕形土器片と推定されるその他の小片の多くは、外表に刷毛目がほどこされ、また内表にヘラ削の痕がみられるのもある。いずれも、先の須恵器坏に共存するものとみてよい。

沖の原遺跡では、包含層形成時における上下左右の攪乱があり、上下の関係をそのまま編年的関係におきかえることはできなかったが、Ｂ１区の貝層部分を手がかりに、その局所における貝層をふくめた上層（３ｂ層まで）と、その下層（３ｂ下層ないし３ｃ・４ａ層）とは、先



第10図　大田尾出土土師器（左列）および須恵器（右列）

第Ⅱ層　3，第Ⅲ層　1・2・4・5

後関係としてとらえうるようにおもわれる。発掘中すでに気づいたことであるが、３ｂ下層以下において発見される天草式土器脚の多くは第Ⅰ群に属し、３ｂ層ないしその上方の包含層では、第Ⅱ群の脚が圧倒的に多い。第１表は、計測できる資料を貝層部分の局所にかぎらずすべての発掘区から求めたため、第Ⅰ群の中にＢ１区３ｂ層・Ｂ３区３ａ層などの出土品が、第Ⅱ群にＢ１区３ｂ下層出土品がふくまれているが、それにしても、第Ⅰ群が３ｂ下層に、第Ⅱ群が３ｂ層に集中する傾向は充分うかがえる。すなわち、両群の編年的差異はほぼあきらかである。しかし、伴存の土師器・須恵器は、かならずしもこのような上下関係を局所的にも示さなかった。これは両者が製塩土器にくらべ出土量においてはるかに少なかったため量的比率の傾向を問題にしえなかったことにもよると考えられる。土師器には、坏・甕が多くみられ、ほかに鉢・椀・壺が少量ともなった（第11図左列）。須恵器は、坏が圧倒的に多く、ついで甕・高坏・瓶・瓶の類は稀であった（第11図右列）。

いま、天草式土器包含層すなわちＡ区第Ⅱ層・Ｂ区第Ⅲ層から出土した須恵器を取りあげてみると、いくつかの型式がみとめられる。いま、坏を中心にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４類にわけた。

Ａ類　立ち上りが強く端面をやや内方に傾斜させた口縁部（高さ17ミリ）をもち、体部にいわゆるカキ目を施した口径10.3センチの坏身(20)、わずかにひらき端面を水平またはやや内傾させた口縁部をもち、天井部と口縁部の境界に鋭い稜線がはしる坏蓋（18・19）に代表される類で、ほかに高坏・高坏蓋・壺口縁などがみられる。高坏は一段透しの短太のもの(21)である。全体として量ははなはだ少なく、10片未満にすぎない。

Ｂ類　やや内傾する立ち上り（高15ミリ前後）で端面がまるくおさめられるか、あるいは端面内に細い沈線がひかれる坏身（16・17）、内側に強く傾斜して浅い段状の凹線を走らす端面をもつ外びらきの口縁部で、天井部との境の稜線が明瞭な坏蓋（15）で代集される類である。器形は大きく、坏身で口径12.4～13センチをはかる。ほかに壺体部片、坏片などがある。坏を主に

破片数は多く、数十個体分がA・B両区にまたがって発見されている。

C類　立ち上りはさらに低く（高さ12ミリ前後）内傾をつよめる口縁部で、口端を尖り気味につくる坏身（13・14）、口端はまるく外びらきで、天井部との境界に凹線が入るにすぎない低平な坏蓋（12）である。大部分がA３区に集中して発見され、B類にくらべ数量は少ない。

D類　内傾の強い立ち上りで受部とともに短小（高さ6.5ミリ）で薄くつくられ、体部と底部の間に段上のカーブをつくる低小な灰白色の坏身（11）である。B３区から２片が発見されているにすぎない。

以上のうち、B類は大田尾第Ⅲ層出土須恵器と同じ型式であり、各区からもっとも普通的に出土し、数量も多い。それに対してC類はA３区にほとんど偏在しており、D類にいたっては、わずか２片の出土にすぎない。いっぽう、大田尾出土第Ⅲ群製塩土器脚部がどうみても沖の原出土第Ⅰ群脚部よりも第Ⅱ群脚部に型式学的に近いことは明らかであり、その差は、のちにのべるように地域（集団）差である蓋然性が高い。このようにみてくると、第Ⅱ群脚は須恵器B類の出現時もしくはその時期のうちに成立し、あるいはC類の時期に至るまで継続していたとすることが、もっとも妥当なようにおもわれる。とすれば、第Ⅰ群脚はA類須恵器の時期以降B類須恵器の早い時期にいたる間に出現した型式とするほかはない。第Ⅰ群脚は、A・B両区とも出土しているが、その量は第Ⅱ群にくらべてはるかに少ない。これが発掘区という限定された局所的現象でないとすれば、この地における土器製塩は、第Ⅱ群にいたって盛行するということになる。そのことはまた、この時期に多量の須恵器が入手されたことと関係するであろう。

第Ⅱ群と第Ⅲ群との関係は、共存須恵器が同一型式であるかこと、おそらく地域すなわち集団による差異と考えることが、もっとも妥当であろう。なお大田尾遺跡では、第Ⅲ群伴出品よりも古い型式の須恵器が表面採集されているが、試掘個所と別地点に第Ⅰ群ないし類似の製塩土器包含層が存在することを示すものかもしれない。

6. む　す　び

天草式土器は脚埦とも他地方製塩土器にみられないきわめて特徴的な形態をもつが、これにもっとも近い型式の製塩土器を求めれば、美濃ヵ浜式土器第２類・第３類をあげることができる。もっともその場合でも、類似は長脚という形状の点だけであって、その大きさや容器部分の形態の差は大きい。

美濃ヵ浜式土器の変遷については、かつて本村豪章氏や筆者がのべたことがあるが、弥生時代中期後葉に児島を中心に出現し後期にその分布を備讃瀬戸の各地に拡大した西日本土器製塩の手法が、おそくとも古墳時代前期に入ってから土器製塩の手法がもちこまれた渥美半島や知

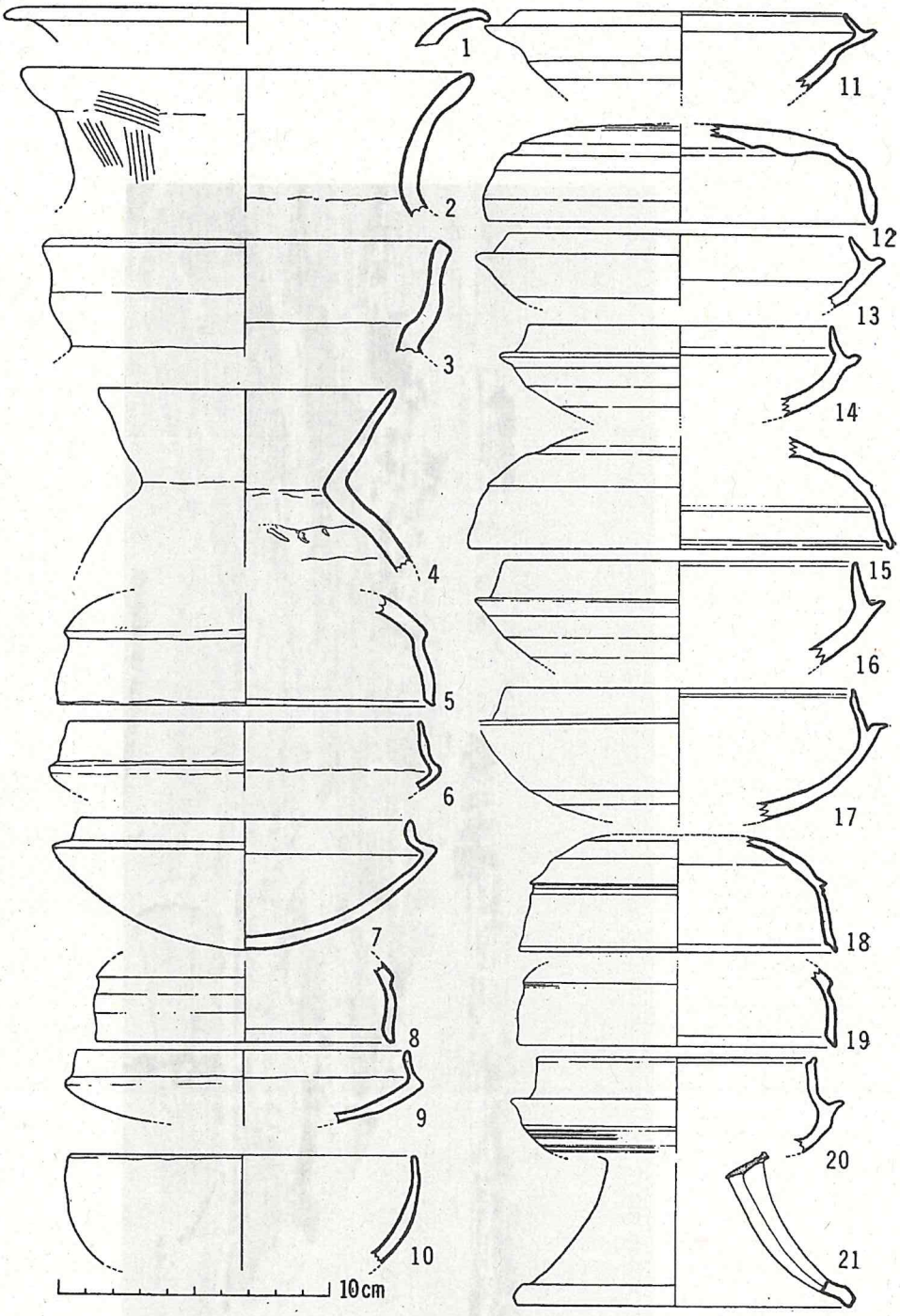
多半島あるいは能登半島の各地において、その形態差はともかく、脚が長化する方向を辿ったことと同じ動きである。東方での脚の変化は、脚下端が細まる脚端尖化方向をとり、西方では美濃ヵ浜式土器・天草式土器とも、脚柱が長化し脚すその形状は基本的には変らない脚柱化方をとる。東群タイプと西群タイプとでも名付けうる2つの変化方向である。

それに対して、古く弥生時代に土器製塩がはじまった備讃瀬戸から紀伊にかけての広い地域および畿内の北辺若狭では、倒坏形脚台をもつ製塩土器が、丸底ないし平底風の丸底をもつ小形鉢形のタイプに変化する。変化の時期は、ほぼ共通して五世紀末から六世紀初頭にかけての頃である。これを中央群とし、弥生時代以来底径の大小はあれ終始平底を保持する東北群を加えると、六世紀を前後する時期の日本の製塩土器は、大づかみにしてとして把握できる。この差異は、伝統的な「地域性」に加えて、炉構造の相違などとからみあって生じたものとおもわれるが、そのことはまた、製塩集団への政治的な支配とからむ分業の展開における差異を根底にもつ動きでもあったろうと思われる。

さて、天草式土器が、山口地方の美濃ヵ浜式を直接の祖として誕生したものかどうかについては、かならずしも明言できない。こんにち、天草・宇土地方には、すでにみた天草式土器に先行する古い製塩土器は知られていない。九州全体をながめると、備讃瀬戸の倒坏形脚台をもつ師楽式土器に形状がよく似たものが、これまで長崎県と鹿児島県とに発見されている。しかし、僅少な資料であるうえ、製塩にかかわる遺跡状況がまったく判明していないので、判断はしばらく保留せざるをえない。また、伴出の須恵器を手がかりに、長脚化のはじまる美濃ヵ浜式土器と天草式土器第Ⅰ群を比較することも、資料が僅少で不安定であるため、現状では、先後をきめるというより、五世紀末ないし六世紀前葉という幅広い年代の中に両者ともあらわれるというおよその推定以外には何も物語らない。

いっぽう、たしかに山口地方では、倒坏形師楽式脚台から脚柱の長化への変遷が型式学的にも連続して辿られるので、他地で完成した長脚の影響が突如作用して美濃浜式長脚を生みだしたとはとうてい考えられない。また山口地方におけるこの型式学的連続の事実をもって天草式土器誕生についての議論の底にすえることも、後者の先行型式が天草・宇土地方さらには九州地方において絶無というより未確認であるかもしれない現状においては、妥当なこととはいえない。このように、不充分な資料によって系譜をこれ以上論ずることは、この場合においてもまた不毛である。したがって、ここでは、脚の長化は、五世紀末から六世紀前葉にかけての頃、両地域において相前後してあらわれたこと、長脚化の途を同じようにあゆんだ両地域における製塩技術構造の共通性とその間の交流関係の存在、およびそれにもかかわらず脚の大小・容器部分の形態などにみられる差異を生んだ地域性を、確認しておくにとどめよう。

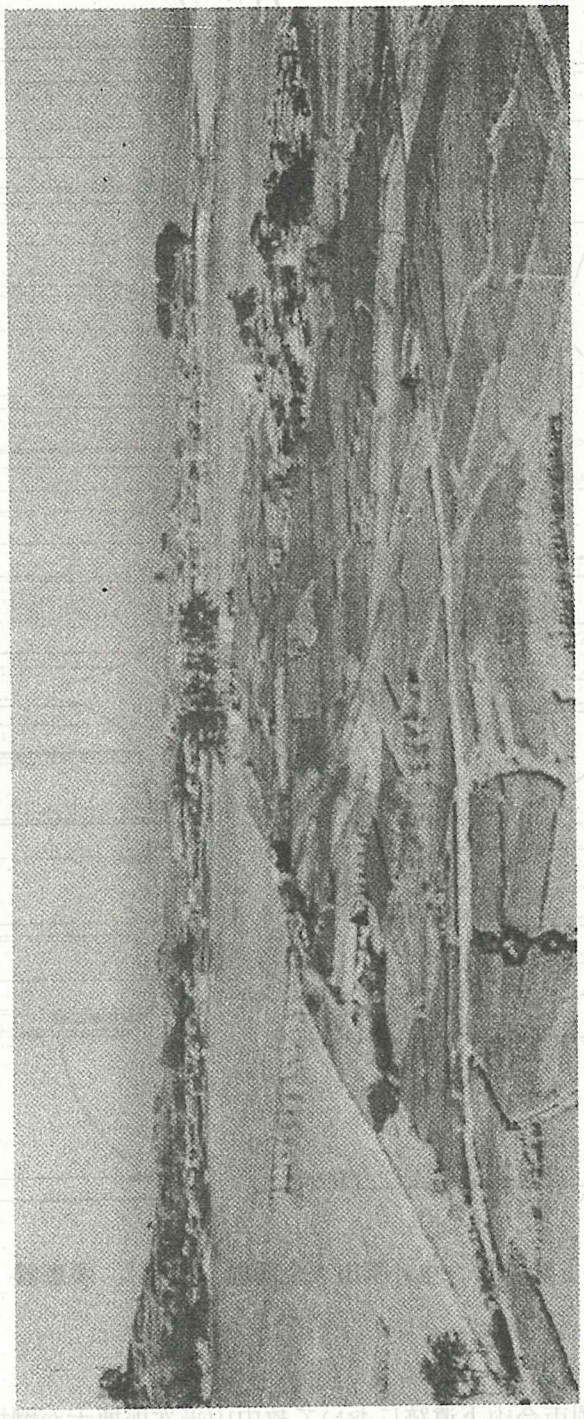
なお、天草式土器第Ⅱ・Ⅲ群に後続する製塩土器は、九州全域においてこんにちなお未確認であることを付信する。



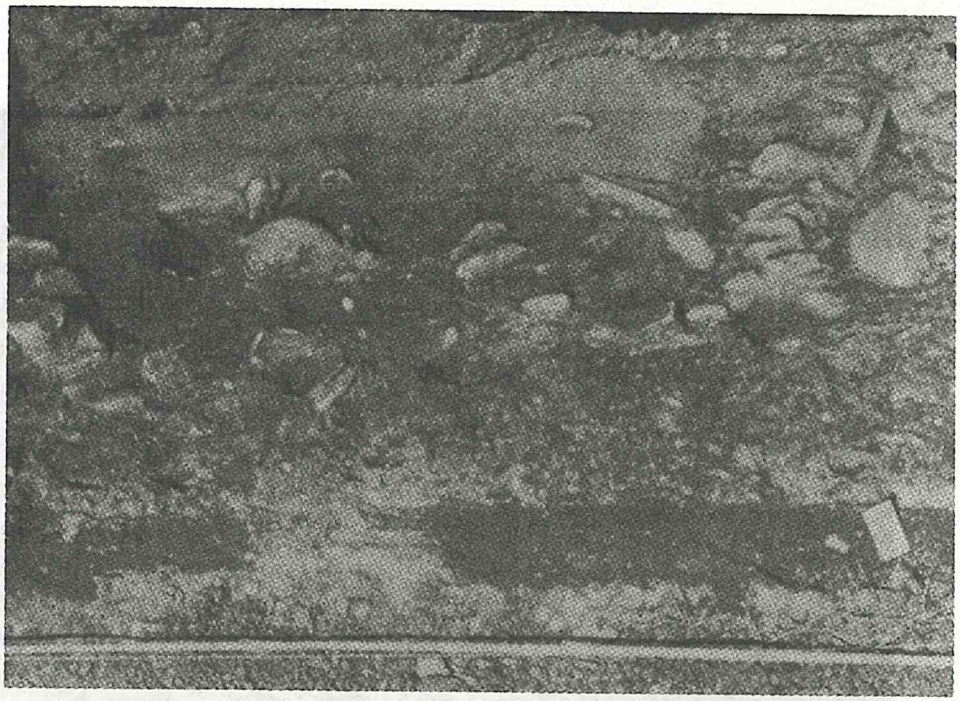
第11図　沖ノ原出土土師器（左列）、須恵器（右列）

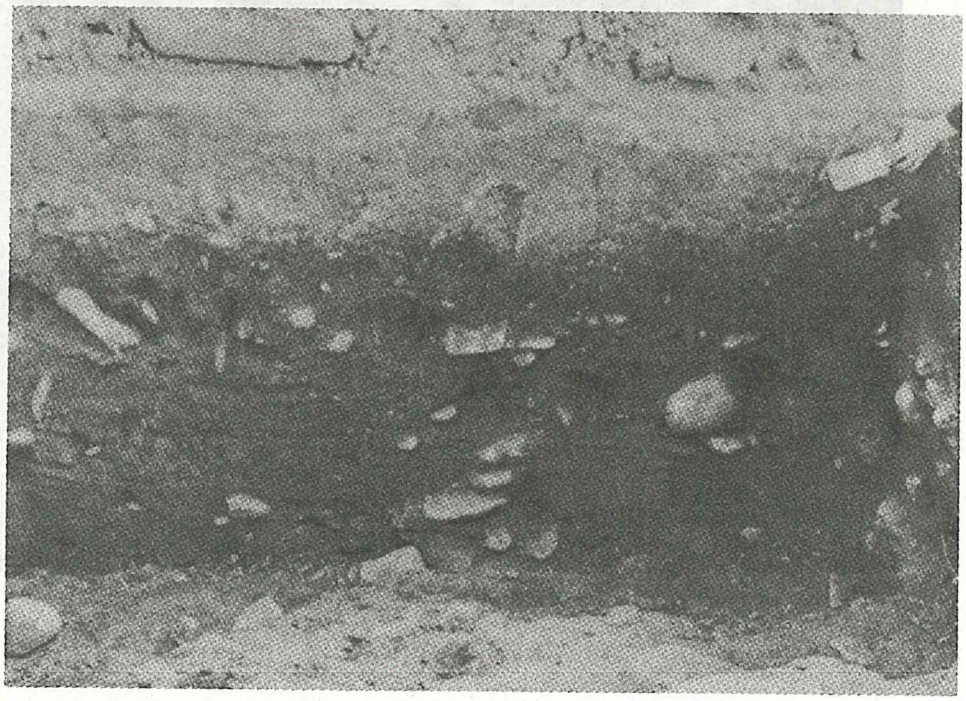
追記　成稿後、福岡市今山下遺跡において故中山平次郎博士が倒坏形の脚台をもつ製塩土器を採集していることを知った。

橋口達也「福岡市今山下遺跡の製塩土器」『九州考古学』49・50　1974年



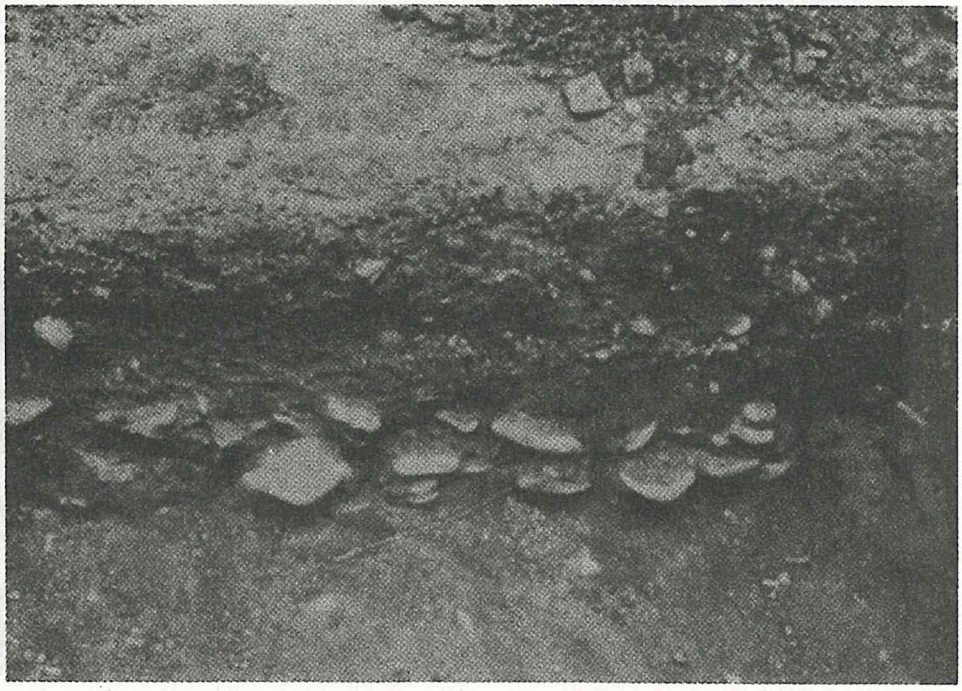
第１図版　沖ノ原遺跡全景



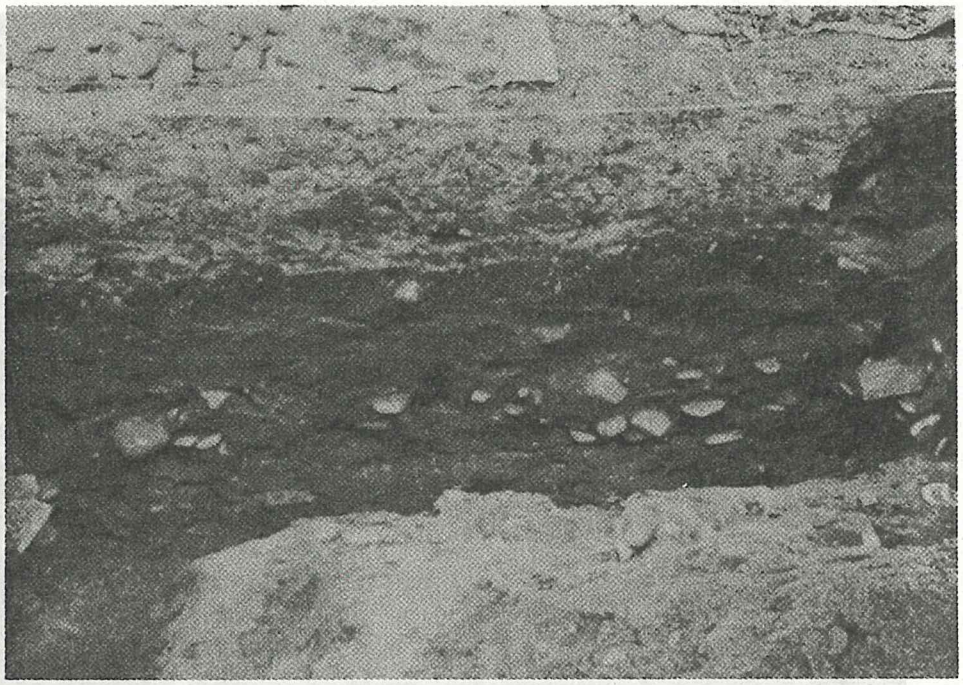


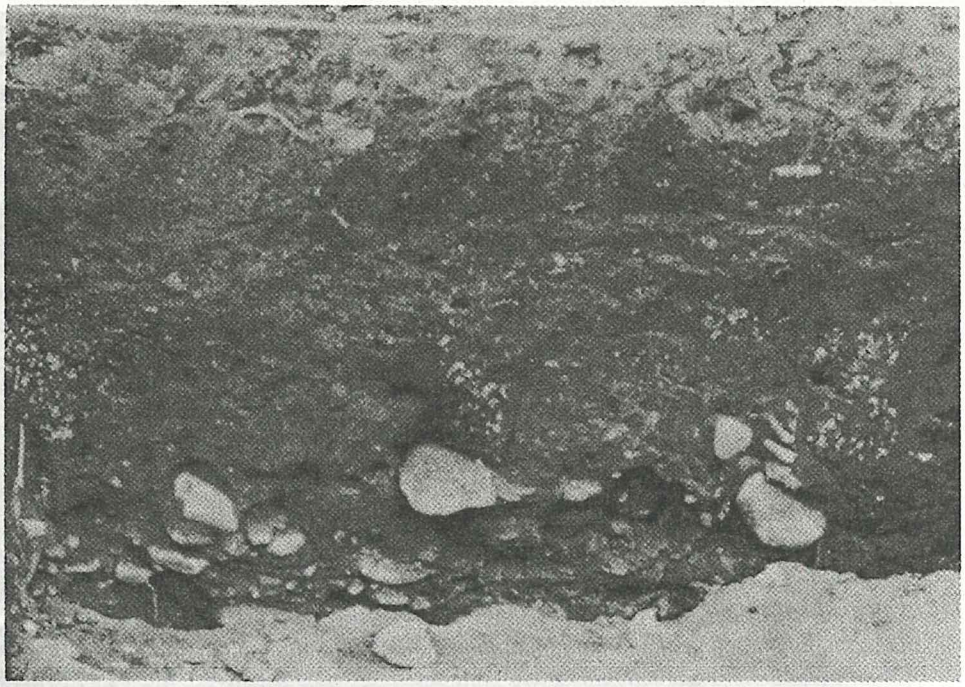
第２図版　沖ノ原　上　Ａ１区東壁　下　Ａ１区南壁

第３図版　沖ノ原　Ａ３区Ⅱ層（２ａ層）の遺物出土状態

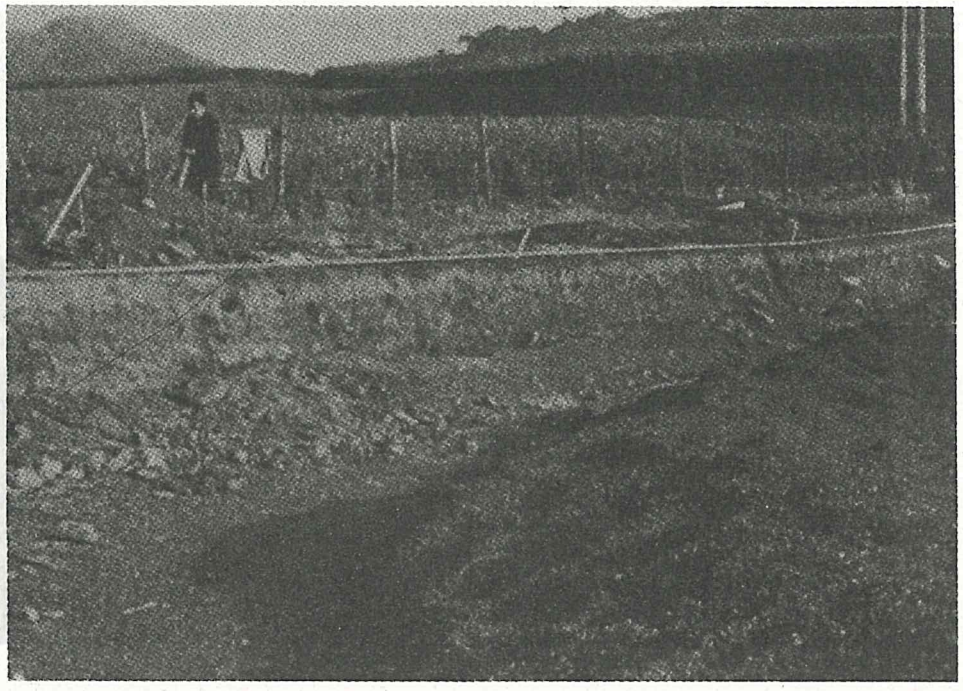


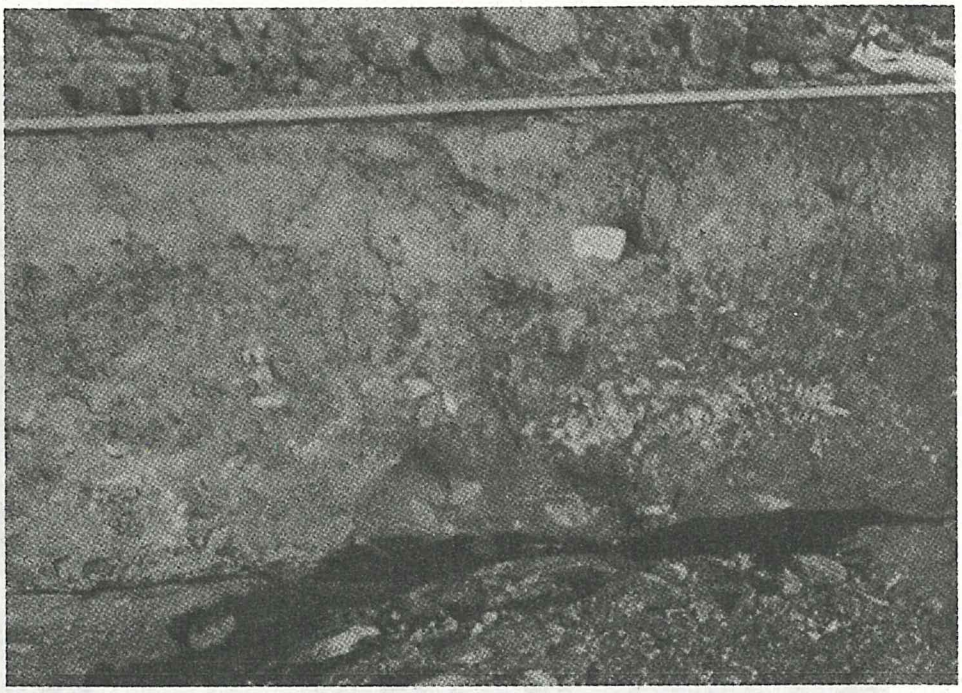
第４図版　沖ノ原　上　Ａ３区北壁　下　Ｂ３区Ⅲ層（２層）の焼土と土器



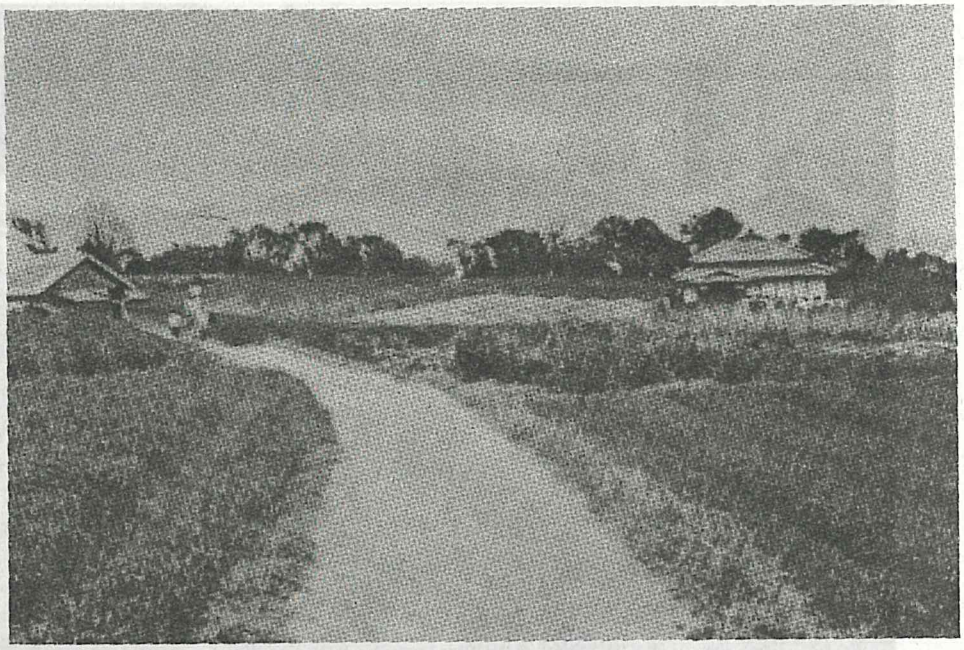


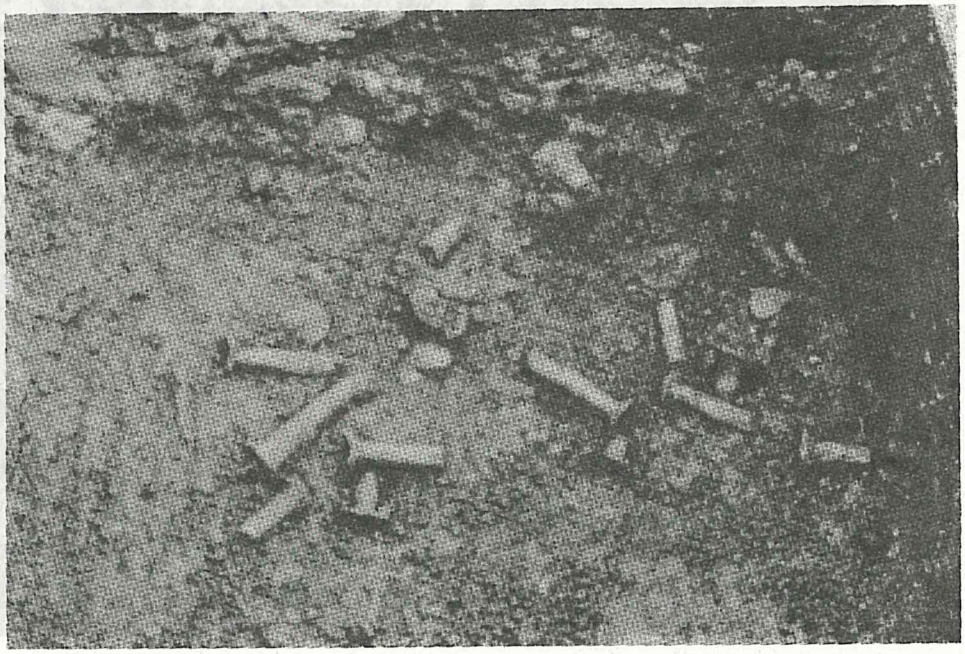
第５図版　沖ノ原　上　Ｂ１区西壁　下　Ｂ１区南壁



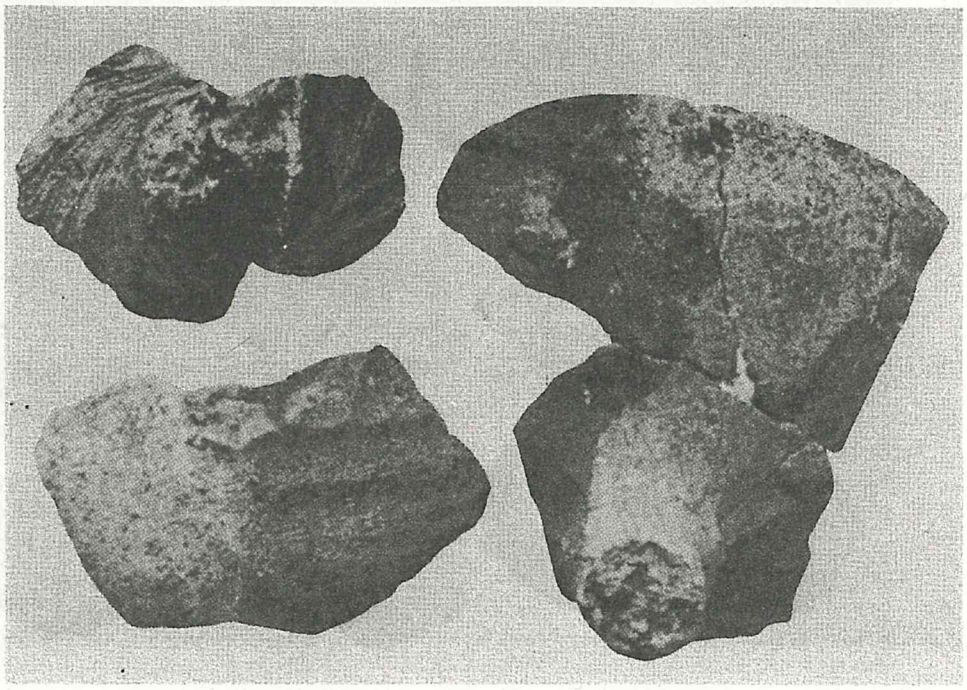


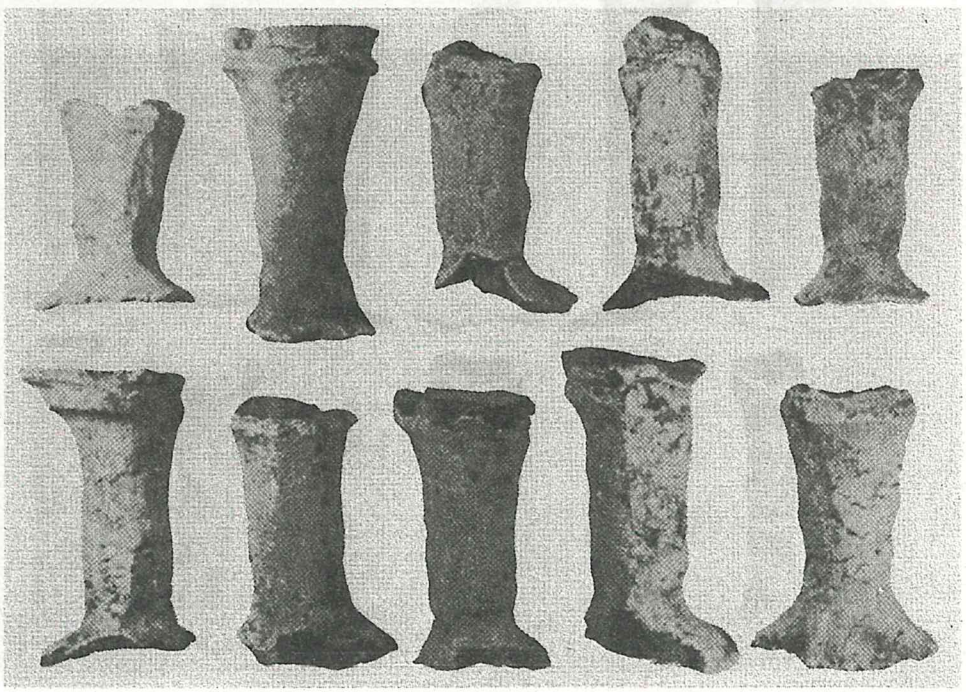
第6図版　沖ノ原　上　Aカッティング　下　同上の部分



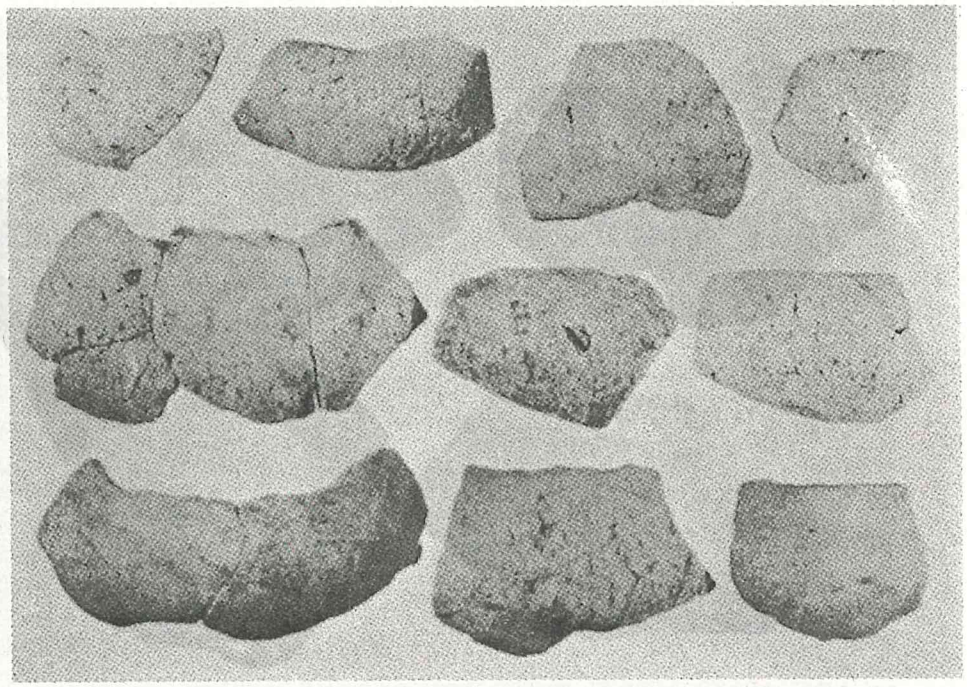


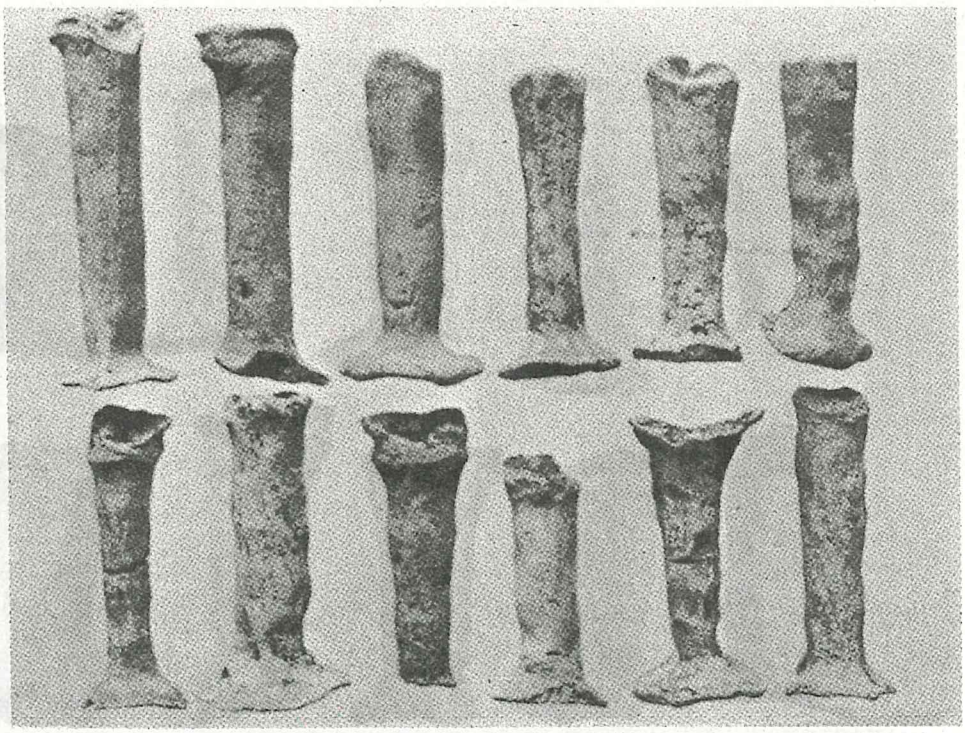
第７図版　大田尾遺跡　上 全景　下 試掘トレンチⅢ層の天草式土器出土状態



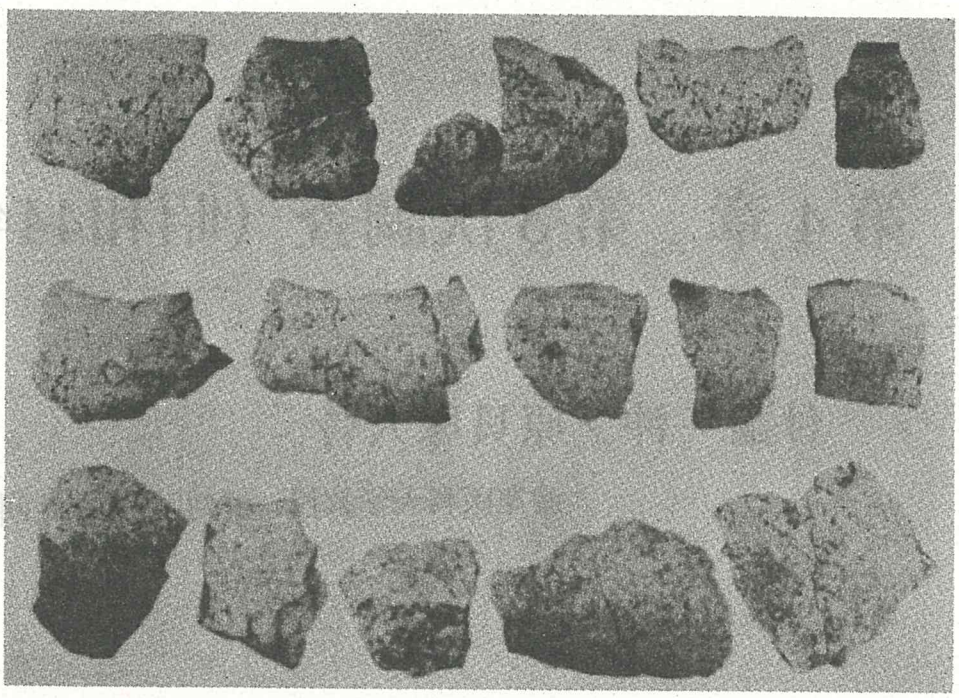


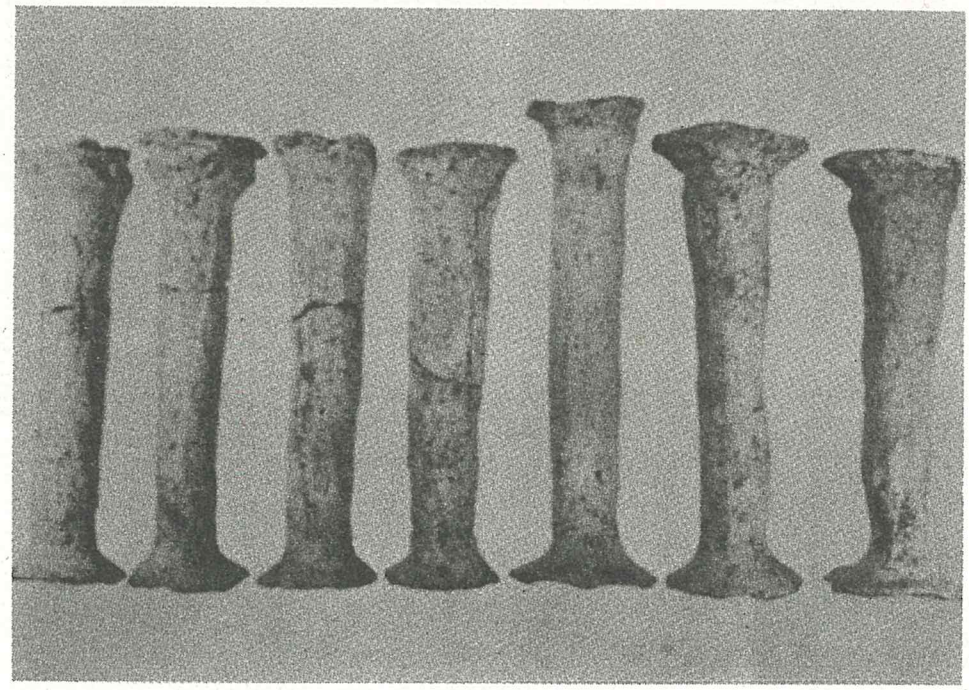
第 8 図版　沖ノ原出土天草式製塩土器　上 椀底部　下 第Ⅰ群脚





第 9 図版　沖ノ原出土天草式製塩土器　上 埦口縁部　下 第II群脚





第10図版　大田尾出土天草式製塩土器　上　口縁部（上・中列）・底部（下列）
下　第Ⅲ群脚

第４章　第３次調査（昭和44年）

付論　沖ノ原貝塚人骨

産業医科大学教授、解剖学　北條暉幸

1. 調査の経過

五和町二江、通詞に特別養護老人ホーム（紫明寮）の建設が計画され、昭和44年４月建設予定地内の発掘調査を実施した。調査には坂本経堯氏、緒方勉そして地元から柳原高太郎氏があたり、熊本県教育庁社会教育課上野辰男氏が行政指導と助言にあたった。また遺跡より人骨が発見されるにおよび、熊本大学医学部第二解剖学教室から北條暉幸氏が参加した。以下調査の経過について、調査時のメモよりひろい上げることにする。

昭和44年４月25日（金）雨　午后、坂本、緒方は熊本市を出発、18時頃に五和町二江に着く。旅館松園に落付き、19時より五和町役場から総務部長、公民館主事の太田光弘、町文化財保護委員、および土地所有者、区長をかこんで調査についての打合せをする。

４月26日（土）曇　発掘作業に先立ち、９時より鍬入式、10時半より作業開始。作業ではまづ２ｍ方眼のグリッドを組み、道路側（南西）より海側にかけて、１．２．３……とし、通詞島側（北西）を起点として順次Ａ、Ｂ、Ｃ……列とした。個々のグリッドの発掘にあたり、まづ一つおきに市松模様にして発掘を進めた。即ち、Ａ－１、Ａ－３、Ａ－５、Ａ－７、Ａ－９区の各区の表土（耕土）を除去、ついで遺物包含層である混礫砂層の発掘にはいった。発掘がすすむにつれ、Ａ－１区の南西から鹿骨、Ａ－５区では地表下50cmのあたりで箆切りの皿が出土した。また出土する遺物の殆んどが縄文土器で、中期とみられる阿高式、後期に属するもの、中には前期とされる曽畑式、晩期とされる黒川式などの破片があり、さらに須恵器の破片の混入があったが、包含層の肉眼による分層は困難であった。そこで、部分的に攪乱されているものと考えられる。

４月27日（日）曇　発掘面積が拡大するにつれ、出土遺物の量は確実にふえる。午前11時頃Ｂ－２区の地表下45cmのあたりから貝層があらわれる。Ｃ－３、Ｅ－３区では鹿の骨が多量に出土したが、午后４時頃になるとＣ－３区からも貝層があらわれた。

４月28日（月）快晴　各調査区の発掘深度は下がる。Ｂ－２区での貝層は隣接するＢ－１区にまたがり、径２ｍたらずの範囲にレンズ状の断面をして分布していた。またＣ－３区の貝層は、Ｂ区の貝層に比べて薄いことが判明した。

４月29日（火）曇時々少雨　葦原五和町長はじめ、総務部長が来観。Ｃ－１、Ｃ－４、Ｄ－１、Ｄ－３区について発掘をはじめる。Ｂ－１、Ｂ－２区の貝層は隣接するＡ－１、Ａ－２区にまでおよんでいることが知れる。ここでは貝層を取除き、さらに下へと掘下げると、あたかも石囲みをしたかのような墓壙があらわれる（ここでは石が多く、どの石が意図的に置いたか判然としなかった）。なおも発掘を進めると、15時半頃、顔面を南に向けた人骨があらわれた。この埋葬人骨を１号人骨とした。

Ｃ－３、Ｃ－４区の貝層付近から石囲みらしいものや、大形の土器片があらわれる。ここに

も１号人骨同様の埋葬遺構があることが考えられる。この部位については、坂本、柳原高太郎氏が発掘にあたる。

4月30日（水）曇　前夜、熊本大学第二解剖学教室の北條暉幸氏に連絡、人骨は本日より取上げることになる。各新聞社、ＮＨＫ等の取材について坂本氏が応待する。この日、参観人多数調査現場を埋める。

5月1日（木）快晴　１号人骨は体をうつ伏せにして、頭位を南に向け、膝を曲げた異常な埋葬状態であることが北條氏から指摘される。２号人骨の近くから猪牙が発見される。

本日を以て現地調査を終了することになり、午前中で残務整理、午后は五和町役場二江支所に出土遺物を移す。ここでは遺物の仕訳け、水洗いをする。現場引揚後、緒方は現地に残り、数日間遺物の整理にあたる。

2. 調査の成果

(1) 発掘計画・層序

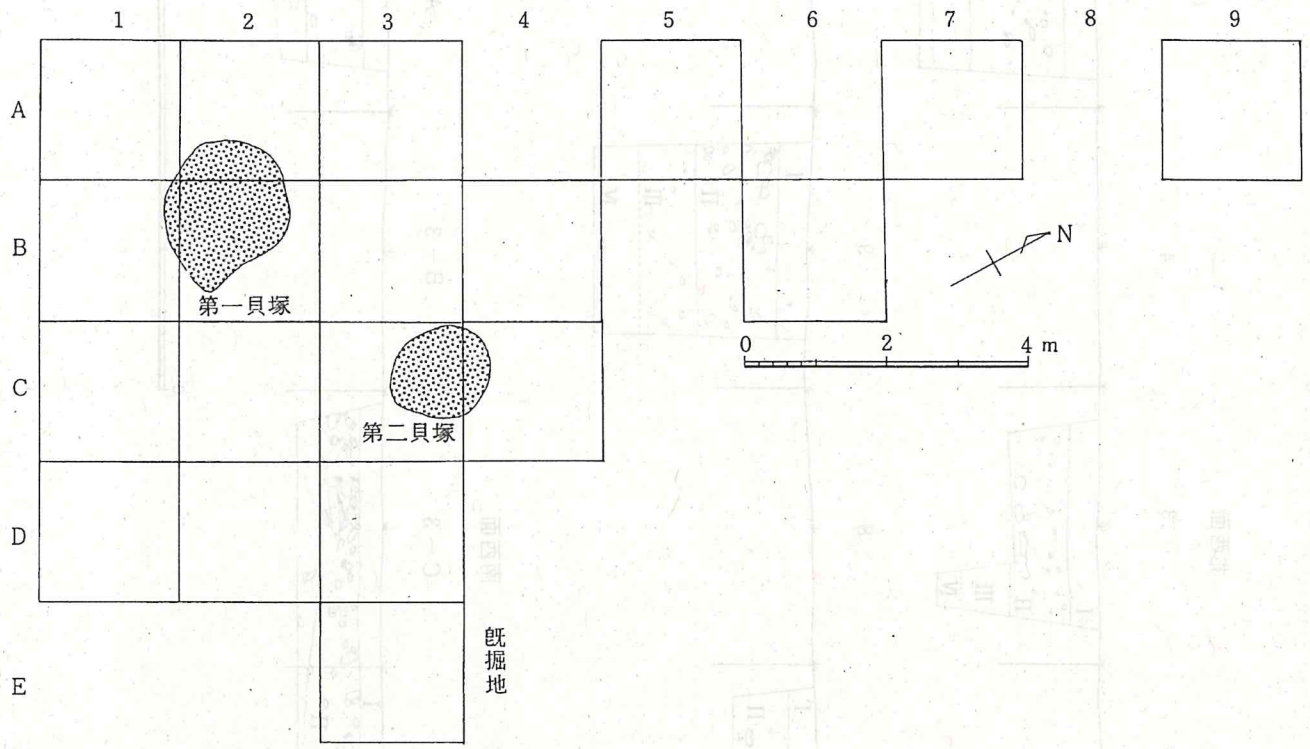
今次の調査地（老人ホーム建設予定地）は、国道324号の北、通詞渡船場（現在通詞大橋）に至る道路筋で、調査予定地の北東約20mが海岸で、その外側に砂浜がひろがっている。

発掘にあたり、坂本氏の指示により2m方眼のグリッドを組むことにした。即ち、通詞島よりをＡ列とし、順次国道側になるにしたがいＢ、Ｃ、Ｄ、Ｅ列とした。また道路筋を起点として、１、２、３……とし、最も海よりの部位を９とした。したがって、通詞島よりの道筋がＡ－１区に、続いてＡ－２区、Ａ－３区とくることになる。

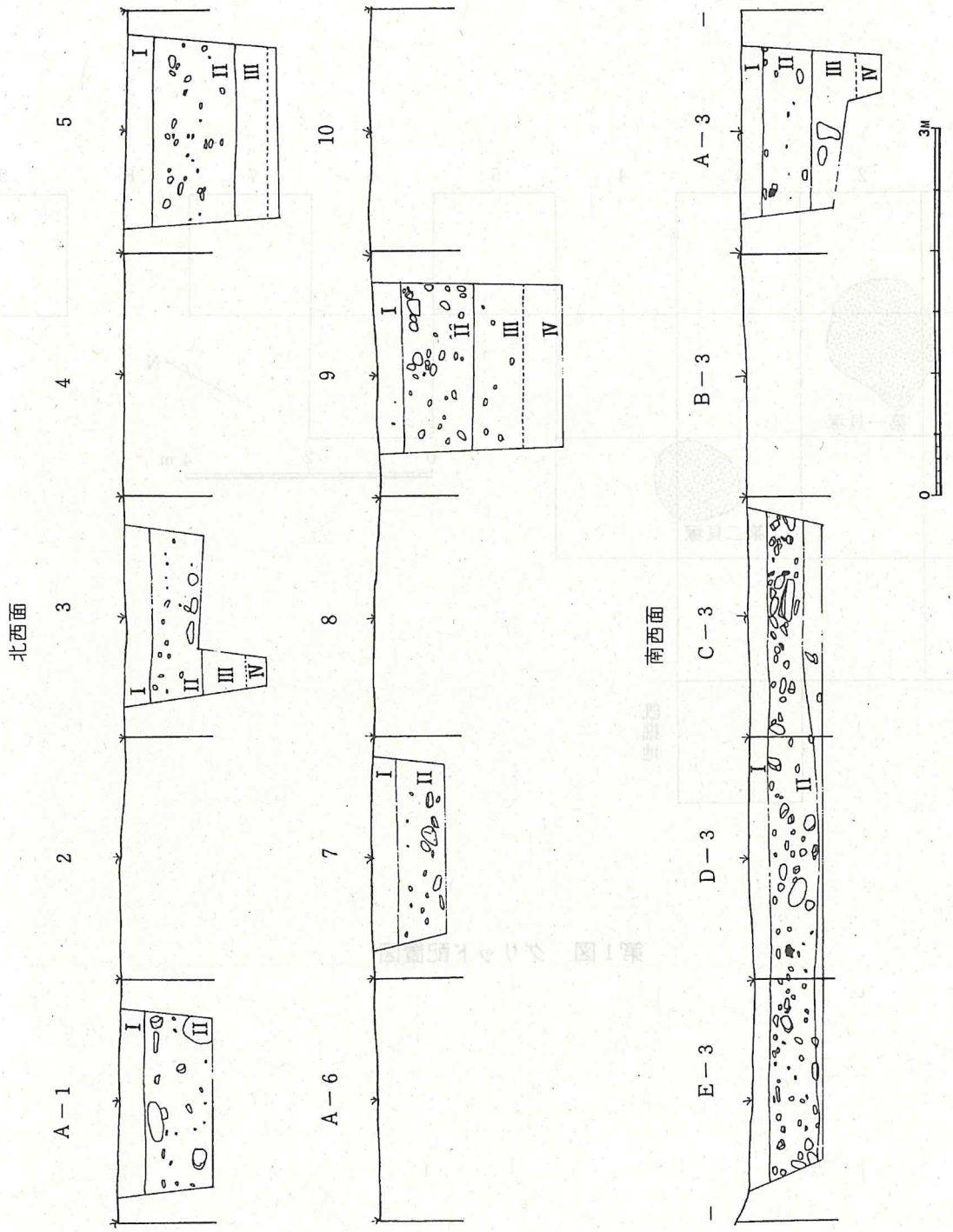
各調査区の発掘にあたり、当初Ａ－１、Ａ－３、Ａ－５、Ａ－７、Ａ－９区および、Ｂ－２、Ｂ－４、Ｂ－6区と市松模様にして、中間のグリッドをあけて発掘を進めた。Ｂ－２区等に貝層があらわれるにいたり、その周辺をも発掘した。調査日程等の都合もあって、結果的にＡ列が１～３、５、７、９の各区を、Ｂ列が１、２、４、６の各区、Ｃ列が１～４の各区、Ｄ列が１、３の各区を、Ｅ列が３区を発掘した。

今次調査を実施した地域での土層は、第２図に図示したとおりであるが、その概要は次のとおりである。

第Ⅰ層（表土）、現在の耕作土である。層厚約20cmの明褐色土層である。ついで第Ⅱ層は混礫砂層。この層には径10～20cmの礫が、時に礫の大きさも径30cmを超えることがある。この第Ⅱ層が本遺跡での主要な遺物包含層で、色調黒褐色、層厚も部位により異なり、30～70cmである。第Ⅲ層は砂質土で、発掘の部位により礫が混入している。土色は褐色～黒褐色で青味がかった色調のところもあり、層厚25～40cmが確認されている。第Ⅳ層は第Ⅲ層と同質の砂層であるが、最も海側に近いＡ－９区の北西壁面では褐色を呈していた。



第１図　グリッド配置図



第２図　土層断面図

第Ⅱ層、即ち混礫砂層の発掘にあたり、A列の各区は10cm毎の分層発掘を試みたが、発掘により土師器や須恵器がかなりの深さまで混入していることがわかり、B列以下は単に層毎に区分して取上げることにした。出土する縄文土器は多彩であったが、それが層位により分離できる状態でなかった。

(2) 貝　塚（第3図）

第3次の調査により、貝層が二地点から検出された。A、Bの1、2の各区にまたがる第一貝塚、C－3区から発見された第二貝塚がそれで、以下発見の状況等について述べる。

第一貝塚　B－2区の混礫砂層の直下に混土貝層が発見され、隣接の各区にひろがりをみせていた。貝層は南北1.9m×東西1.6mの不正円形にひろがり、中央部が厚く（約38cm）、周縁が薄く、断面が紡錘形をしていた。また層の傾きも南西側が浅く（地表下約45cm）北東部が深かった（地表下約75cm）。

貝層は混土貝層であるが、層中に各種の貝がブロック状になって発見され、魚骨、雲丹や鹿等の獣骨が発見され、縄文土器9点（晩期以降含まず）、石錘1点、尖頭石器3点および黒曜石の破片が混入していた。

その後、第一貝塚の下から人骨が発見されるが、人骨と貝層の間から6点の縄文土器が出土した。これらの遺物については、第一貝塚貝層下の遺物として後記する。

第二貝塚　C－3区の混礫砂層の下から貝層が発見された。ここでは第一貝塚についで第二貝塚とする。第二貝塚は径1.2m位の範囲のひろがりをみせ、一部C－4区にまで延びていた。貝層には破砕された貝が殆んどで、第一貝塚に比して層が薄かった。この貝塚では調査日時の制約で、充分調査記録することができなかった。ここでは貝層中から縄文土器20数点のほか、石器、鹿骨等が検出されている。さらに貝層下も第一貝塚同様、10点近くの縄文土器が発見された。

(3) 人　骨（第3図、図版26、27）

第一貝塚の下から1号人骨が検出された。その埋葬状態[注1]は第3図に図示したとおりで、貝層の下端から約25cmのところ（地表下100cm）に頭が発見された。人骨は頭位を東にして東西に横たえ、顔面は首がねじれた形で南面していた。また足は膝をまげていることが判明した。この埋葬状態は甚だ異常であることが、調査にあたった北條氏によっても指摘された。

2号人骨は1号人骨の南々東約3mのあたりから発見された。この人骨は頭位を南にした伸展葬であった。

人骨の埋葬時期について、これを明確に示すものはない。しかし、とくに1号人骨では、それを覆っていた貝層が乱れていないことから、貝塚形成以前と考えて差支えない。まず縄文後期以前の人骨とみてよかろう。2号人骨も埋葬状態、層位からして1号人骨と同時期のものとみられる。

なお人骨の形質的特徴については、付論の北條氏の「沖ノ原貝塚人骨」に記述のとおりである。

(4) 出土遺物

沖ノ原遺跡第3次調査により多量の土器や石器が出土した。その主たる出土層位は第Ⅱ層の混礫砂層であるが、貝層中および貝層下からも少量の遺物が発見されている。混礫砂層が主な遺物包含層であるが、ここでは縄文土器の他に、明らかに時期を異にしているものとして土師器と須恵器がある。また縄文土器のなかでも、黒川式とみられる縄文晩期の土器もいくつかのグリッドで検出されている。混礫砂層から検出された遺物の中で高台付埦や篦切りの皿は歴史時代の産物で、明らかに後世の攪乱・混入とみられるが、現地での土層からその状態が確認できなかった。この様なこともあって、現地調査では一点、一点の分布状態まで記録せず、層毎に取上げた。以下混礫砂層出土の遺物について述べる。

A－1区（第4図1～9、図版4）

ここでは地表下25～40cmの間から高台付埦が出土した。そしてその他の層中から縄文土器や石斧2点が発見されている。

1～5、8は磨消縄文系の土器で、中でも4は貝殻擬縄文が施文されている。6は外面に曲線文を描き、口縁上面に刻み目を付している。7は無文土器で、器面上に調整痕がある。10は比較的薄手の土器で、曽畑系とみられる。

A－2区（第4図10～24、図版5上）

縄文土器のほか石斧3点、尖頭石器、石錘、および土師器や須恵器の破片が出土した。縄文土器の中には、図示した9～23以外に黒川式とみられるものや無文土器の破片があった。

10は内外の施文の状況から曽畑式とみられる。11、12は太形凹線文からして阿高式とみられるもので、13、14はその系譜をひくものであろう。15～21は磨消縄文系の土器で、口縁部が波状をなすもの（17、18）がある。このうち15、16は貝殻擬縄文である。22、24は口縁部に短かいS字形の折線文様を施文した器種で南福寺系であろう。

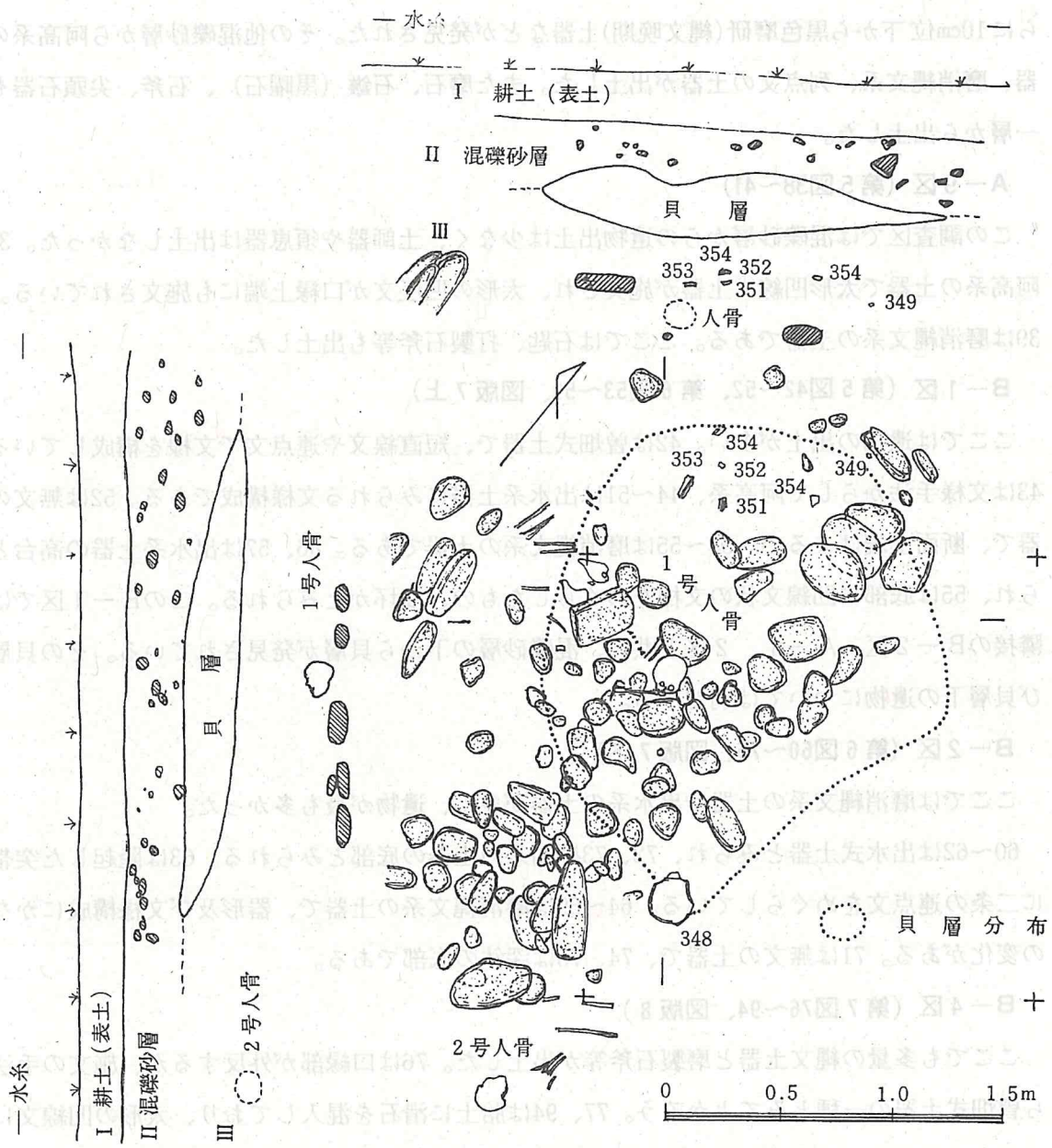
A－3区（第4図25、26、第5図27～37、図版5下）

ここでも縄文土器のほかに土師器が出土した。縄文土器の中には黒川式とみられる破片もあった。

25は阿高系の土器で37は同類の土器の底部である。27～29は出水式土器とみられるもので、32～36は磨消縄文を施文した土器群である。また31の把手部分も施文手法からみて同類の土器とみられる。

A－5区（図版6上）

ここでも第Ⅱ層から縄文土器10数点のほかに高台付の土師埦が出土した。縄文土器には阿高式や出水式とみられるものがあり、中には図示により復原可能な個体もあった。即ち、図版6上右端の土器がそれで、底径8cm、口縁径13.8cm、高さ9.5cmに復原できる深鉢で、器面は比



第3図　第一貝塚と埋葬状態

較的平滑で縦方向に均され、口縁上面に刻み目を付している。

A－7区（図版6下）

この調査区でも表土下10cmの混礫砂層から高台付埦や須恵器の破片が出土した。それからさらに10cm位下から黒色磨研(縄文晩期)土器などが発見された。その他混礫砂層から阿高系の土器、磨消縄文系、列点文の土器が出土した。また磨石、石鏃（黒曜石）、石斧、尖頭石器も同一層から出土した。

A－9区（第5図38～41）

この調査区では混礫砂層からの遺物出土は少なく、土師器や須恵器は出土しなかった。38は阿高系の土器で太形凹線文土器が施文され、太形の凹圧文が口縁上端にも施文されている。38、39は磨消縄文系の土器である。ここでは石匙、打製石斧等も出土した。

B－1区（第5図42～52、第6図53～59、図版7上）

ここでは遺物の出土が多い。42は曽畑式土器で、短直線文や連点文で文様を構成している。43は文様手法からして阿高系、44～51は出水系土器にみられる文様構成である。52は無文の土器で、断面上端はまるい。53～55は磨消縄文系の土器である。56、57は出水系土器の高台とみられ、55は底部に凹線文状の文様をめぐらしたもの、高坏かとみられる。このB－1区では、隣接のB－2区、A－1、2区と共に、混礫砂層の下から貝層が発見されている。その貝層及び貝層下の遺物については別記する。

B－2区（第6図60～75、図版7下）

ここでは磨消縄文系の土器や出水系の土器が多く、遺物が最も多かった。

60～62は出水式土器とみられ、72、73は同系の土器の底部とみられる。63は隆起した突帯上に二条の連点文をめぐらしている。64～69は磨消縄文系の土器で、器形及び文様構成にかなりの変化がある。71は無文の土器で、74、75は深鉢の底部である。

B－4区（第7図76～94、図版8）

ここでも多量の縄文土器と磨製石斧等が出土した。76は口縁部が外反するが、施文の手法から曽畑式土器の一種とみてよかろう。77、94は胎土に滑石を混入しており、太形の凹線文による施文がなされているところから阿高式土器とみてよかろう。この土器の口縁部は一部突出している。78は阿高系で、79～83、84～87は出水系の土器とみられる。また、88、89は磨消縄文系の土器である。90は土器の高台がつき、高台のところに透しが入る。90～94は土器の底部で、94は阿高式土器の底部とみられ、93の器面には条痕が残っている。

B－6区（第7図95～97、第8図98～106 図版9）

この調査区での出土遺物は多彩である。98～106の土器は薄手で、器面に平行線や連点文をあしらい、中には条痕文の上に曲線文を描くものもある。これらは曽畑、又は轟系の土器とみられるものである。95～97は阿高式土器とみられるが、胎土には95、97にのみ滑石混入がみられ

る。

C－1区（第8図107～120、図版10上）

ここでは土器のほか、凹石や骨片が出土した。107、108は磨消縄文系の土器で、109も同種のものとみられる橋状把手の部分である。この土器の胎土には雲母片が混入していた。110、111は阿高系の土器で、112～119はその流れをくむ出水式の土器片とみられる。120は底についた圧痕の様子から、阿高系の土器の底部とみられる。

C－2区（第8図121～126、第9図127～132、図版10下）

ここでは土器のほかに、遺物包含層中から鹿骨および鹿角が出土した。121～126は磨消縄文系の土器で、121の口縁部は急角度に突出している。125の胴部にシャープな稜線があり、この種の土器はB－2区からも出土している。127～128は土器口縁部で二条の凹線文がめぐる 129は口縁下に曲線文様、130は波状口縁の土器で、口縁部上部に連点文が施文されている。131は凸帯上に二条の連点文をめぐらしている。132は土器底部である。

C－3区（第9図133～158、第10図159～171、図版11、12）

ここでは土器のほかに鹿角、鹿の骨および小形の石斧が出土している。133～136は薄手の土器で施文の状況からして、曽畑系の土器とみられる。137～139は太形凹線文土器で阿高系である。140～149、151は磨消縄文系の土器である。150は橋状把手の土器で、152、154は連点文、153、164は連点文と直線文をあしらっている。155～163、167は直線又は曲線をあしらったもので、出水式土器にみられる文様である。165、166は口縁部に刻み目を付しており、この手法は出水貝塚出土の土器にもみられる手法である。168は高台の脚部で短折線文様は南福寺式土器にみられる手法である。169、170は土器の高台、171は平底の土器底部である。

なおC－3区の混礫砂層の下から貝層が発見された。この貝層中の遺物および、貝層下の遺物については後述する。

C－4区（第10図172～183、第11図184～198、図版13）

C－4区の混礫砂層から多量の縄文土器が出土した。172は太形凹線文土器で、173はその系譜をひくものとみられる。174～183は磨消縄文系の土器である。これらの口縁部は波状に波うつものが多い。181は橋状把手で、182は貝殻擬縄文が曲線文の間に観察される。

183～193にみられる斜線又は横への平行線文は出水式土器にみられるものである。188、193には刺突連点文があり、また192、196、197には口縁部又は高台の下端に短かい折線文様がみられる。195は波状口縁をなす無文土器で、195は土器の底部、198は高台付土器の脚部である。

D－1区（第11図199～211、第12図212～236、図版14、15）

この調査区での遺物の量はD－3、E－3区とともに出土量が多い。縄文土器以外に土師器片、石鏃が発見された。出土した遺物も多彩で変化に富んでいた。199～209は磨消縄文系の土器で、線画の間に縄文又は貝殻擬縄文が施文されている。210、211は無文土器で、212～220は出水系

の土器とみられる施文手法である。221～224は短折線文様の土器で、同類の手法の土器がC－3区等からも出土している。226は口縁部の一部が肥厚し、線条の間を連点文を押圧するものである。227は口縁下に突帯一条をめぐらし、その上に連点文を施文している。突帯の上は縦方向の平行線が描かれている。228はS字形の折線文様、231は入組んだ折線文様、232は連点文と平行線文の組合せからなっている。229、230は同一個体とみられ、口縁部が波状になっている。口縁下には突帯がめぐり、縄状の把手が数個つくものとみられる。233は貝圧文による連点文が施文され、口縁上面にも斜の押圧文がある。

235は土器の底部で、全体形が足の形をしている。指が五本つくものとみられるが、中指を残して折損している。足うらは多少起伏し、足の形は踵の部分が前の方に比べて小さく、尖り気味である。文様は前、後と側方（片方だけ）にみられ、棒状施文具で「ハ」字形を描く手法は口縁部等にみられる「S」字形の折線文様とも似ている。234、236は土器高台で、234には二重の弧線と飾り穴が、236の脚接合部には突帯の上に二重の連点文がめぐっている。

D－3区（第13図239～264、第14図266～282、図版16、17上）

ここでは土器の他に磨製石斧2点が出土している。出土した土器は多彩で、量も多い。

237は薄手の土器で、内外面の文様構成からして曽畑式土器とみられ、238、239は太形凹線文土器で阿高式土器とみられる。240～249は阿高系の土器とみられ、凹線文が細くなっている。250は口縁部に折線文様をあしらっていて、253は口縁下の突帯の上に刻み目が、256は橋状把手に交錯する浅い直線をあしらい、把手の上位には穿孔がある。257は口縁下に多数の凹点を押圧しており、258にも凹線文が観察される。259は波状口縁の突出した部位で、縦方向の凹線が施文されている。260は口縁部近くの土器片とみられるが、ここにも横又は斜の文様が付されている。261、262は同一個体とみられるが、口縁部が波状をなし、262はその突出部とみられる。突出部の先端はまるくなっており、丸い孔があけられている。器面は条痕文を下地に、口縁下に貝圧文がめぐる。また口縁部上面には溝状の施文がなされている。263は口縁の一部突出した部位で、その形が菱形をしている。264は口縁上面に刻み目風の文様が押圧されており、また265は口縁下に縦に浅い線がめぐっている。

266～275は磨消条文系の土器である。このうち266の土器の把手の部分で、その形がとくに変っている。即ち、あたかも或種の哺乳動物が四肢を伸ばして、器を支えた形になっている。頭位にあたる部分はベルド状にまるくなり、口縁部におさまっている。その形状からして動物をモチーフにしたものと考えられる。276は無文の浅鉢でり、277も器面に条痕だけをのこしている。278は高台付脚で、279～282はそれぞれ土器底部である。

E－3区（第15図283～315、16図316～339、図版17下、18、19）

若干の石器類のほか大量の土器が出土している。D－3区と共に一定面積のグリッドからの遺物の出土量が多かった。

283～285は薄手で、文様に用いられた線条の状態から曽畑系の土器とみられるものである。他のグリッドでもこの種の土器の混入がみられる。

286～293は太形凹線文を用いた、いわゆる阿高式と呼ばれている土器群である。同じく線条を用いて施文した294～301の土器は阿高系の出水式といわれるものである。中には302、305～308、311にみられる様に連点文を併用したものがある。312、313は浅い線条を平行に、或は斜にあしらっている。316は口縁部が内側に肥厚し、独得の様相を示している。口縁部および凸帯上には刻み目が施され、円形の浮文もみられる。317は形態的に316に近いが、小形で波状の口縁とその下位に凸帯がある。そして口縁上面に数条の刺突文、凸帯上に刻み目がみられる。この317の地文には横への条痕があり胎土中には滑石が混入されている。318は口縁下と上面に線条をひき、それに斜めの刻み目がみられる。319、320の口縁下が肥厚し、そこに斜に貝圧文が押圧されている。321～327は土器の器面に縄文を施文した土器である。321～323は曲線文を施文し、さらに磨消縄文が施されている。口縁部は321、322は波状をなすことが観察され、上面に押点文がみられる。328は口縁下に縦方向の線がならび、329はにぶい凸帯上に押点文がならんでいる。330は起伏のはげしい口縁部の状態が破片から観察され、口縁下胴への移行部が急に屈曲している。331も330同様無文の土器であるが、口縁下が強く屈曲している。332は直口の土器で、器面には条痕文がある。333は深鉢形の素文土器である。334～337は土器の底部脚台の部分である。334は4個の飾り穴があけられ、脚の端末部に折線文様を施し、さらに貝殻擬縄文が施文されている。これは、形態からして、高坏の底部とみられる。335、336は小破片であるが、飾り穴、連点文等の文様が観察される。337は脚部断面の曲折の状態が特徴的である。338、339は黒色磨研の土器で、一般的に縄文晩期の編年されている土器である。

第一貝塚及び貝層下の出土遺物（第17図340～354　図版20上）

貝層中より9点の縄文土器が検出された。それらの土器は第17図340～348に図示したとおりである。このうち340、341は太形凹線文土器で、そのうち340は口縁部である。口縁上面に同趣の施文があり、この種の土器の特徴をよく示している。342は磨消縄文の破片で、三条のまるい線画の中に縄文が施文されている。343は口縁部の状態が波状を呈し、口縁下に二条の線の間に、三個の連点がある。また器面には斜の条痕を地文としている。344は深鉢の脚部とみられ、接地する先端部に二列の連点文がある。345も344と同様、深鉢の脚部とみられるが、文様は施文されていない。346、347は素文の土器で、347が復元口径17cmをはかる。348は土器底に鯨の脊椎骨の圧痕をもつもので、底径14.5cm、比較的部厚い感じのする土器である。

また第一貝塚には各種の貝類[注2]のほか、魚骨、ウニ、鹿の骨があり、尖頭石器、石錘及び黒曜石片が出土した。

第一貝塚貝層下から6点の土器が発見された。土器の分布については、貝層中の土器と共に第3図に図示したとおりであるが、個々の遺物について以下第17図をもとに説明したい。349は薄

手土器の小片であるが、外面に二条の短直線文が観察されるところから、曽畑式土器とみてよかろう。350の土器片も比較的薄いつくりをしており、斜方向に数条の施文がある。一見するところ曽畑式土器を思わせるが、土器から受ける印象は新しさが感じられる。351は口縁部の破片で二条の横への平行線、そして口縁下が外へむかって屈曲し、斜方向への平行線が描かれている。この種の土器は出水貝塚出土資料（京大報告）にも散見されるものである。352は口縁が外に向かって直上するもので、口縁部に刻み目を付している。353は凸帯上に押点を連ねたもので、阿高式土器の一種と見られるものである。354はこの遺跡特有の起伏にとんだ土器で、口縁上部には変化がみられる。器には削りの手法がみられ、太形の文様には阿高式にみられない粗豪さがある。

貝塚、貝塚下の土器は、貝層がある限定された時期に形成したものをみるならば、上、下の遺物を比較する上に重要な意味をもつことが考えられる。貝層下の土器の下から人骨一体があらわれ一号人骨としたのは既述のとおりである。

第二貝塚及び貝層下発見の土器（第18、19図、図版20下、21）

C－3区に第二貝塚が発見されたことは既述のとおりである。そこから第18図355～375にあげた20数片の土器片が出土した。さらに貝層下から約10片の土器が発見され、第19図356～384に図示した。

貝層中の土器　355は薄手の土器片で、内外面および口縁上面に連点文がみられる。口縁はほぼ直上し、上面は平坦である。この土器の形態からして曽畑式土器とみられる。356も355同様薄手の器面で、二条の横線の下に連点文が施文されている。これも曽畑式の仲間とみられる。357～359は太形凹線文の阿高式とみられる土器片で、357は口縁上面に太形の凹点が施文され、358は同心円状の太形凹線が描かれている。359はいく分細目の線が口縁下に描かれている。360～364はいわゆる磨消縄文で、器面に線条と縄文が描かれている。360～363は口縁部で、破片の状態から起伏にとんだ波状の口縁が考えられる。365～367は口縁下が一部肥厚し、縦に、短折線文様を描いている。368～370には施文技法のうえに共通点がみられる。横への多数の線条、そして間をおいて折線文様が描かれている。370は二個の破片を接合したところ、口縁部直径約24cmを図示復原することが出来た。この土器の口縁部はいく分尖り気味で、下部にいたって一坦内側にカーブし、再び外への膨らみをみせる。371、372は同一個体の破片で、器面には粗い削りがみられる。また口縁下に凸帯があり、橋状把手があった（欠落）ことが観察される。さらに凸帯には連点文等があり、把手の上面は広くなり、ここにも施文がみられる。この土器の器面には淡く丹が付着していて、元々丹塗りされていたことが知れる。374、375は土器底部で、いずれも破片である。

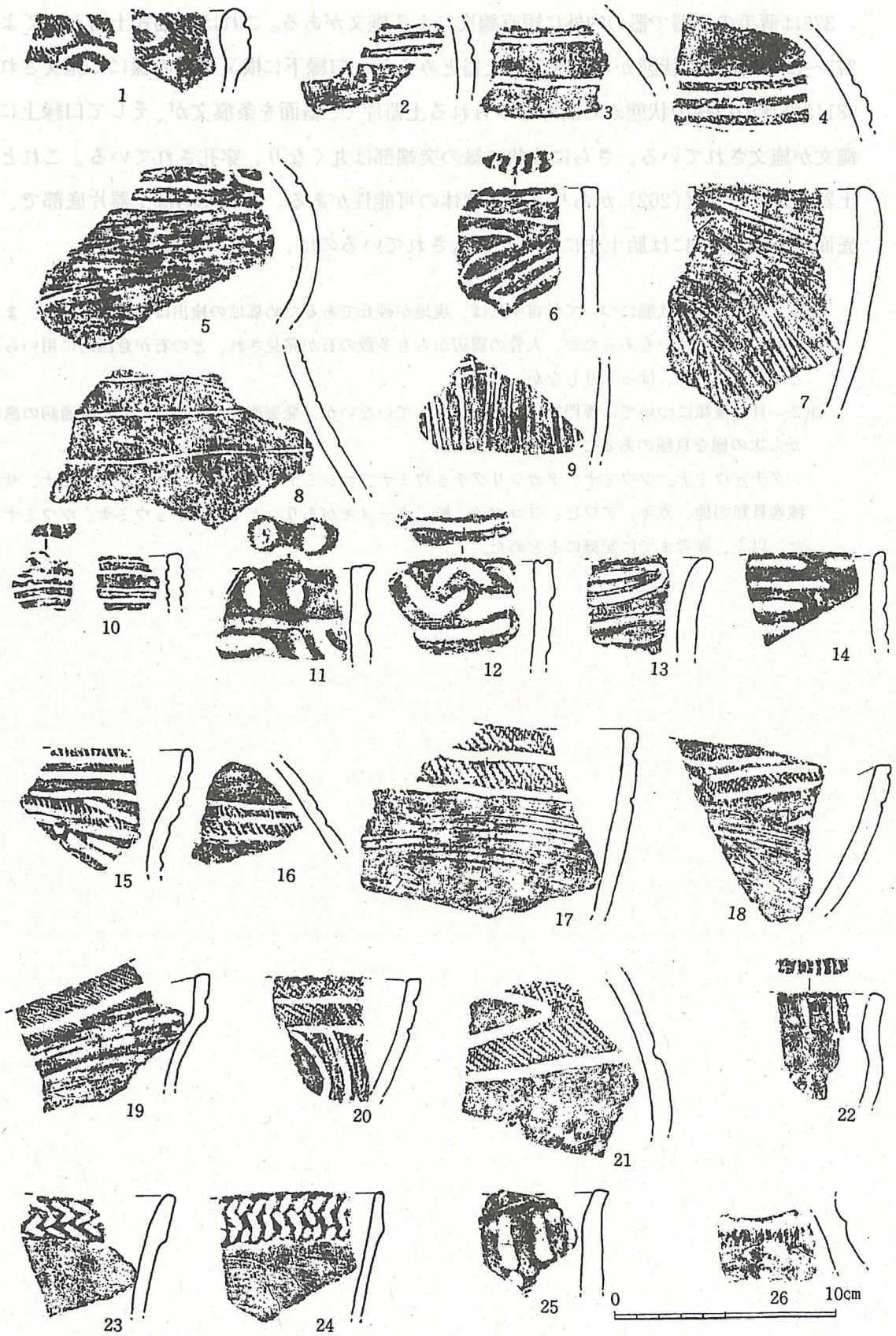
第二貝塚の下から、第一貝塚同様に数点の土器が発見された。これは貝塚中の遺物と比較するうえにも興味ある資料である。第19図376～384が貝塚下の土器である。

376は薄手の土器で器の内外に短直線文による施文がある。これは曽畑式土器とみてよかろう。377～380は文様の状態から出水系の土器とみられ、口縁下に横又は斜の線にて施文されている。381は波状の口縁の状態から高坏とみられる土器片で、器面を条痕文が、そして口縁上に貝殻擬縄文が施文されている。さらに波状口縁の突端部は丸くなり、穿孔されている。これと同類の土器片にD－3区(262)があり、同一個体の可能性がある。382～384は土器片底部で、平坦な底面である。384には胎土中に滑石が混入されているのは、一つの特徴といえる。

注1　人骨の埋葬状態について付言すれば、現地が砂丘であるため墓坑の検出は困難であった。また、人骨に敷石された疑いもあったが、人骨の周辺からも多数の石が発見され、どの石が意図的に用いられたのかどうかについて、はっきりしなかった。

注2　貝の種類については専門家による同定をしていないが、発掘調査に参加した五和町通詞の漁村の婦人から次の様な貝種のあることを教えられた。

グチョウミナ、ツウミナ、タカシリグチョウミナ、ニシミナ、ゴロビミナ、トノサマミナ、サザエの各種巻貝類の他、カキ、アワビ、ヨコガイ、蛤、ボーメキがあり、とくにグチョウミナ、ツウミナが多かった。以上、参考までに記録にとどめた。

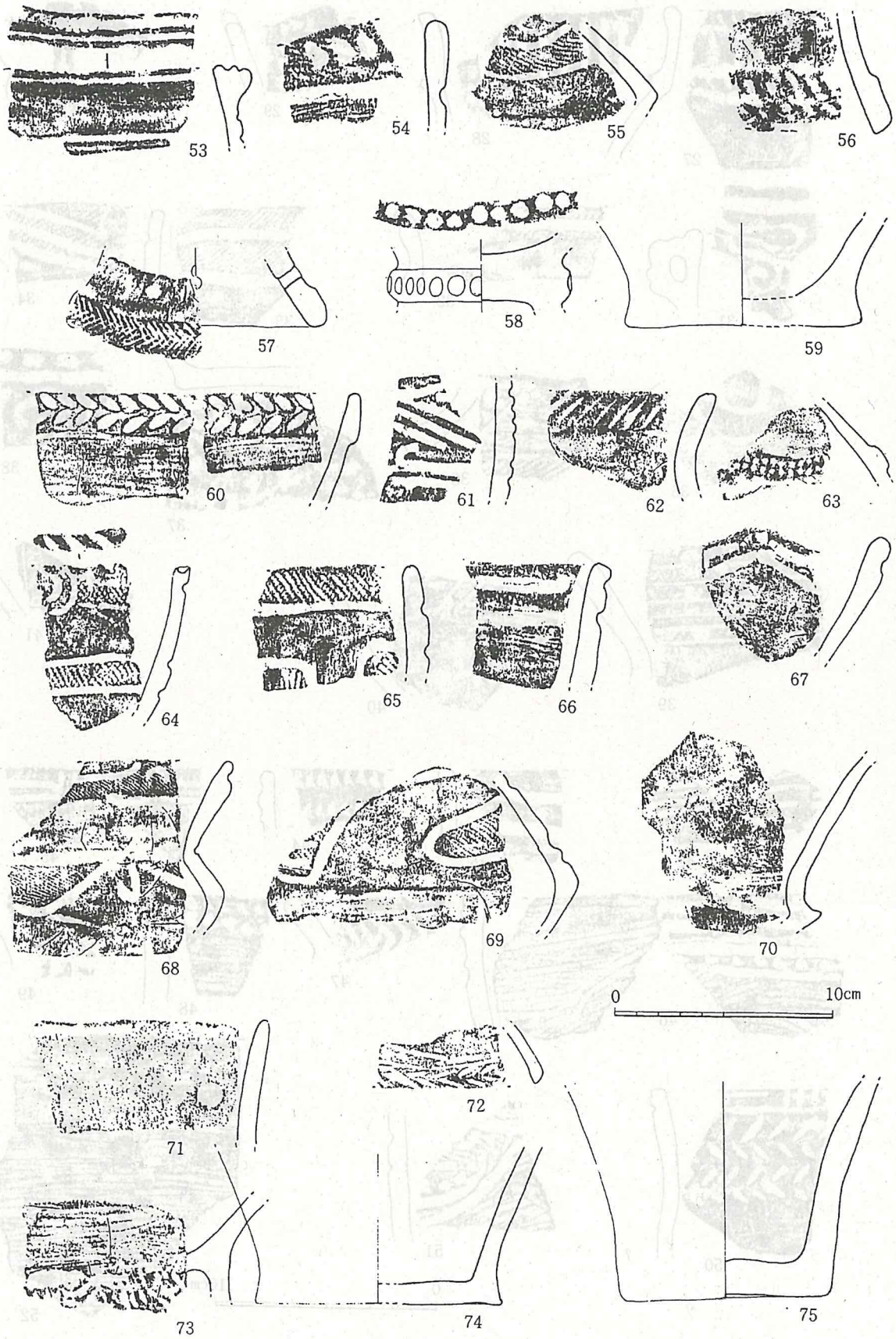


第4図　出土遺物1

1～9　A－1区　第II層
10～24　A－2区　第II層
25．26　A－3区　第II層

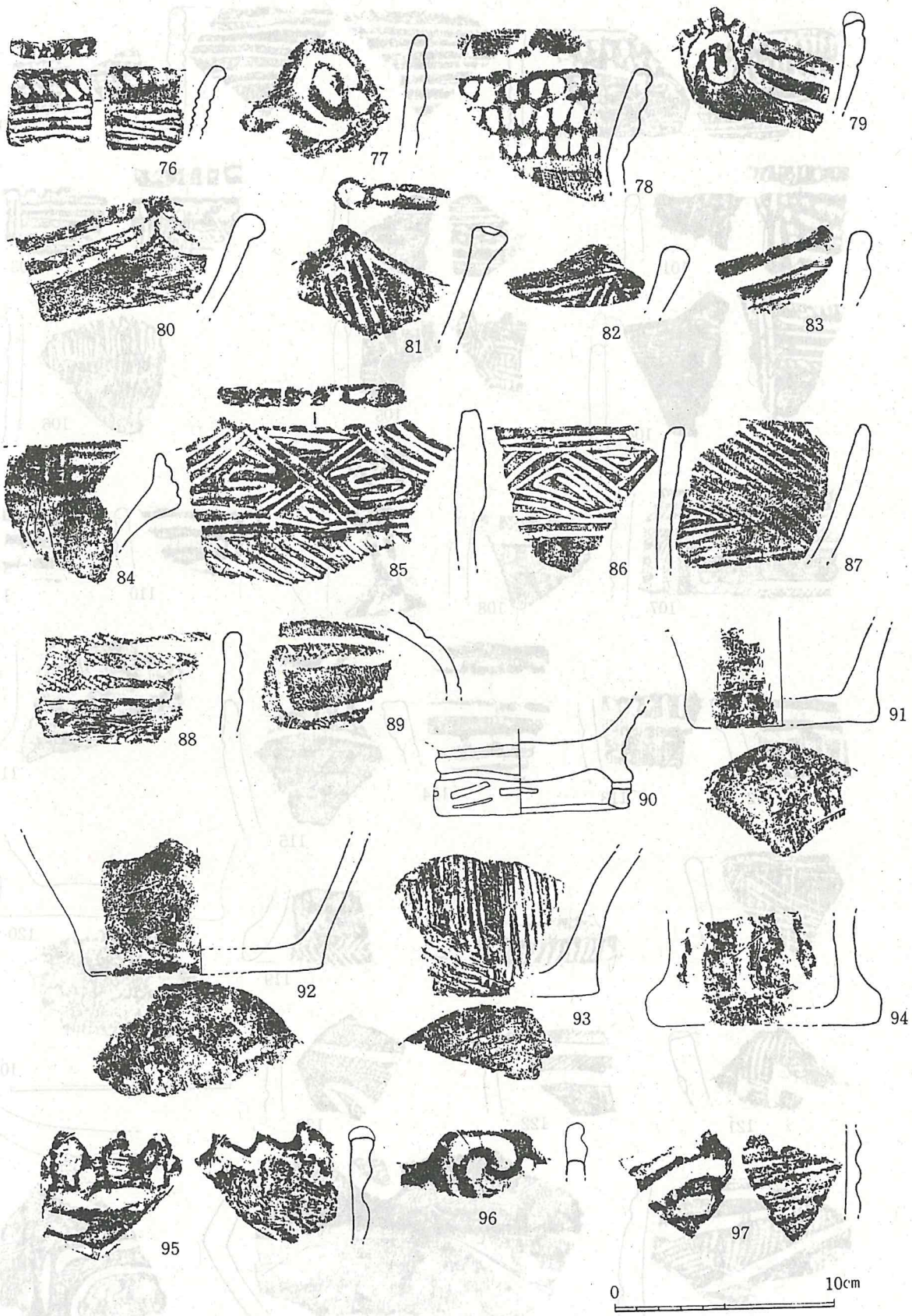
第5図　出土遺物2

27～37　A－3区　II層
38～41　A－9区　II層
42～52　B－1区　II層



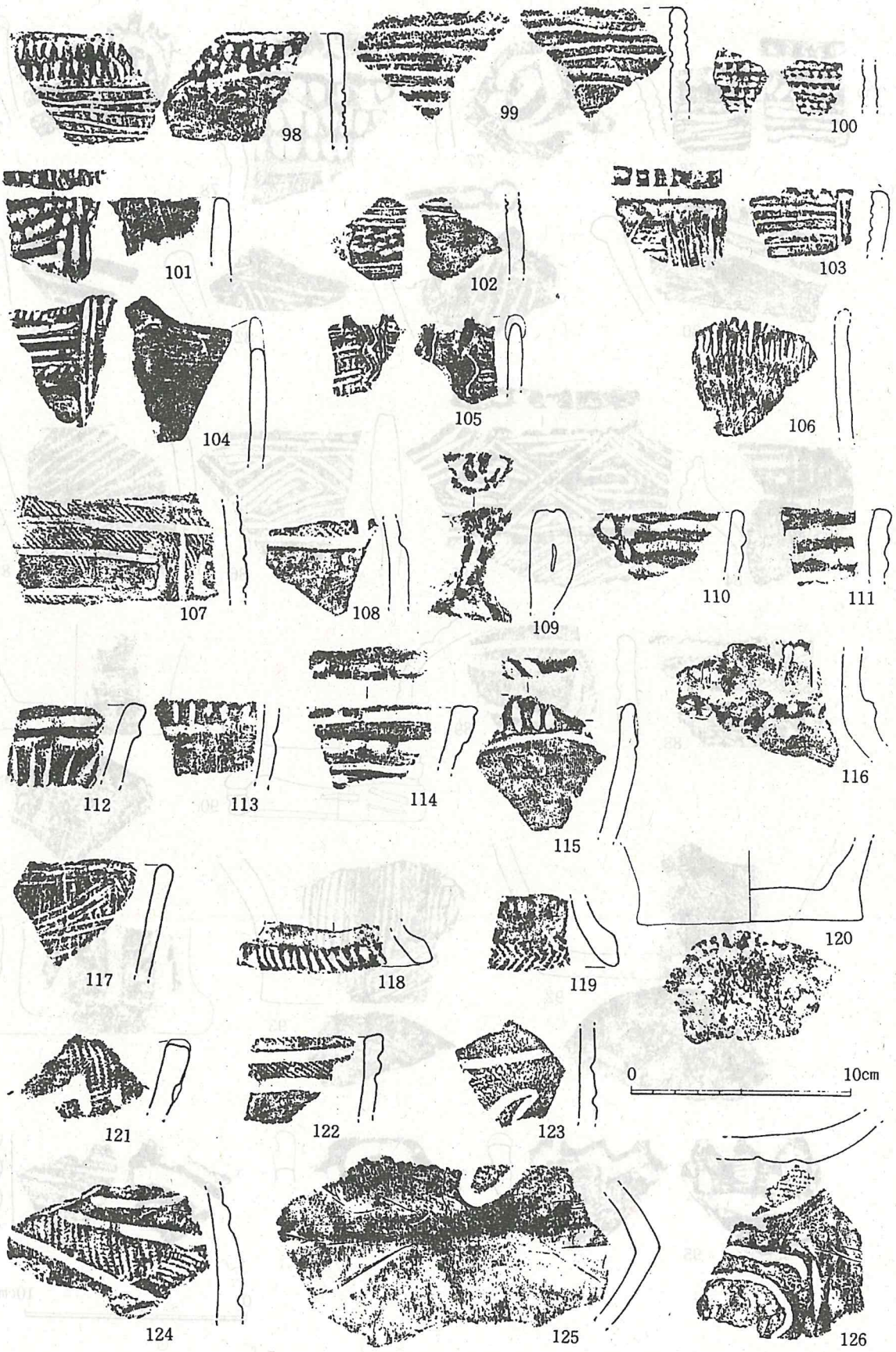
第6図　出土遺物3

53～59　B－1区　第II層
60～75　B－2区　第II層



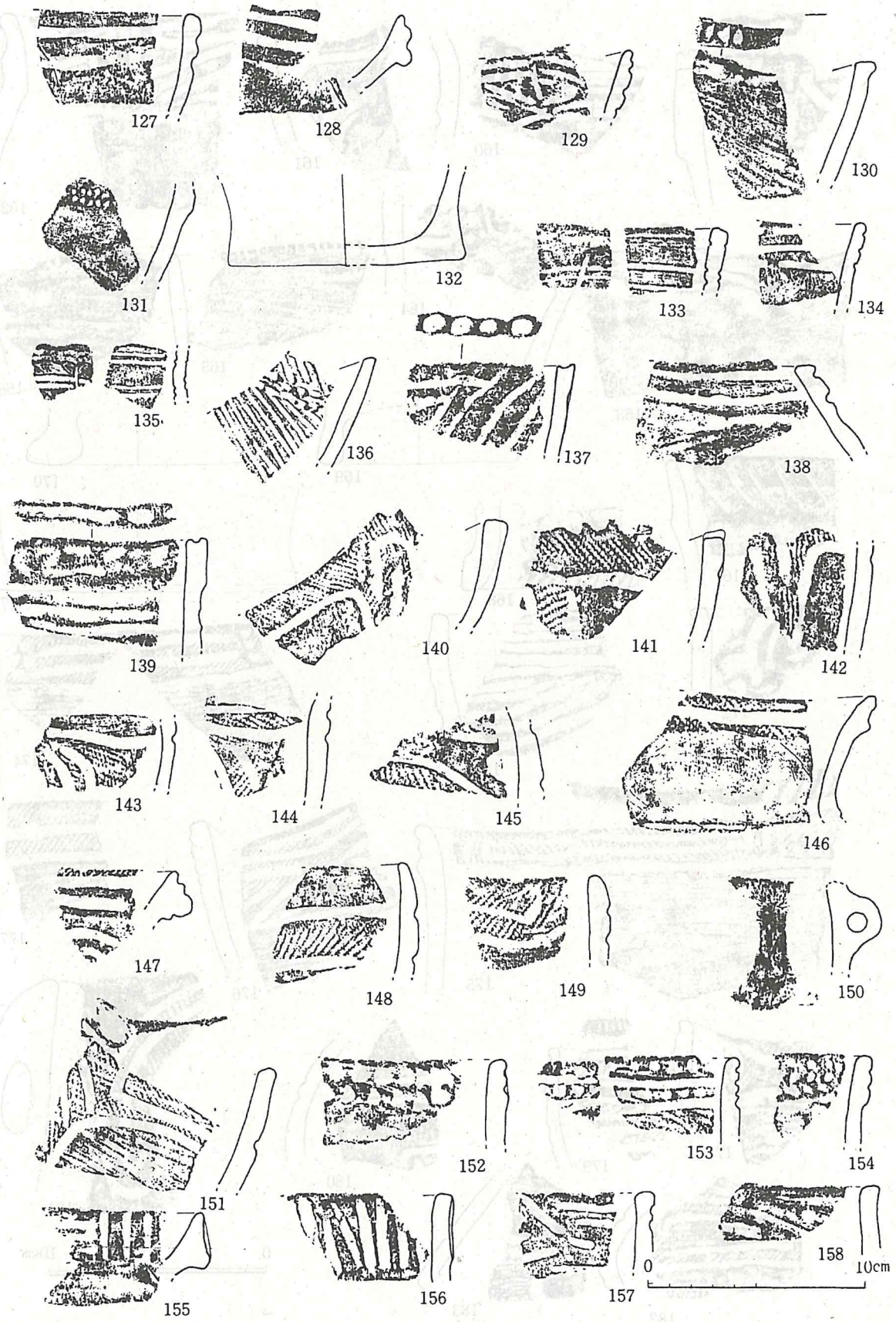
第７図　出土遺物４

76～94　Ｂ－４区　第Ⅱ層
95～97　Ｂ－６区　第Ⅱ層



第8図　出土遺物5

98～106　B－6区　第II層
107～120　C－1区　第II層
121～126　C－2区　第II層

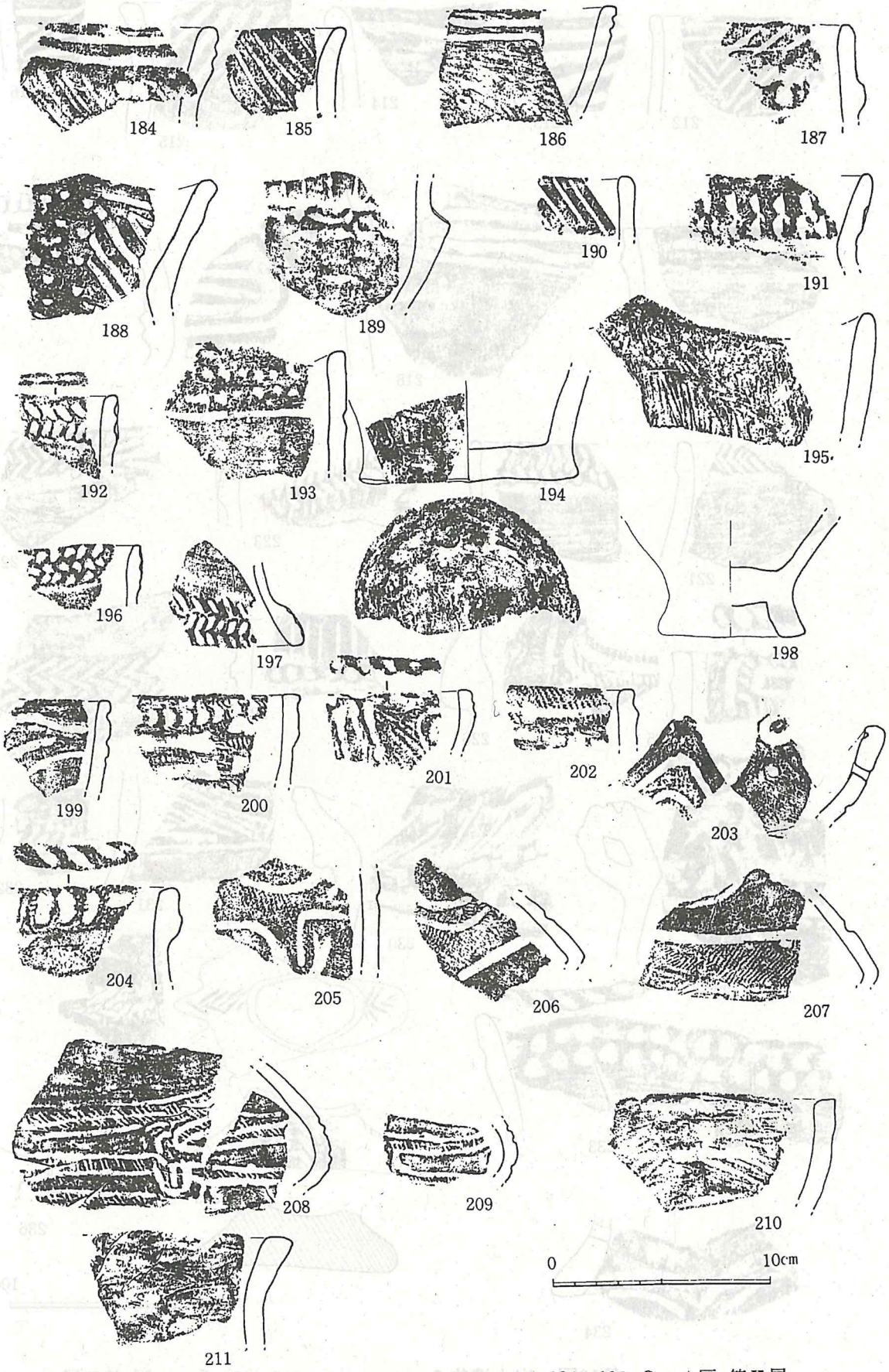


第9図　出土遺物6

127～132　C－2区　第II層
133～158　C－3区　第II層

第10図　出土遺物 7

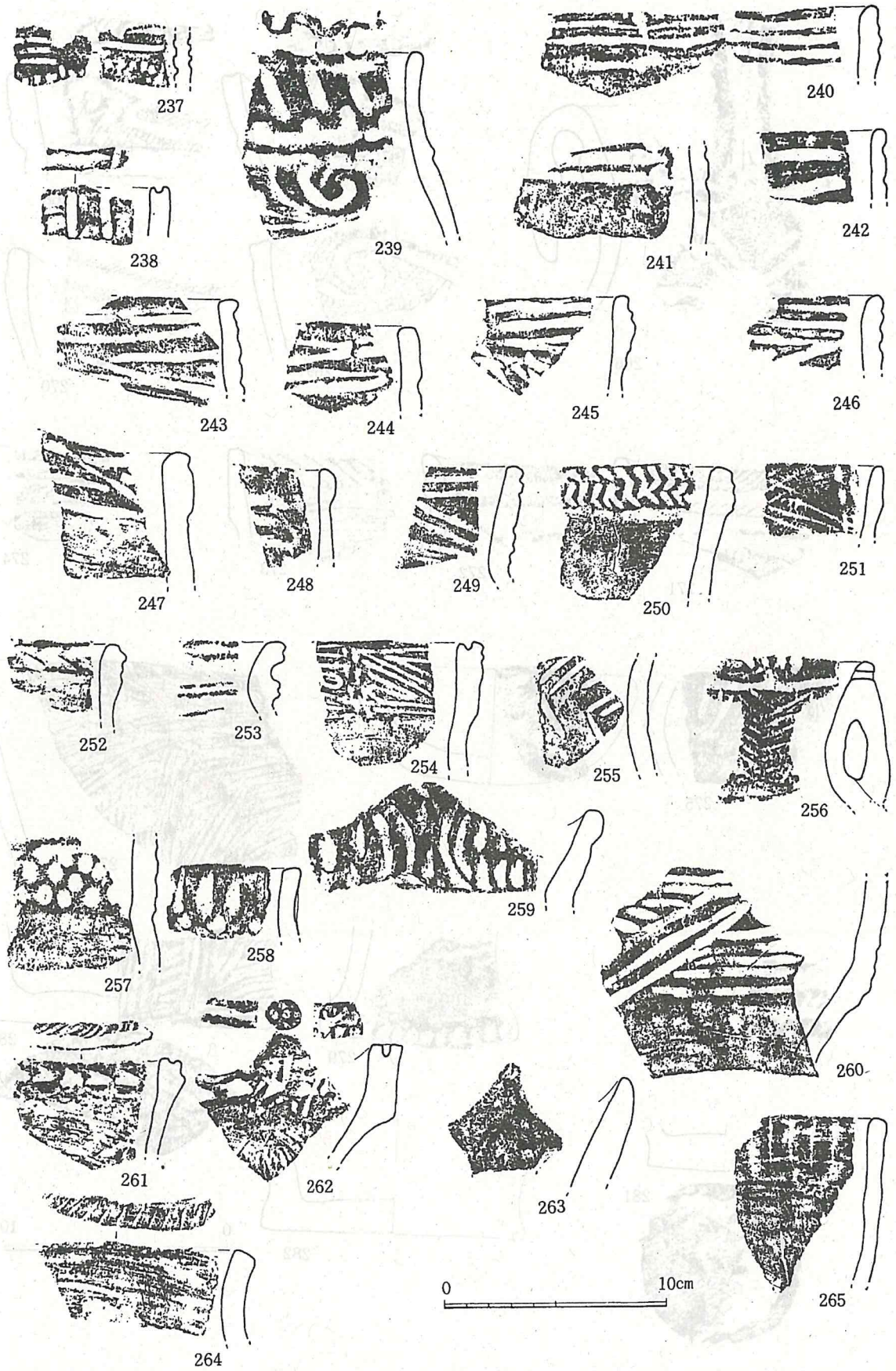
159～171　C－3区　第II層
172～183　C－4区　第II層



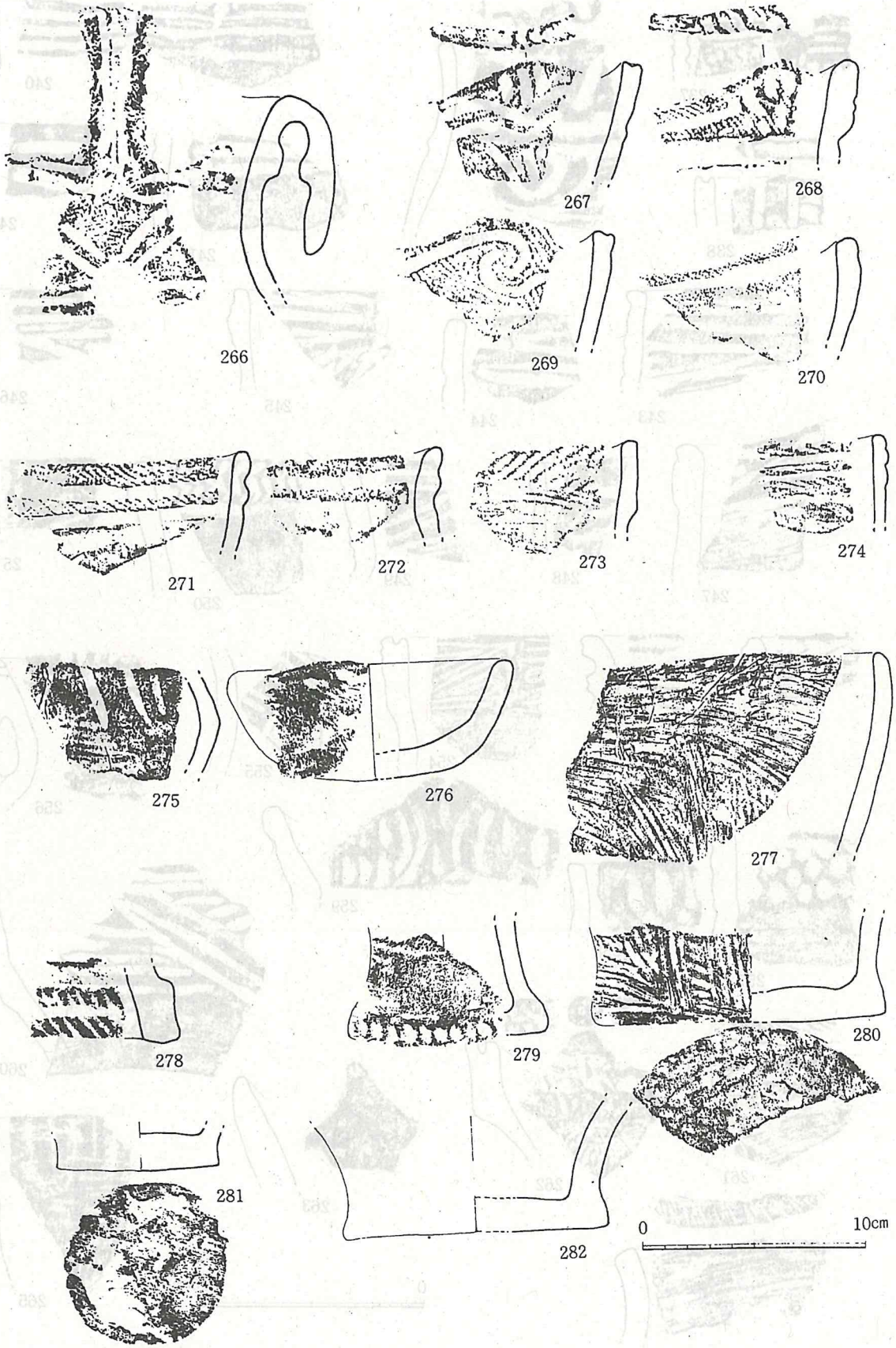
第11図　出土遺物 8

184～198　C－4区　第II層
199～211　D－1区　第II層

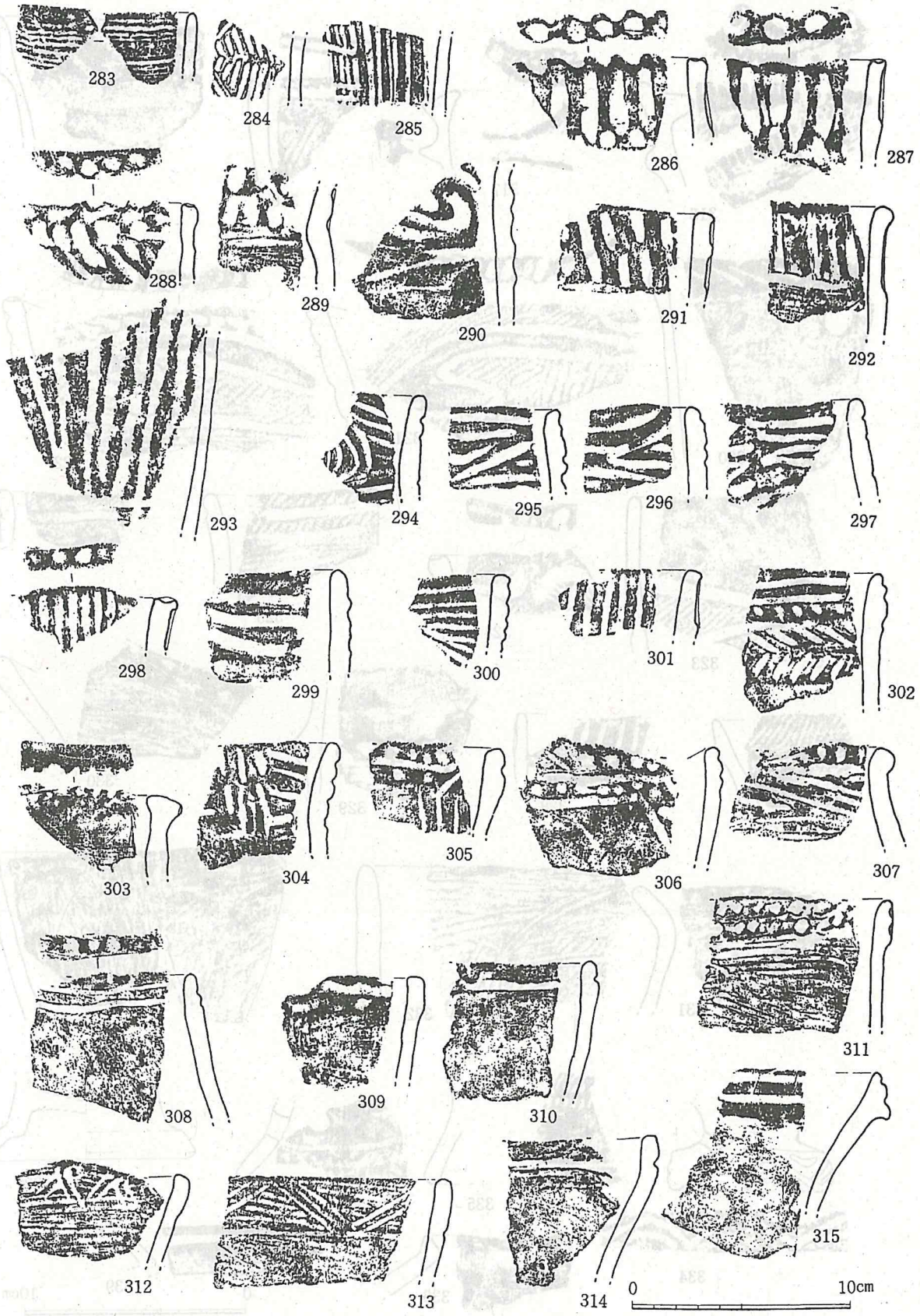
第12図　出土遺物 9　　212～236 D－1区 第II層



第13図　出土遺物10　　237～264　D－3区　第II層

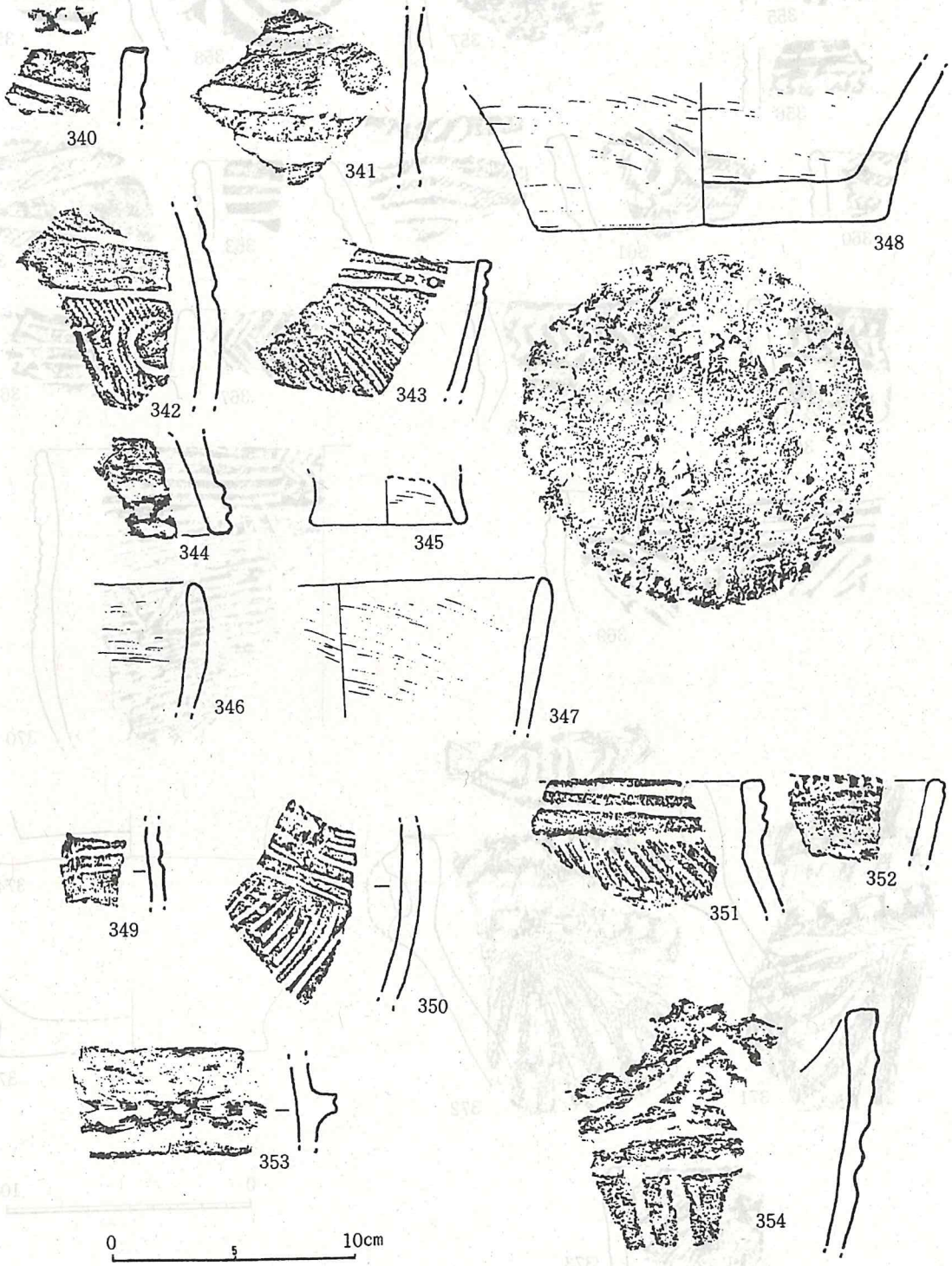


第14図　出土遺物11　　266～282 D－3区 第II層



第15図　出土遺物12　　283～315　E－3区　第II層

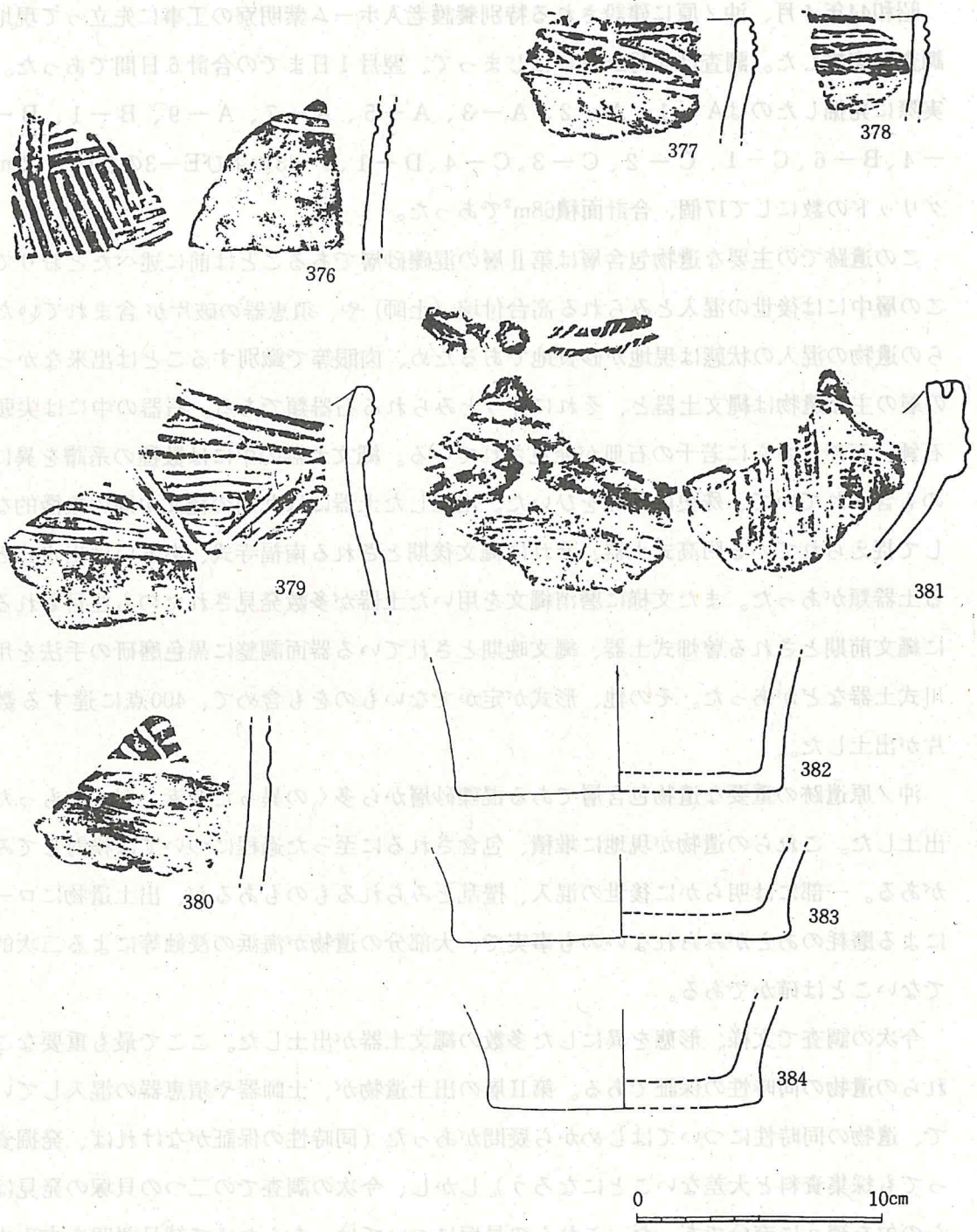
第16図　出土遺物13　　316～339 E－3区 第II層



第17図　出土遺物14

340～348 第一貝塚貝層中
349～354 第一貝塚貝層下

第18図　出土遺物15　355～375 第二貝塚貝層中



第19図　出土遺物16　　376～384 第二貝塚貝層下

3. まとめ

昭和44年４月、沖ノ原に建設される特別養護老人ホーム紫明寮の工事に先立って現地の発掘調査を実施した。調査は４月26日にはじまって、翌月１日までの合計６日間であった。この間実際に発掘したのはＡ－１、Ａ－２、Ａ－３、Ａ－５、Ａ－７、Ａ－９、Ｂ－１、Ｂ－２、Ｂ－４、Ｂ－６、Ｃ－１、Ｃ－２、Ｃ－３、Ｃ－４、Ｄ－１、Ｄ－3およびＥ－3の各区で、2ｍ方眼のグリッドの数にして17個、合計面積68m²であった。

この遺跡での主要な遺物包含層は第Ⅱ層の混礫砂層であることは前に述べたとおりであるが、この層中には後世の混入とみられる高台付埦（土師）や、須恵器の破片が含まれていた。これらの遺物の混入の状態は現地が砂質地であるため、肉眼等で識別することは出来なかった。この層の主な遺物は縄文土器と、それに伴うとみられる石器類である。石器の中には尖頭石器、石錘、石斧、さらに若干の石皿が発見されている。縄文土器の中には数種の系譜を異にするものも含まれていて、殊更に興味をひいた。出土した土器には九州の縄文中期の象徴的な形式として捉えられている阿高式土器、それに縄文後期とされる南福寺式、あるいは出水式とみられる土器類があった。また文様に磨消縄文を用いた土器が多数発見されたのも注目される。さらに縄文前期とされる曽畑式土器、縄文晩期とされている器面調整に黒色磨研の手法を用いた黒川式土器などがあった。その他、形式が定かでないものをも含めて、400点に達する数の土器片が出土した。

沖ノ原遺跡の重要な遺物包含層である混礫砂層から多くの異った要素、形式をもった土器が出土した。これらの遺物が現地に堆積、包含されるに至った過程については検討してみる必要がある。一部には明らかに後世の混入、攪乱とみられるものもあるが、出土遺物にローリングによる磨耗のあとがみられないのも事実で、大部分の遺物が海浜の浸蝕等による二次的堆積物でないことは確かである。

今次の調査で文様、形態を異にした多数の縄文土器が出土した。ここで最も重要なことはそれらの遺物の同時性の保証である。第Ⅱ層の出土遺物が、土師器や須恵器の混入していることで、遺物の同時性についてはじめから疑問があった（同時性の保証がなければ、発掘資料と言っても採集資料と大差ないことになろう）。しかし、今次の調査での二つの貝塚の発見は、それらの欠を補うに充分であった。これらの貝塚については、あらためて補足説明をするまでもないが、いずれも小規模のものである。第一貝塚は直径２ｍ足らずの範囲のひろがりしかなく、第二貝塚は僅か貝層のひろがりが直径１ｍ位の範囲に止まった。その規模からしても比較的短期間の貝塚形成とみることが出来る。貝層中の遺物に、第一貝塚で土器９点、第二貝塚で22点（１点は接合）がある。第一貝塚の９点は阿高式土器、出水式土器、そして無文の土器片及び

磨消縄文が含まれている。これらの土器は形式の違いを超えて、同時点に使用又は廃棄されたものとみて差支えなかろう。貝層下、及び貝層上（例A－2区第Ⅱ層）の遺物と比較した場合、このことは更に鮮明になる。貝層上には第4図11、12にあげた阿高式土器（縄文中期）があり、貝層下には第17図にあげた縄文前期の曽畑式器とみられる（349）のほかに、阿高式とみられるもの（353）や出水式とみられる（351）などがある。

第二貝塚でも第一貝塚とほぼ同様のことが言え、阿高式土器、それに出水式土器もここから出土した。また磨消縄文の同時性を認めてよいのではないだろうか（貝層中から第18図355、356は曽畑式土器は小片であるため貝塚形成以前の土器の混入の可能性あり）。

これらのことに関連し、試みに阿高式土器の標式遺跡である「阿高貝塚」での遺物出土状況をみても、異った形式の土器との関係が明らかでない。阿高貝塚からは、いわゆる阿高式と呼ばれる土器のほかに、磨消縄文を含む異った形式の土器が出土している。それらの遺物の包含状態は昭和52年に実施された範囲確認調査[注1]でも、もう一つはっきりしなかった。また阿高貝塚と川一つ隔てた対岸では、昭和47年7月の集中豪雨で黒橋貝塚の所在が明らかになった。ここでは阿高式土器をはじめ各種多彩な土器類の存在が確認されたが、その後の河川改修に伴った貝塚の調査[注2]でもそれら各種形式の土器相互の関係は余り明瞭ではなかった。

以上のことから、沖ノ原遺跡第3次調査時における貝層中の土器、同時のものと見做し、直ちにそれを敷衍することは無理かも知れないが、今後、一つの遺跡における遺物存在の事象とし考慮さるべきことと思われる。

近来、縄文土器の研究が、動（やや）もすれば個々の遺跡の状況把握を出発点とすることでなしに、研究者の観念的机上操作になりがちで、徒らにスコラ的弁証に終始するおそれなしとしない。土器等の形式設定にあたり、個々の事象をふまえ、往相的に個々の事象を分析・抽象することにより規定した概念とするならば、抽象化された個々の形式概念は、還相的に個々の事象に対してよく説明可能なものでなければならないだろう。新らしい資料をまえにして解釈説明が困難な事態にたちいたったならば、それらをも包括的に処理することの可能な形式概念を再構築する必要があるのではなかろうか。そういった意味で沖ノ原貝塚出土の資料は、我々に興味ある資料と問題を投げかけたことになる。

この調査について是非ともふれておく必要があるものに、発掘された人骨の年代観である。人骨について、その年代を示すような副葬品はなく、埋葬状態の特徴について言えば一号人骨が甚に異常で、体の方向に対して頭の向きがねじれた形をしていた。それが特定する時代の葬法を示すとすれば、年代観を出すのに好都合であるが、今のところ決定的材料とはなり難い。間接的ではあるが、人骨上位にあった貝塚（第一貝塚）は、埋葬の時間的下限を示すものとしてみてよかろう。貝層中の土器に阿高式、出水式、さらに磨消縄文系の土器があったが、これらの土器の従来とられている編年観からすれば、縄文中期、少なくとも縄文後期初頭である。

そこで一号人骨は縄文初頭を下らないことは確かである。二号人骨についても、これと同時代のものとみてよかろう。

付　記

沖ノ原遺跡の第３次調査を終えて、すでに14年、もうこれ以上放置することを許されなくなった。これを整理するにあたり、この時の発掘資料は土器、石器そして貝塚資料等膨大な量に上った。それらの資料を找し出し、ひとつ一つ点検することは限られた時間枠の中で至難の作業である。そのままでは、折角の発掘資料そのものが日の目を見ることなく、埋没してしまうおそれがある。それをどう整理するかについて苦心した結果、幸い私の手元には現地の発掘終了後作成した、各グリッド毎の遺物写真と土器の拓本類が残っていた。これらの資料は、元々遺物の混乱をさけるため、個体識別のつもりで作成したものであるが、今となれば、調査時の資料として最も信頼されるものである。写真の中には一部に資料の重復、欠落があるが、発掘資料の大部分を取上げることが出来たと思われる。また実測図についてもそのことが言え、一部について取上げることが出来なかった。

最後になったが、この調査について直接指揮し、指導して下さった坂本経堯先生は世を去って久しい。資料の整理についても、先生の意向を受けて指示を仰ぐべきであるが、今ではそれが出来なくて残念である。ただここに当時のことを回想し、曲りなりにも発掘調査報告を上梓することが出来たことは、すでに亡くなられた先生へせめてもの手向けである。

注１『阿高貝塚』　昭和53年１月　城南町教育委員会刊
注２『黒橋』　1976年　熊本県教育委員会刊

熊本県天草郡五和町沖ノ原貝塚人骨

——昭和44年4月30日発掘——

北條　暉幸
（産業医科大学教授・解剖学）

1. 緒　　言

本貝塚は、有明海と天草灘を境する早崎海峡に面する海岸砂丘に位置する。本遺跡から発掘された2体の縄文時代後期の人骨の形態学的人類学的特徴、埋葬状態などについて若干の考察を行い、報告する。これらの大略については、既に学会発表（北條・緒方、1970）があり、伴出土器、骨角器などについての考古学的考察は緒方氏が担当した。また、同発掘は、当時筆者が熊本大学医学部解剖学教室に在職中に、同町教育委員会の依頼を受けて、肥後考古学会故坂本経堯会長および緒方勉同会々員（現熊本県文化課）とともに行ったものである。なお、熊本県内における古代人骨の出土状況について筆者（1980）が記したように、内藤氏（1973）による第4次発掘出土人骨についての簡単な報告がある。

2. 研究対象および研究方法

今回発掘された2体のうち、1体（1号体）の頭骨の保存はかなり良いが、軀幹骨および上下肢骨の保存状態は良くない。また他の1体（2号体）の保存状態も良くなかった。

これらの人骨について、Martin—Saller著、Lehrbuch der Anthropologie、Bd. Ⅰ（1959）に基づいて観察と計測を行い、その結果を記載した。なお今回は、これら2体の人骨所見の簡単な記載にとどめ、さらに詳細な研究を行い、従来出土した人骨に関する所見とも合わせて、他日の発表に期したい。

3. 人骨の埋葬状態

1号体は、図3のように地下約40～50cmの深さの攪乱されていない楕円状の貝層（厚さ約25cm、長径約3m、短径約1.5m）の25cm下から出土した。その埋葬状態は図版26、27のように、頭部は直立して楕円状の敷石群（径10～20cmの約30個の石からなり、全体として長径約2m、

短径約１ｍ）に直面し、軀幹骨はこの敷石群の下にはなく、その長径とほぼ直角をなしてうつぶせになっていた。

一方、図版26、27のように顔面部には前腕の骨（橈骨と尺骨）を立てかけてあり、あたかも顔面部を支えるような位置にある。かように１号体については頭部と軀幹骨の位置は不自然であり、改葬と推定される。

さらに、軀幹骨の上には方形（30×20cm）の石があり、抱石葬とみられる。

２号体についてみると、１号体から約２ｍ離れた場所で、地表からの深さは１号体とほぼ同様であった。骨格の保存状態は極めて悪く、伸展葬か屈葬かの判定がつかなかった。なお、猪の牙とみられる副葬品が左側上腕骨から伴出した。

さらに伴出土器についてみると、人骨の直上の攪乱を受けない貝層から阿高系土器と、磨消縄文をもつ土器とが出土し、さらに鯨の椎骨の圧痕文様を底部にもつ南福寺式とみられる土器（三島、1962）も出土した。すなわち、本人骨には、縄文時代中期末から後期初頭にかけての土器を伴出しているので、本人骨の年代は、ほぼ同時代と推定される。このほか、人の足を形どったとみられる土器も伴出し、骨角器も出土している。

4. 出土人骨の年齢および性

１．１号体（図版27、28）

三主縫合の癒合状態をみると、外板は左側冠状縫合全部、矢状縫合の一部は既に癒合し、他の部分は開離しており、内板は矢状縫合の後半および冠状縫合の泉門部付近のみ開離し、他の部分は閉鎖している。従って熟年であると推定される。

性についてみると、大坐骨切痕が極めて大きく、特に関節旁溝（左側のみ遺存）は幅広く深い。また眉間隆起および外後頭隆起の形成はともに弱く、女性と推定される。

頭蓋の上面観は卵円形をなし、短頭型であり、鼻根部の隆起は強く、犬歯窩は浅い。また顔面部は全体的に幅広い。

下顎骨はオトガイの隆起は強い。また角前切痕は認められなく、下顎枝は幅広い。

以上、顔面部の形態が縄文時代の特徴を示していることは特に注目される。

歯の咬耗はかなり強く、Broca の２～３度である。抜歯は認められない。

なお、大腿骨、脛骨などの骨端破損のため身長の推定はできなかった。

２．２号体

保存状態が悪い。外後頭隆起の高まりは著しく、男性と推定される。また歯の萌出状態から成人と推定される。また咬耗状態はBrocaの３度で強い。下顎骨体は高く、著しい柱状大腿骨である。身長の推定は不能であった。

参考文献

北條暉幸・緒方勉：熊本県天草郡沖の原貝塚人骨とその遺物。人類学雑誌、第79巻70頁、1971。
（学会発表、第24回日本人類学会・日本民族学会連合大会、於久留米大学、1970）

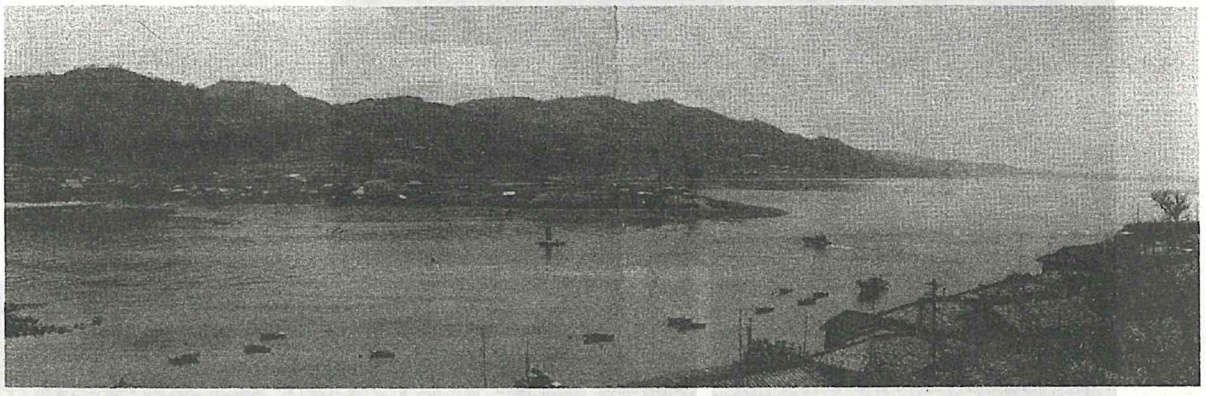
北條暉幸：熊本地方人頭骨形態の時代的変化の概観。熊本県文化財調査報告第46集、川田京坪遺跡、付論２・19―23頁、1980。

Martin―Saller：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. Ⅰ、1959

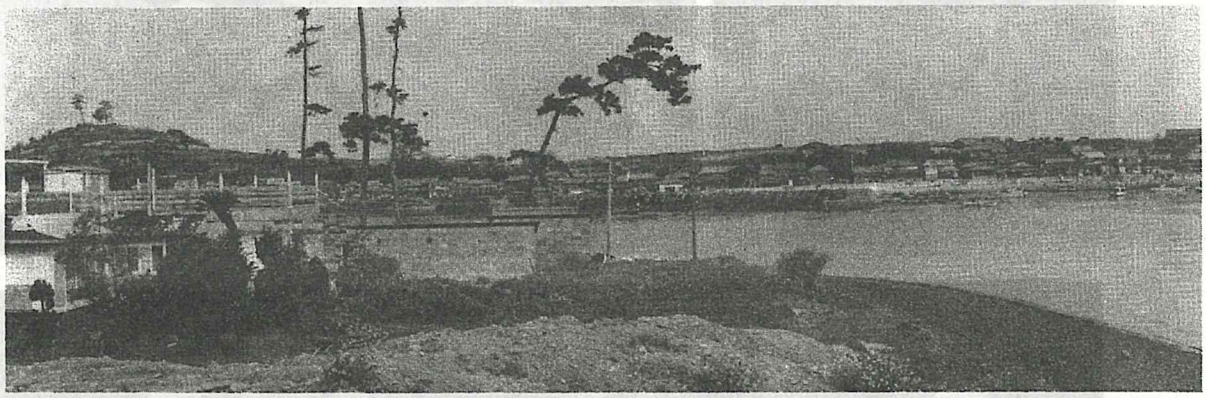
三島　格：鯨の脊椎骨を利用せる土器製作台について。古代学、第10巻１号、1962。

内藤芳篤：沖ノ原遺跡の人骨。１―14頁、長崎大学医学部解剖学第二教室、1973。

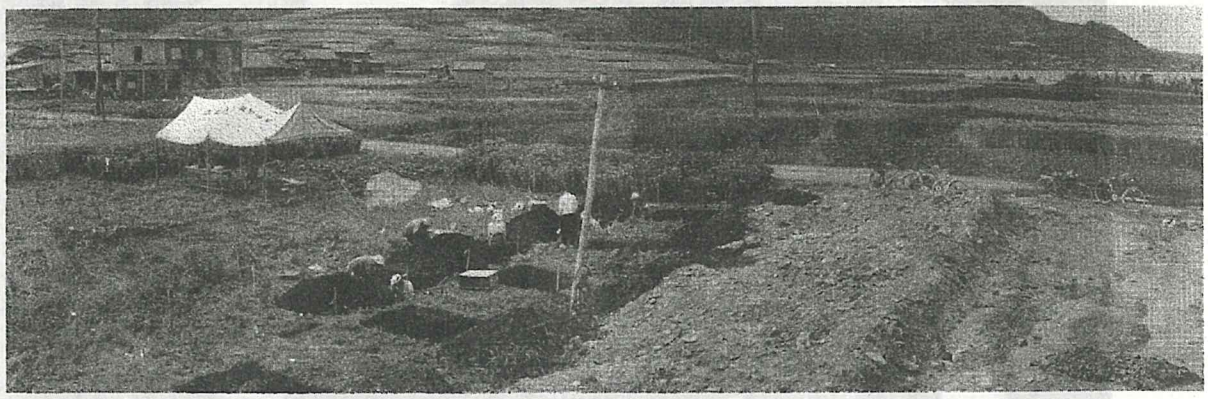
図　版



対岸通詞島より遺跡を望む



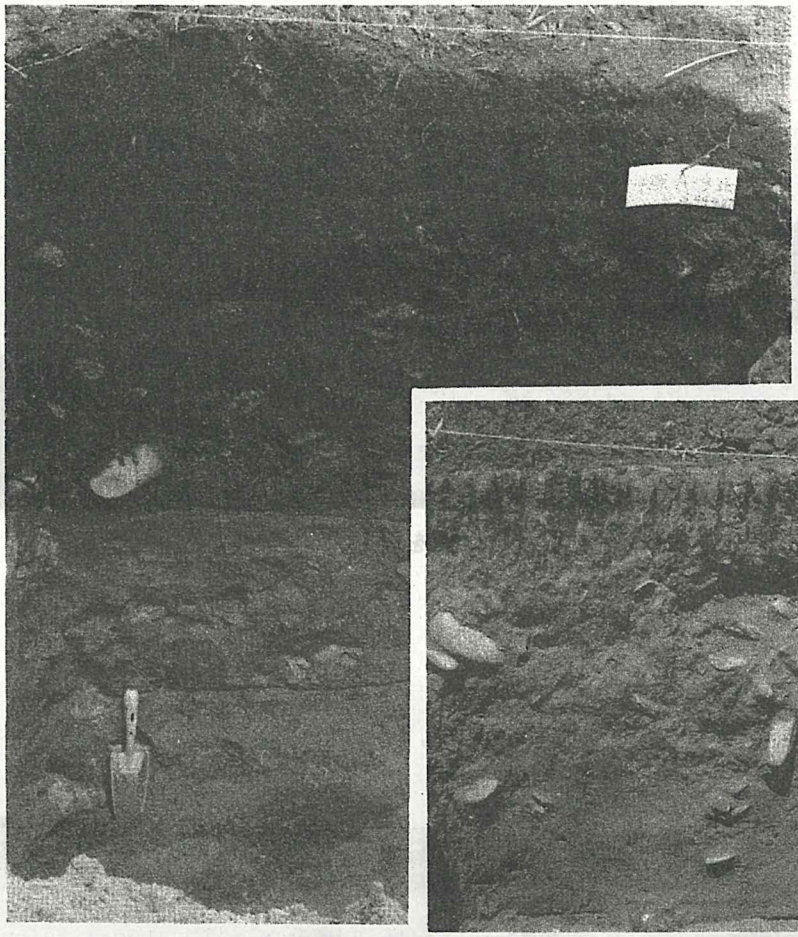
調査地より対岸(北)通詞島をみる



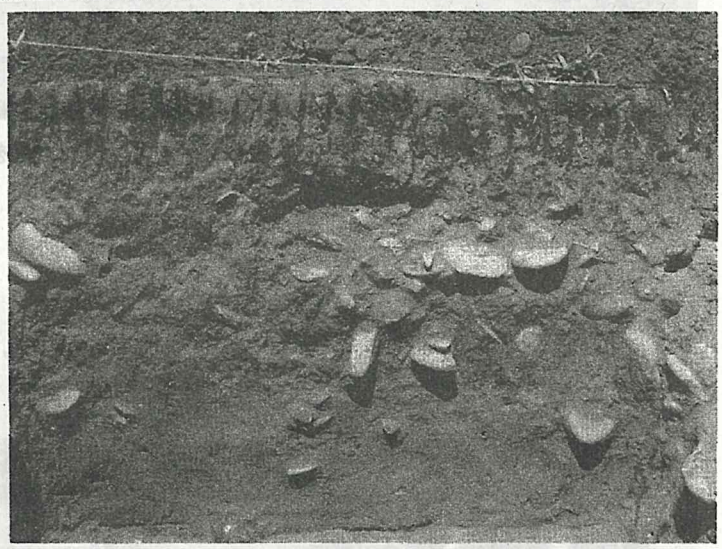
調査地の状況(西より)

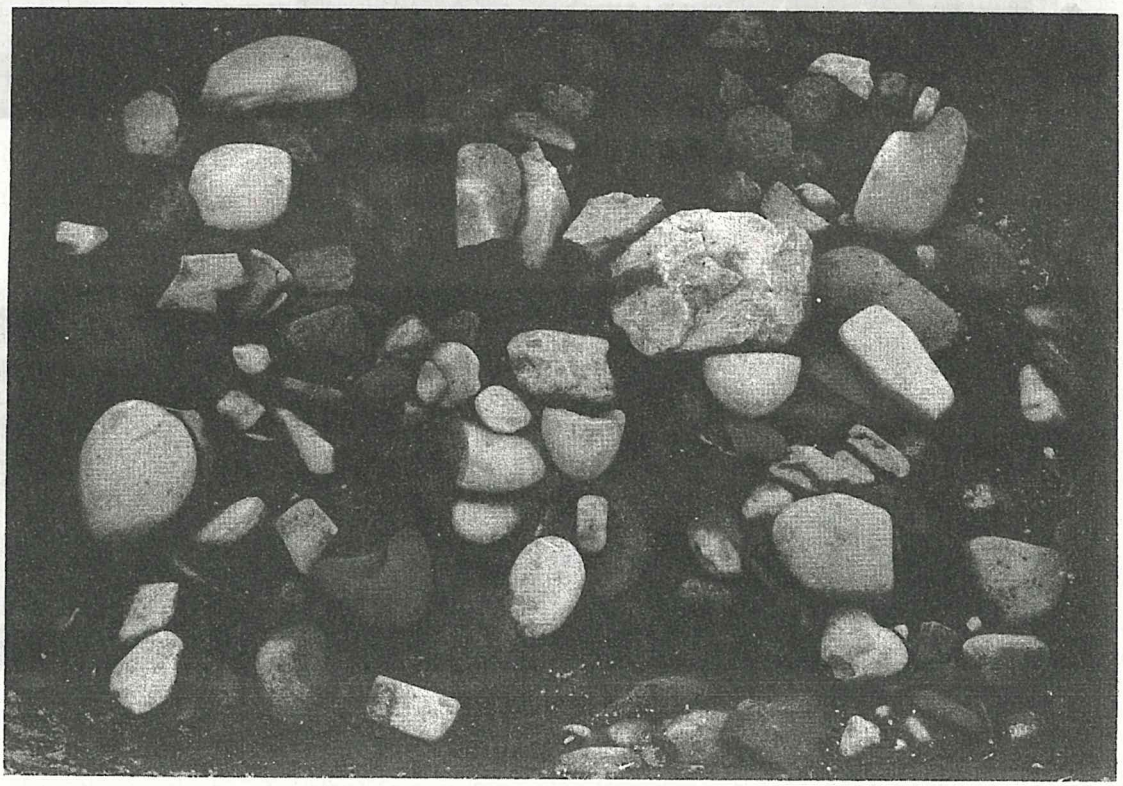
第1図　沖ノ原遺跡の景観

図版 2



土層断面（A－9区）





混礫砂層（第II層）

第2図　土層断面と混礫砂層

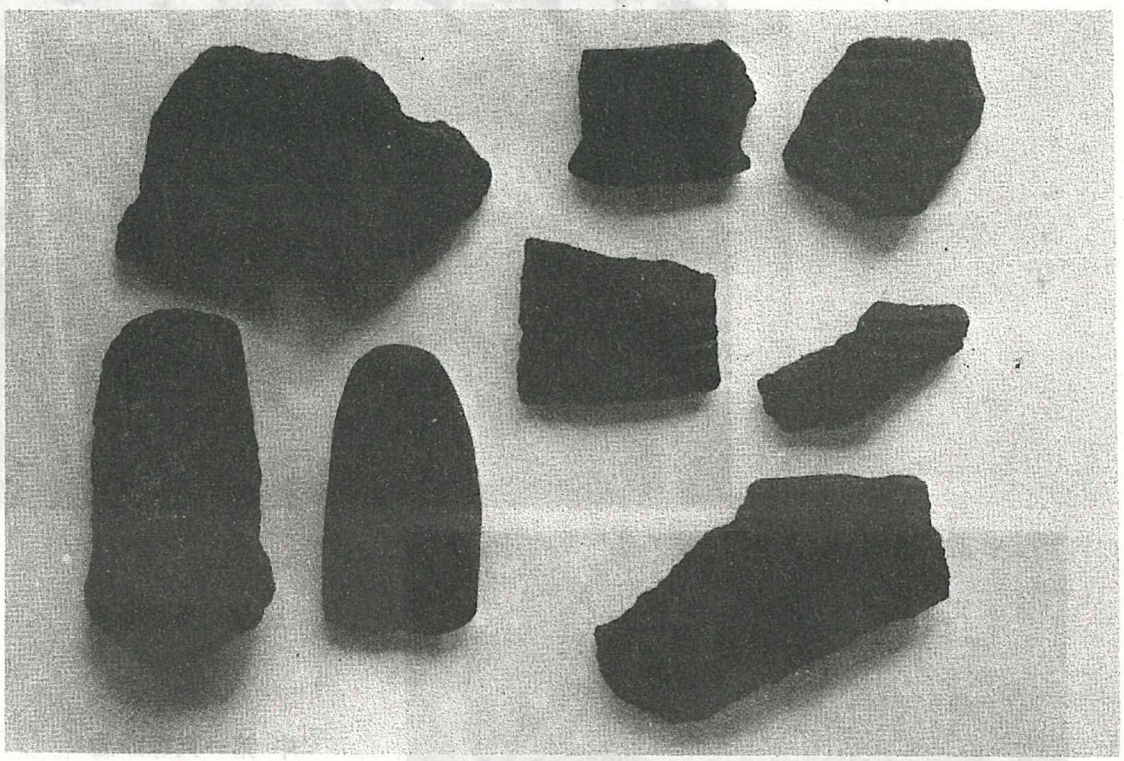
上 第一貝塚断面

中 第一貝塚断面

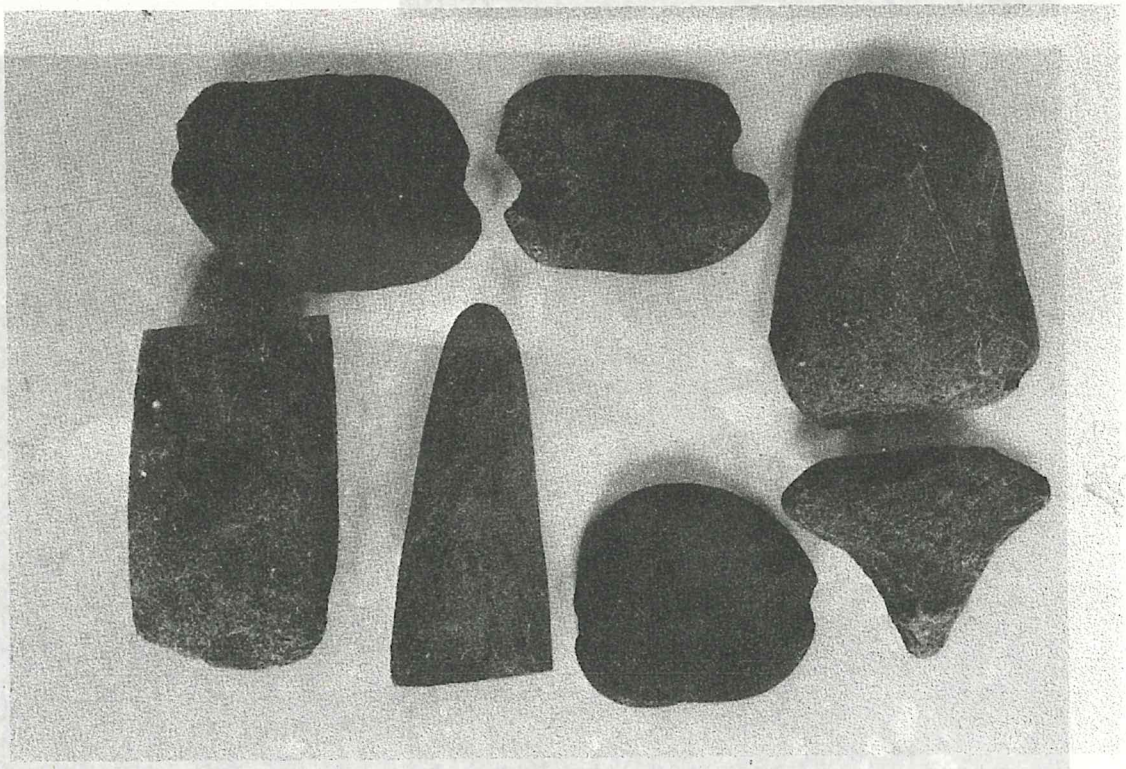
下 第二貝塚

第3図 貝　　塚

図版 4

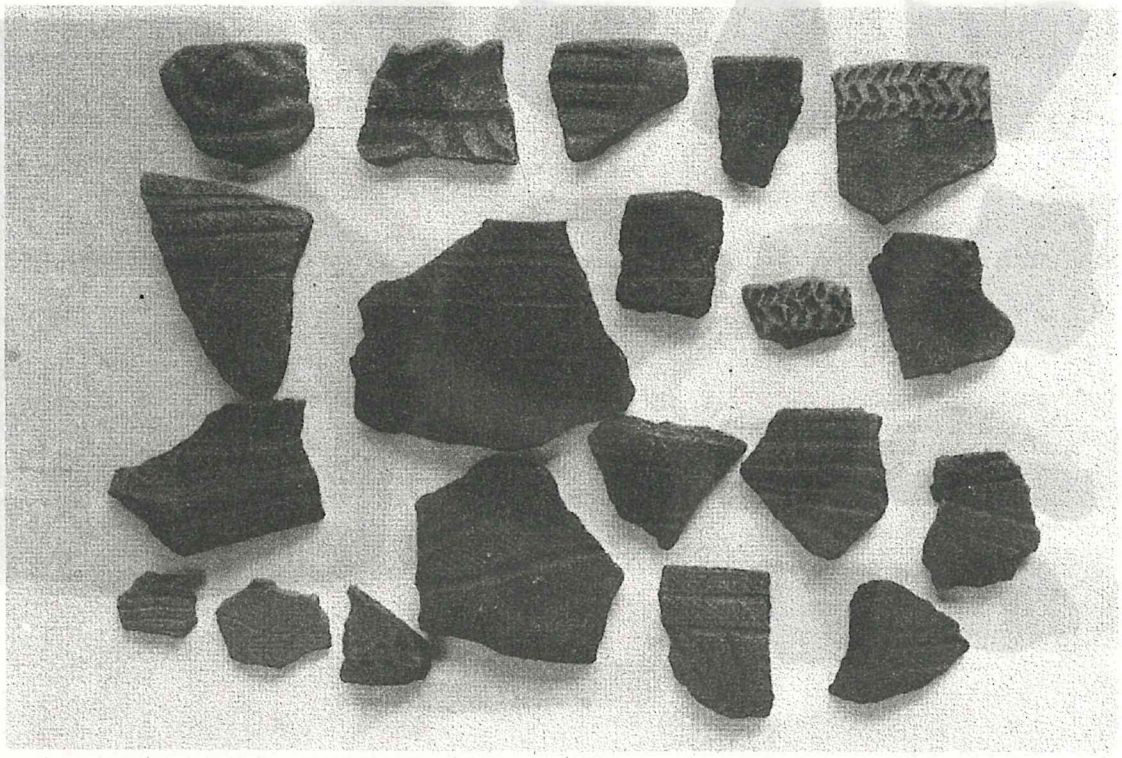


A－1区

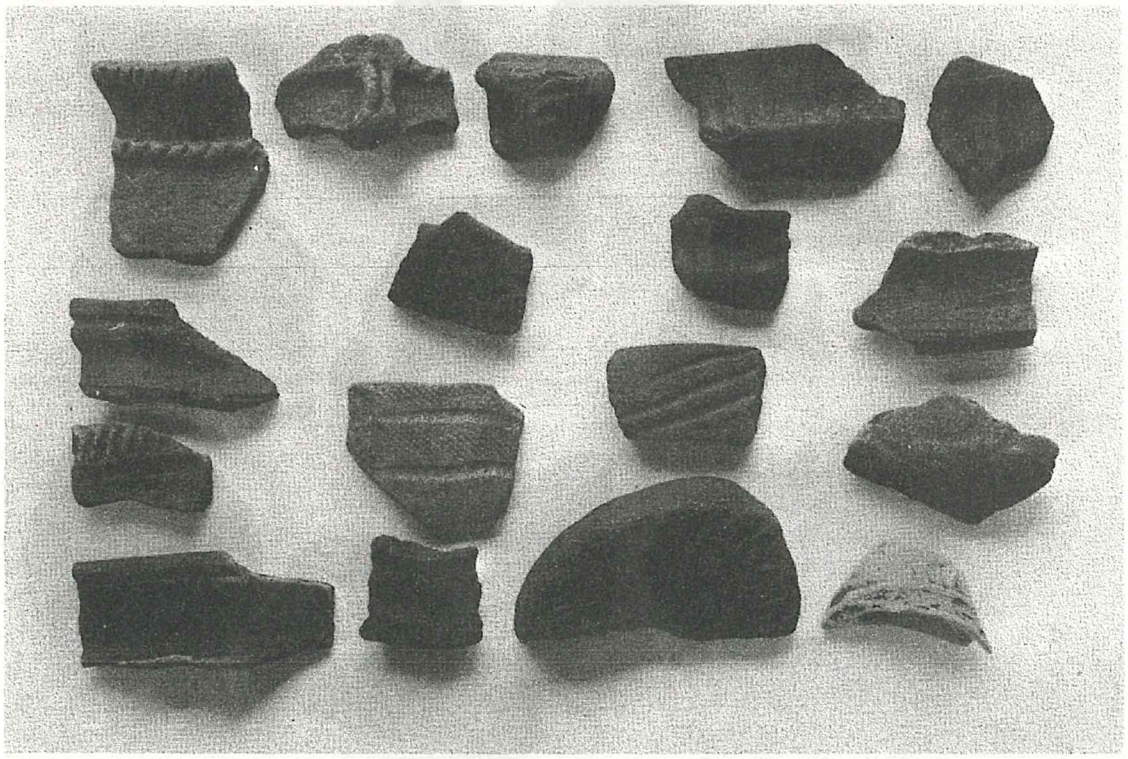


A－1区

第4図　出土遺物1

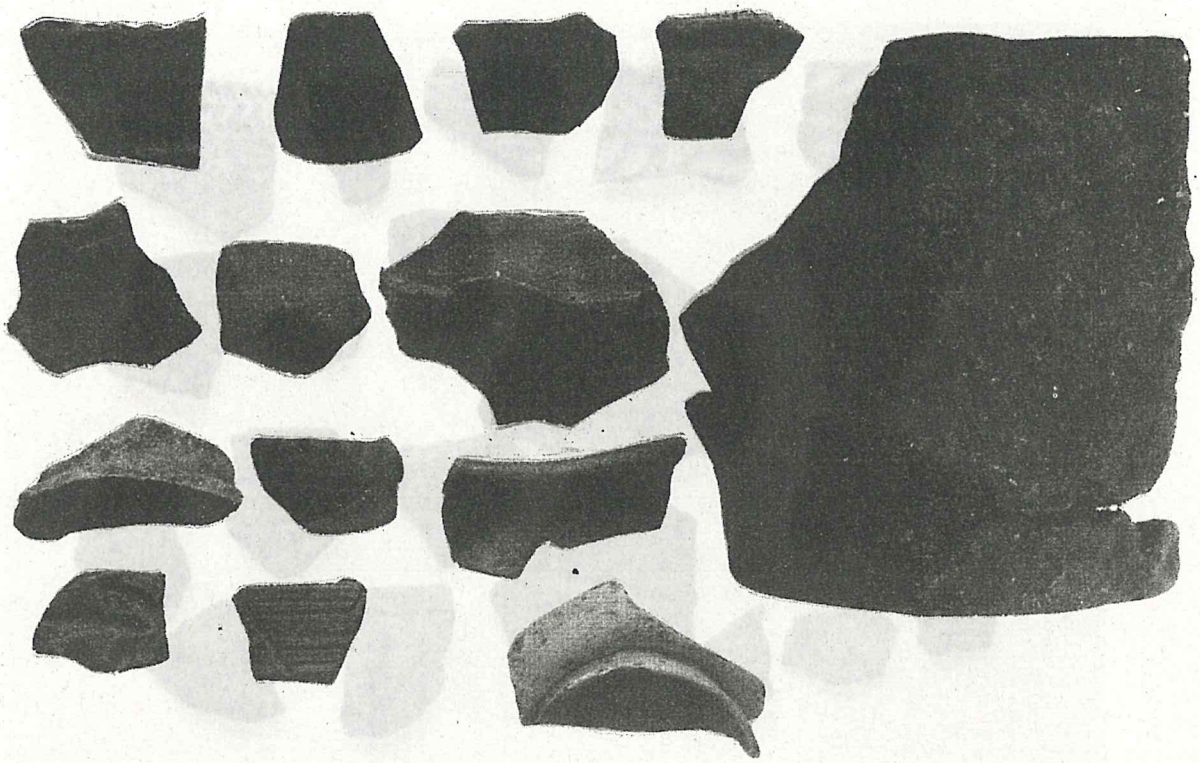


A－2区

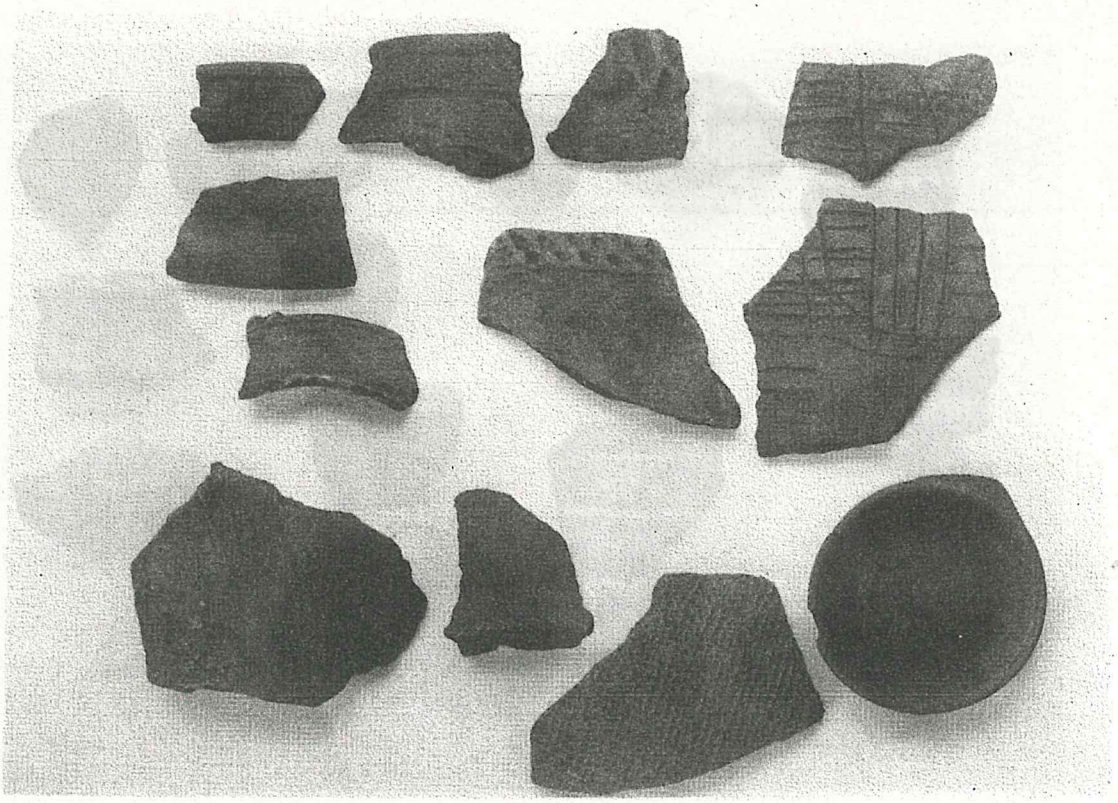


A－3区

第5図　出土遺物2

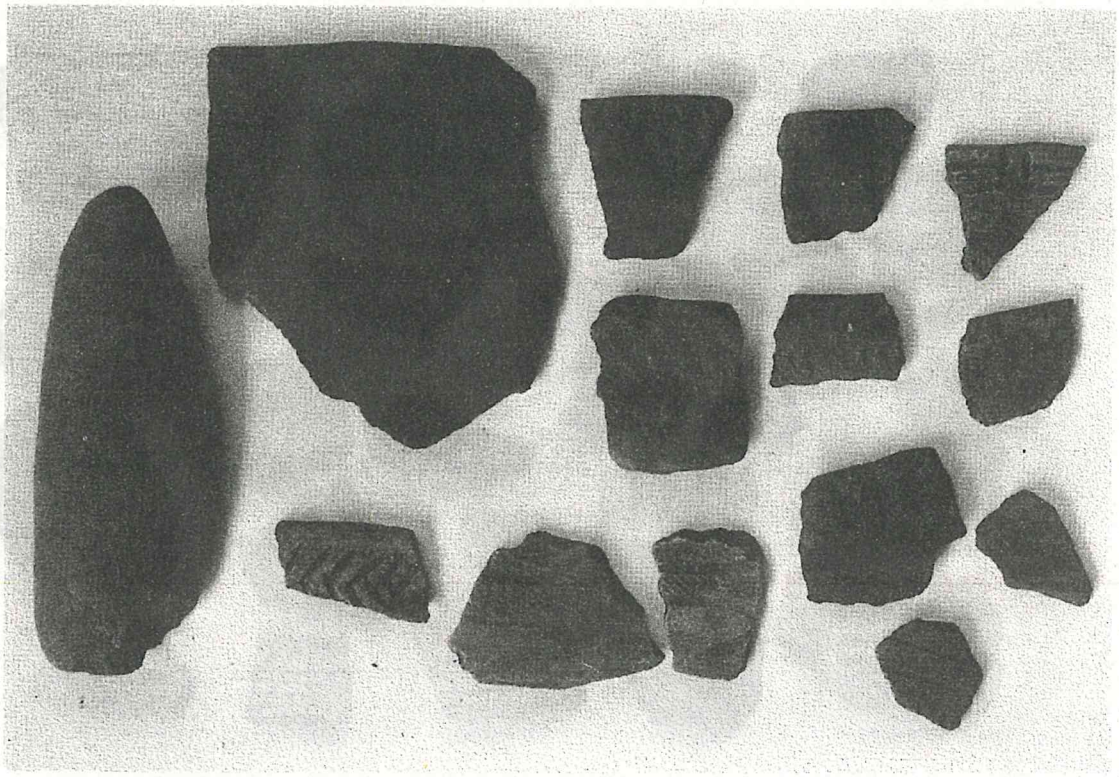


A－5区

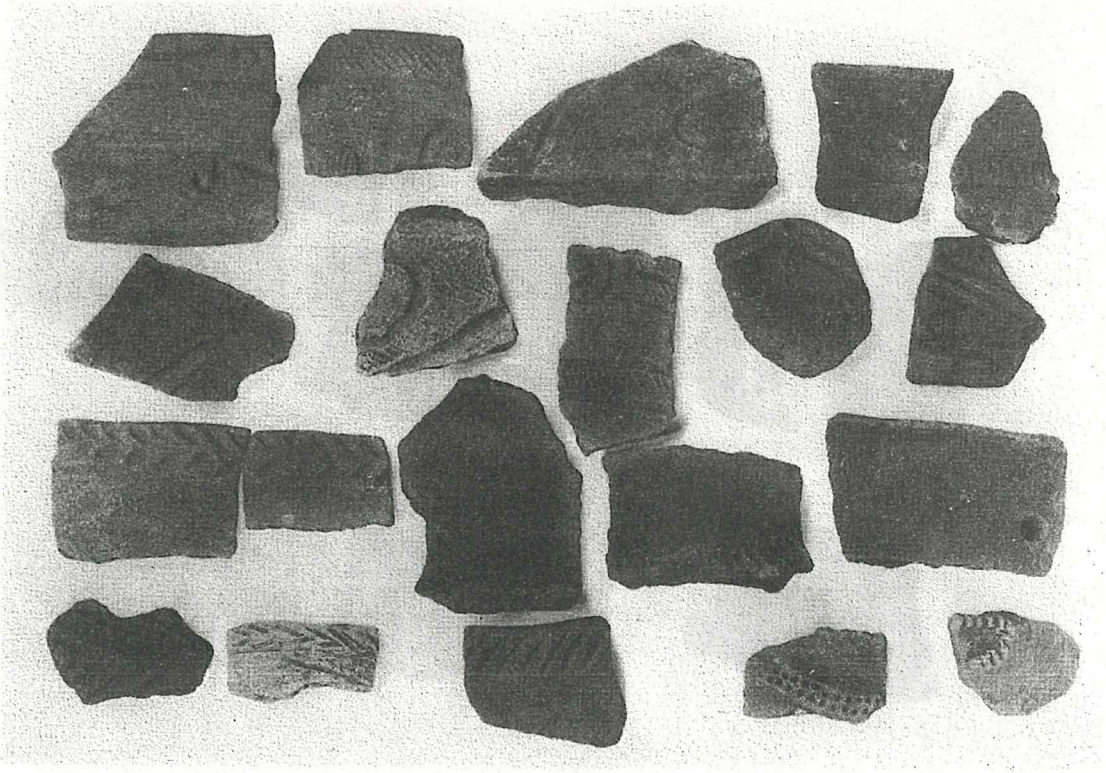


A－7区

第6図　出土遺物3



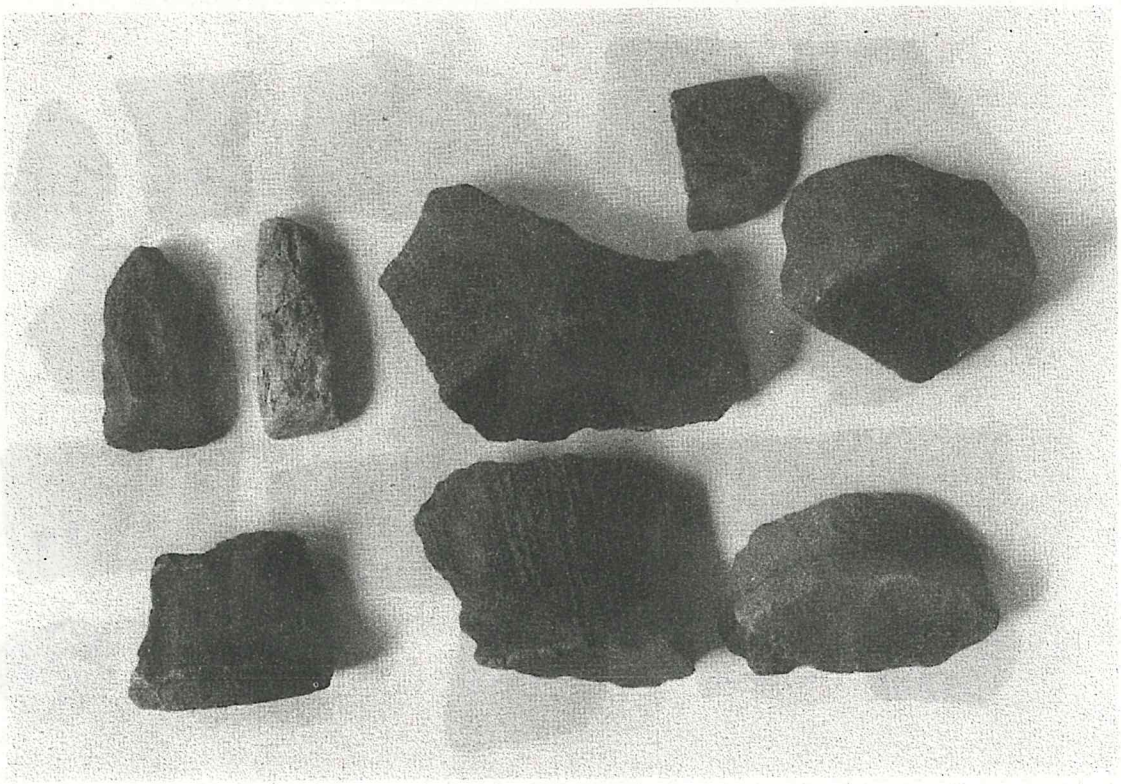
B－1区



B－2区

第7図　出土遺物4

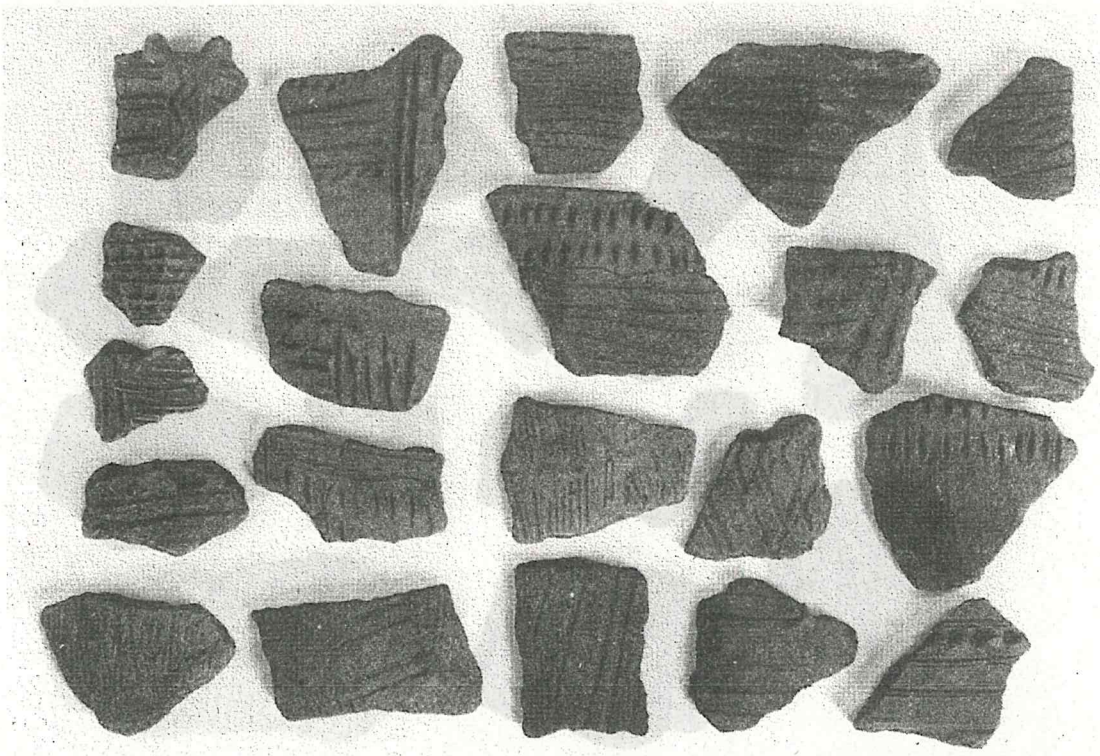
B－4区



B－4区

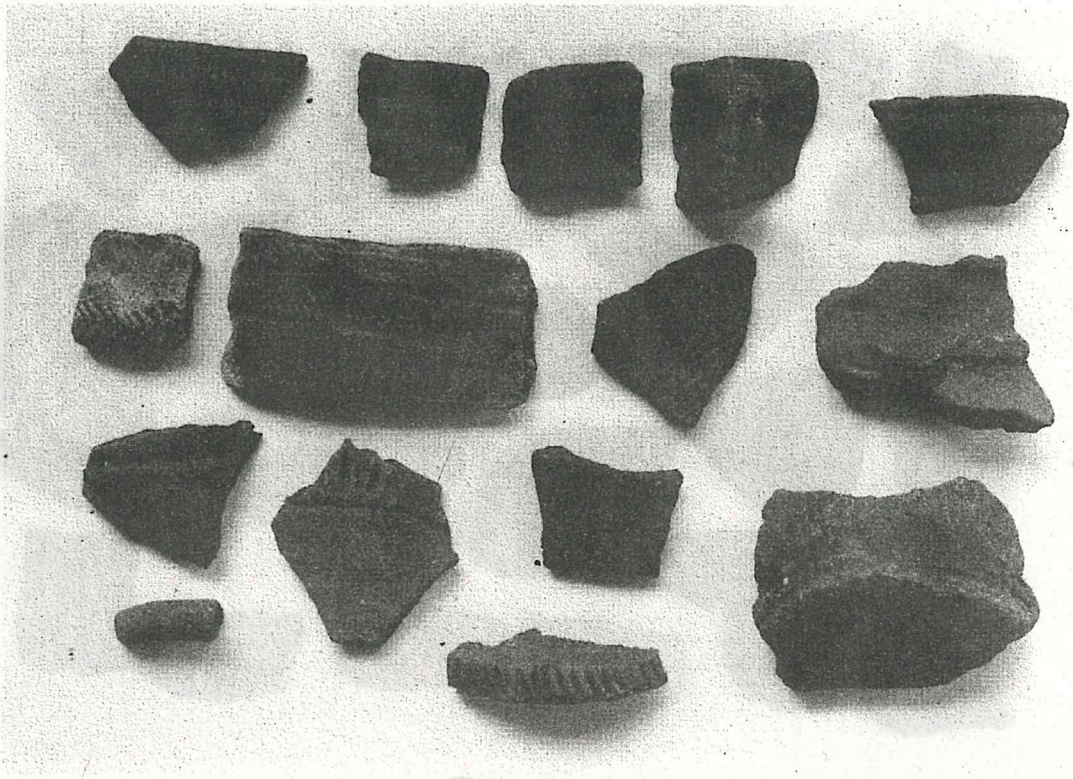
第8図　出土遺物5

B－6区

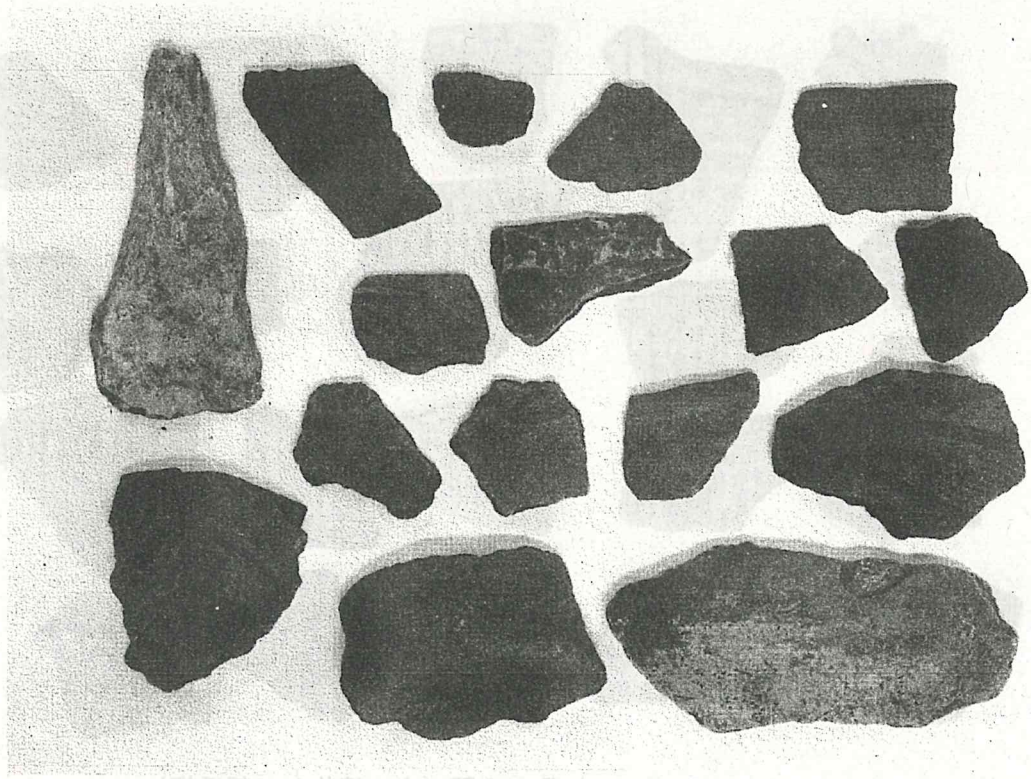


B－6区（上の遺物と一部重複）

第9図　出土遺物6

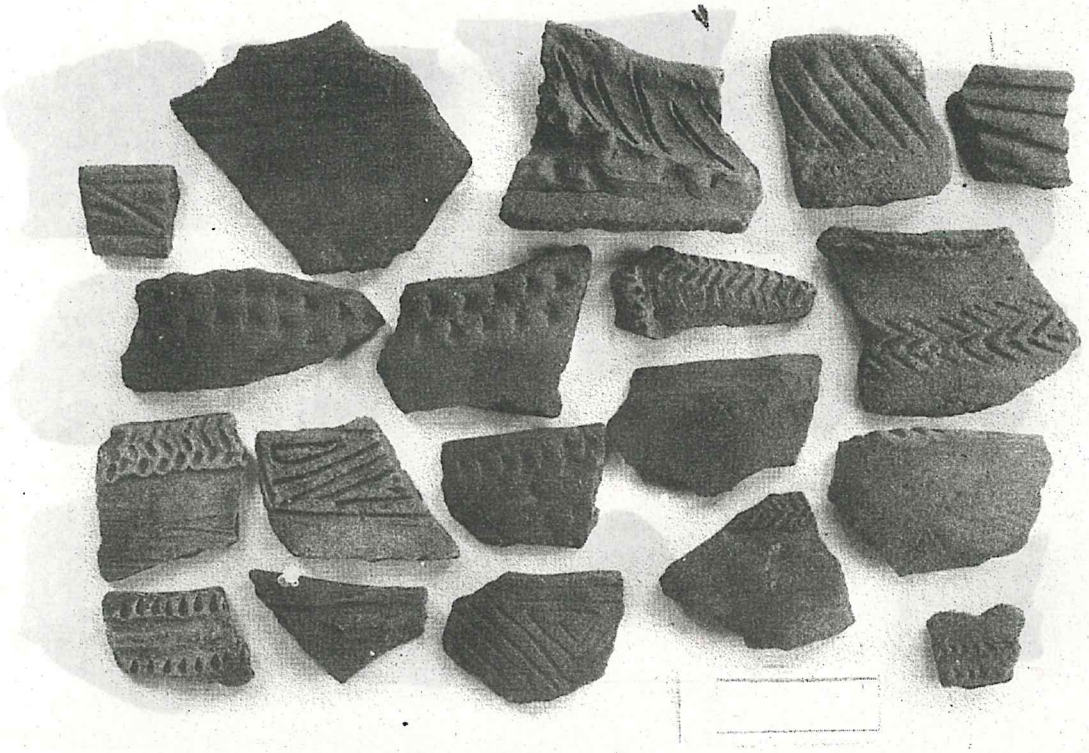


C－1区



C－2区

第10図　出土遺物7

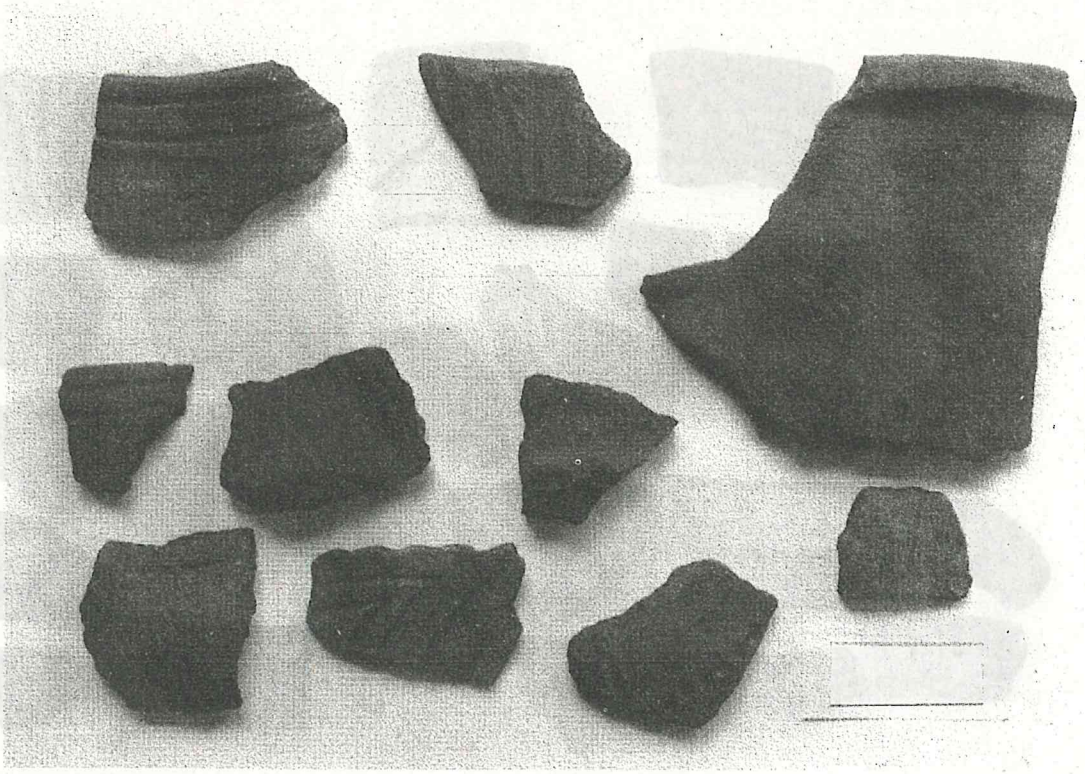


C－3区

C－3区

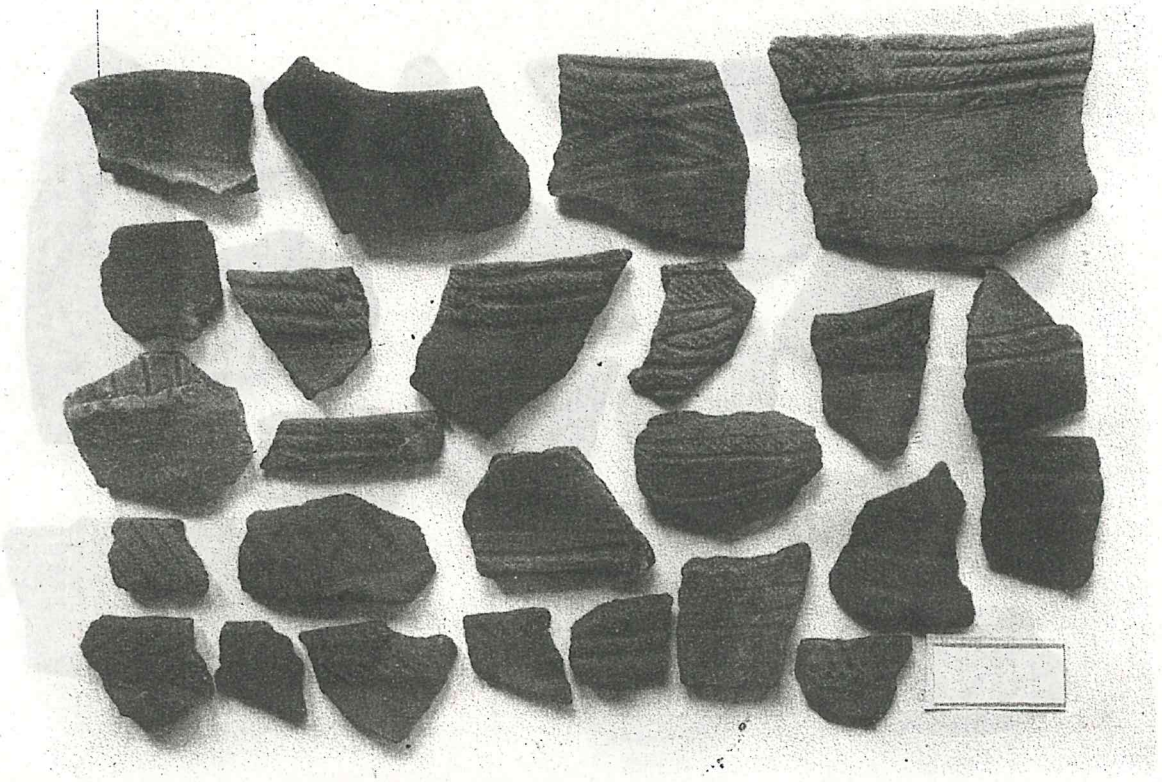
第11図　出土遺物8

C－3区

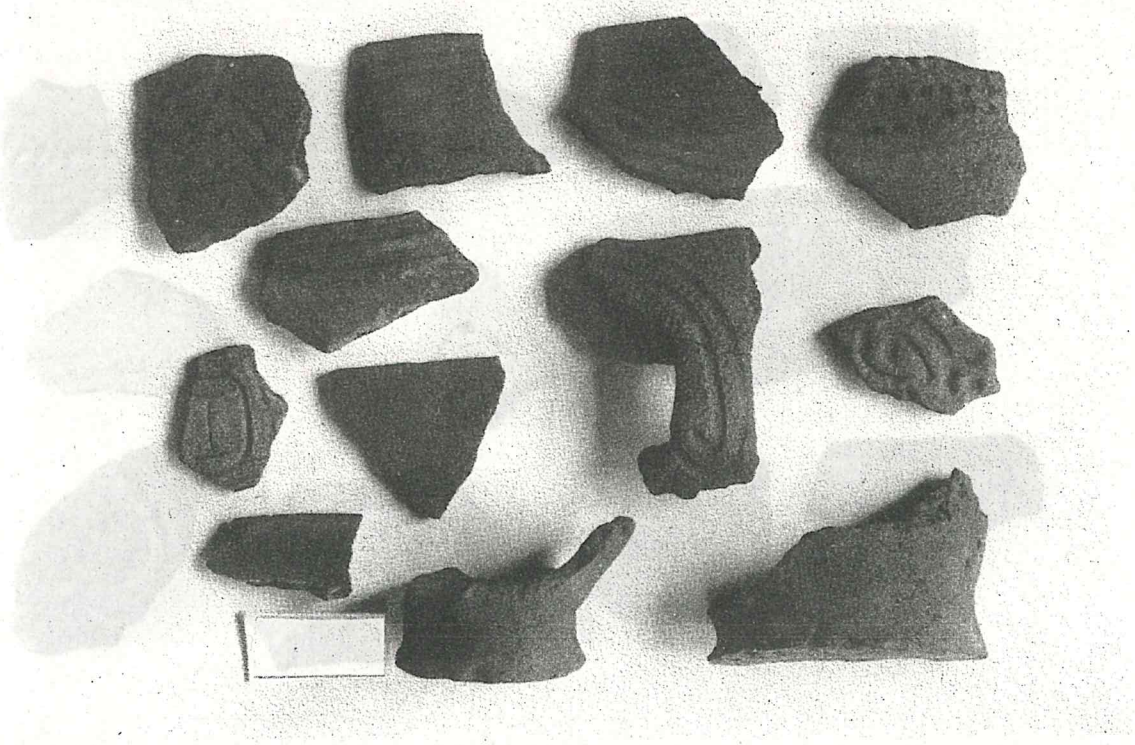


C－3区

第12図　出土遺物9



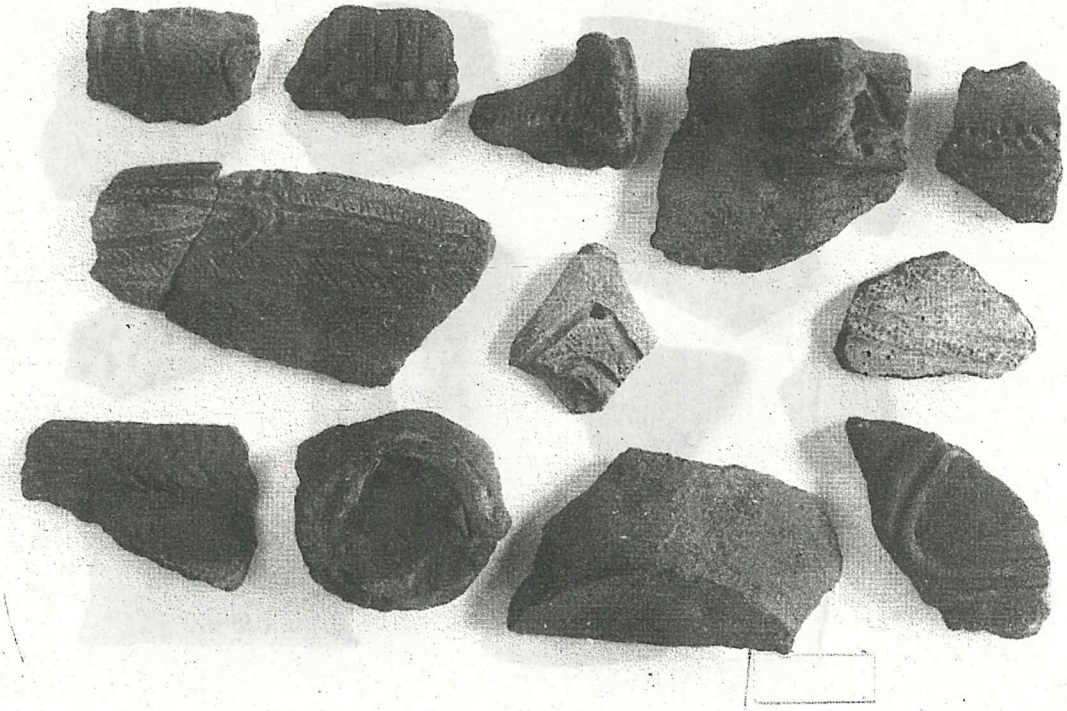
C－4区



C－4区

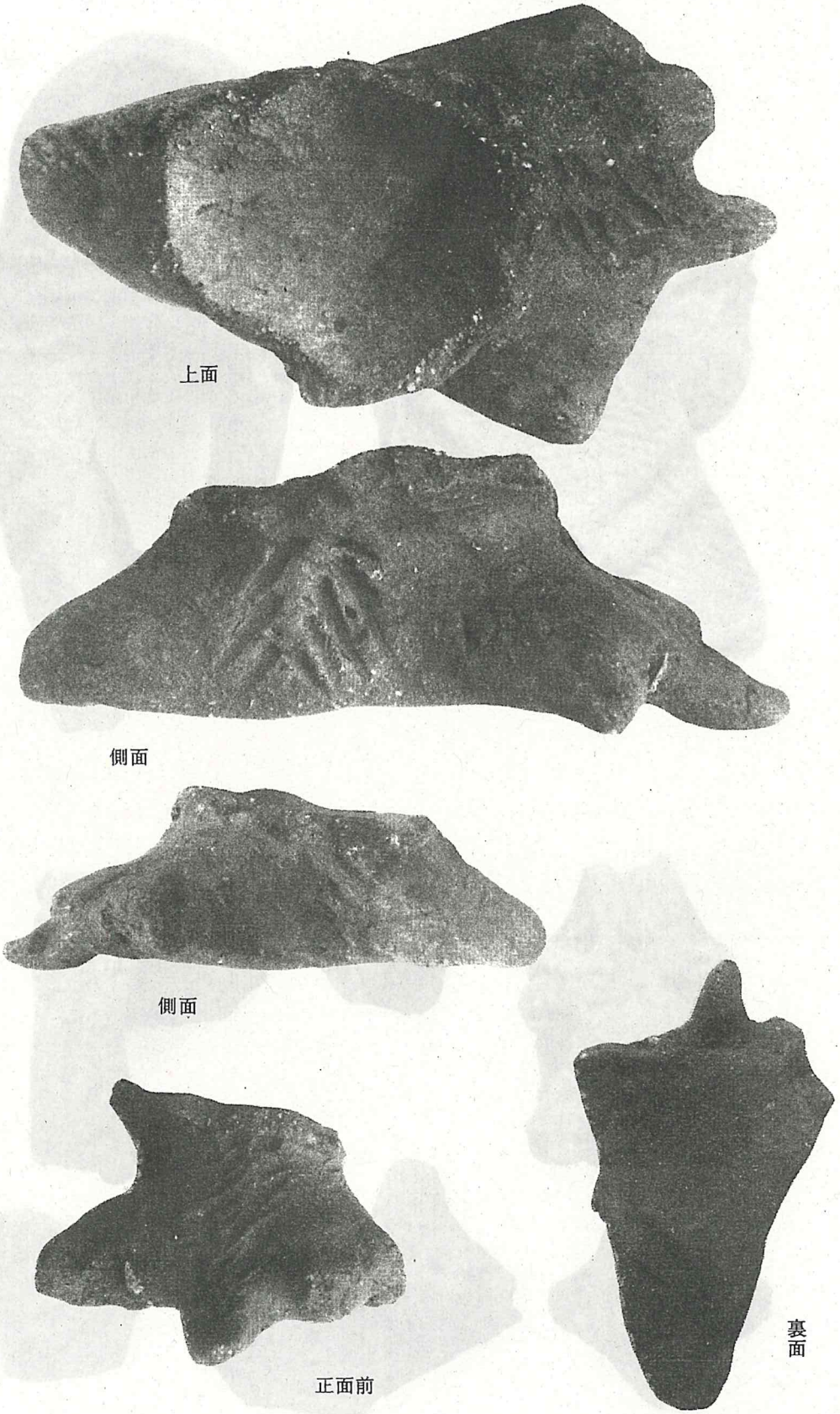
第13図　出土遺物10

D－1区



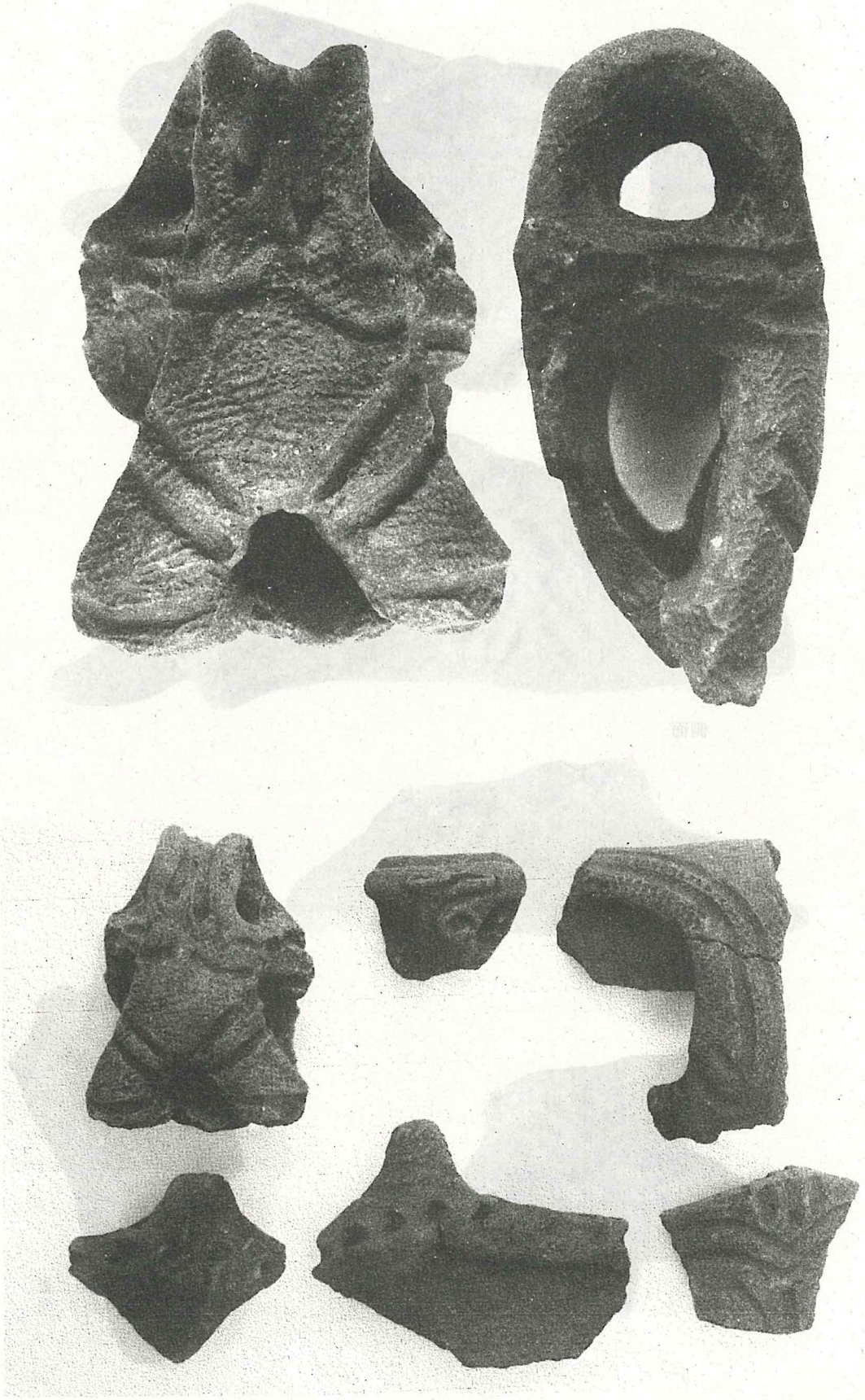
D－1区

第14図　出土遺物11



D－1区

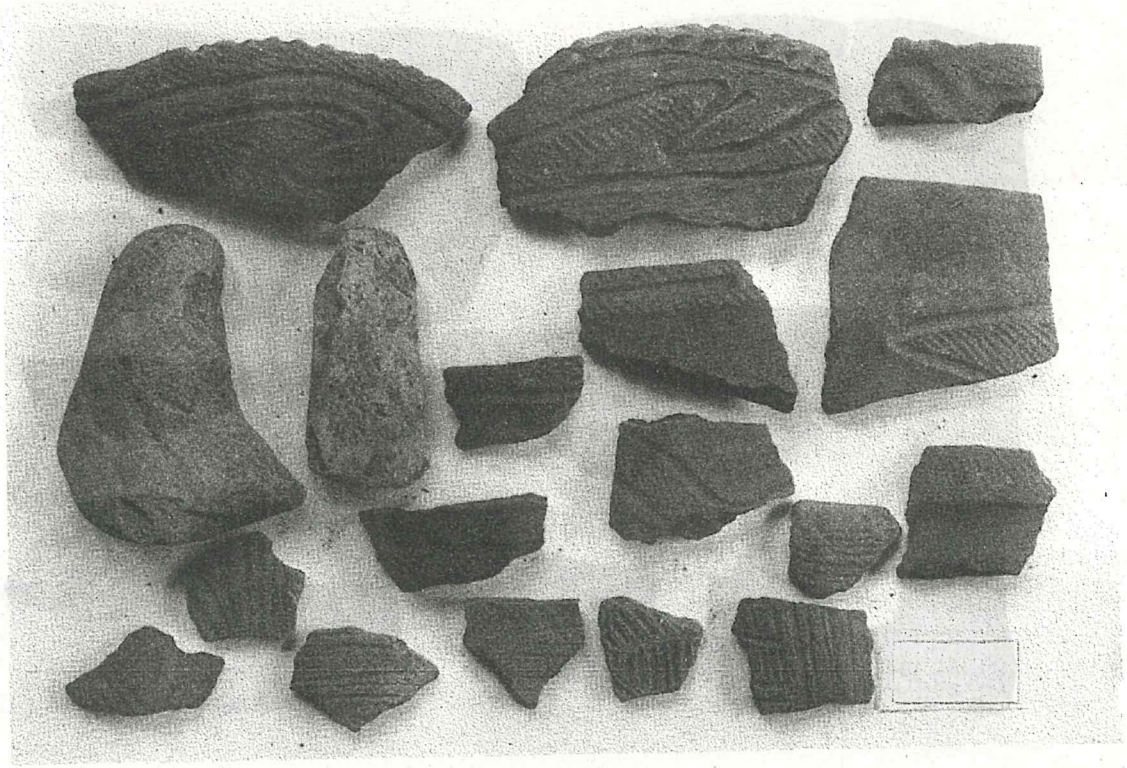
第15図　出土遺物12



D－3区

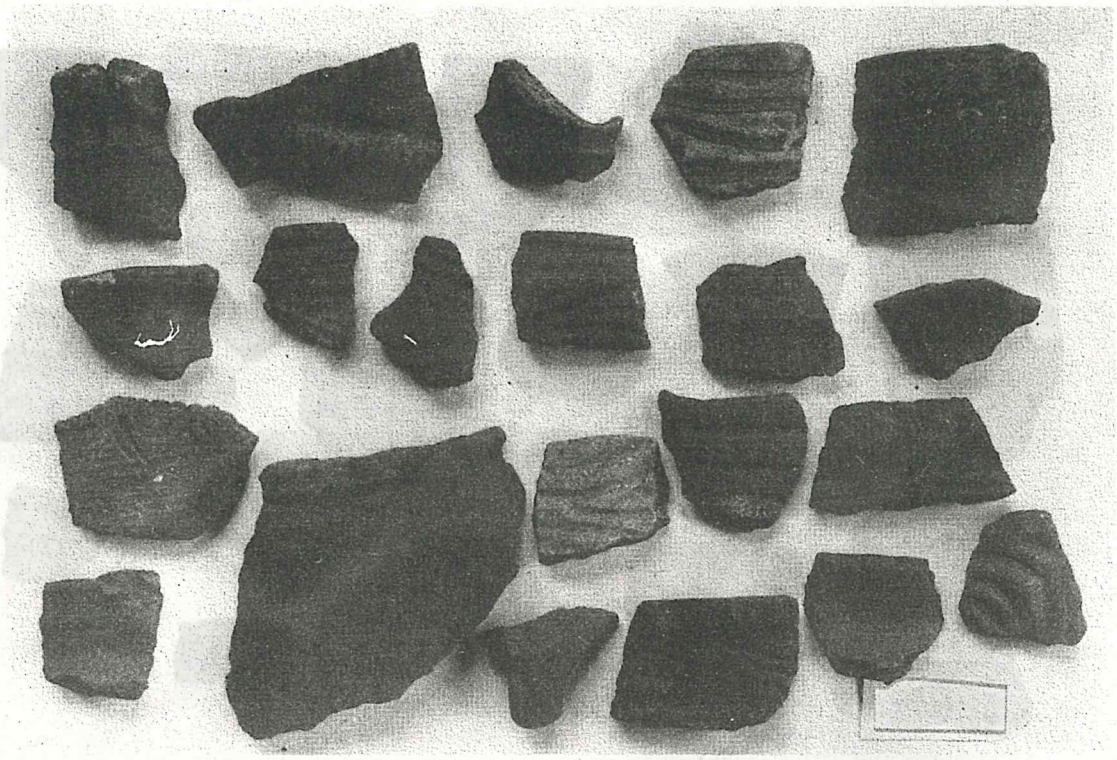
第16図　出土遺物13

D－3区

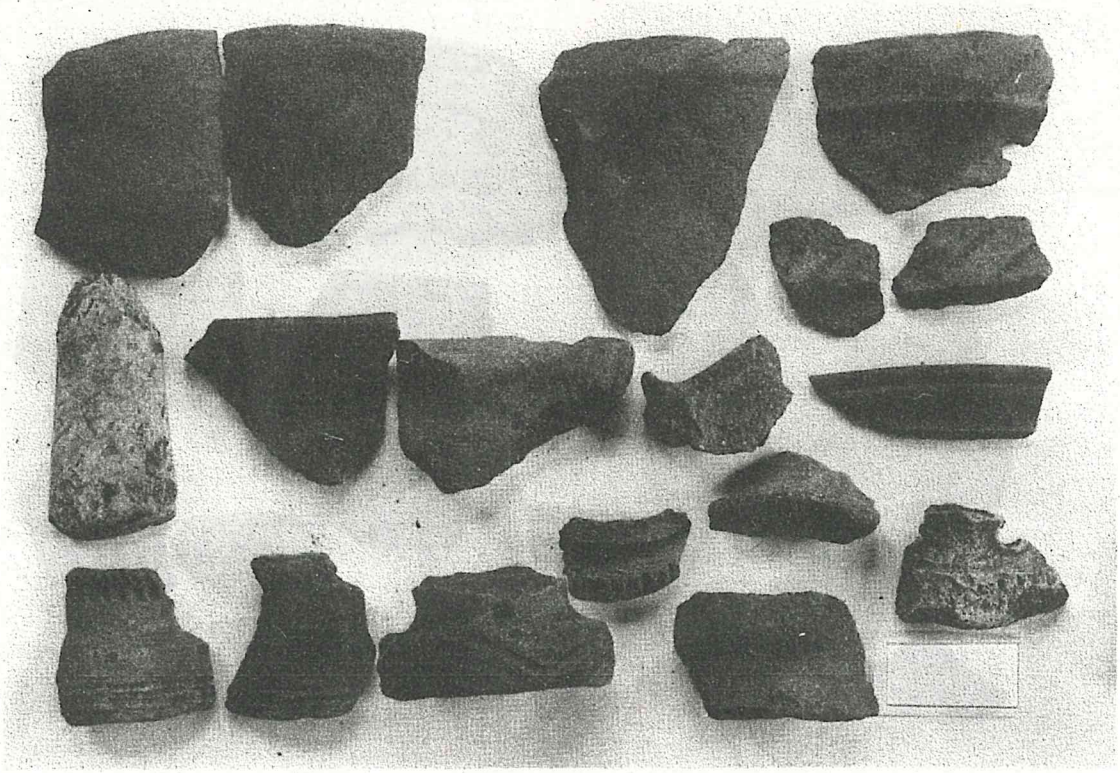


E－3区

第17図　出土遺物14



E－3区



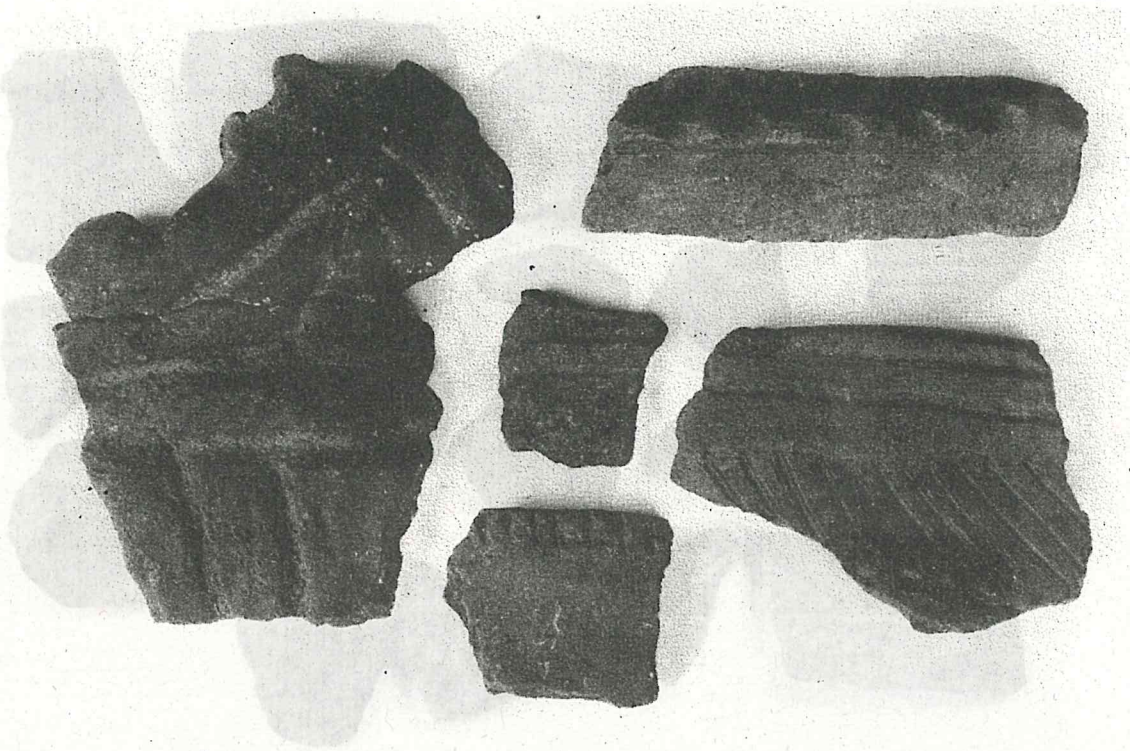
E－3区

第18図　出土遺物15

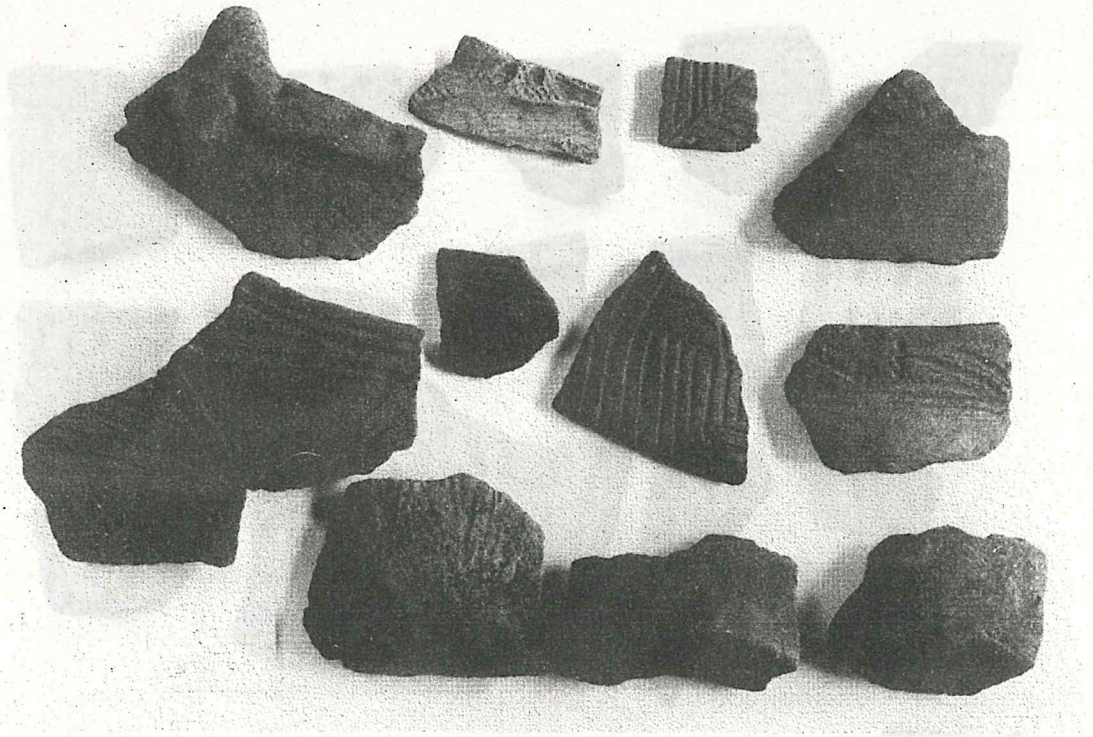
E－3区

E－3区

第19図　出土遺物16

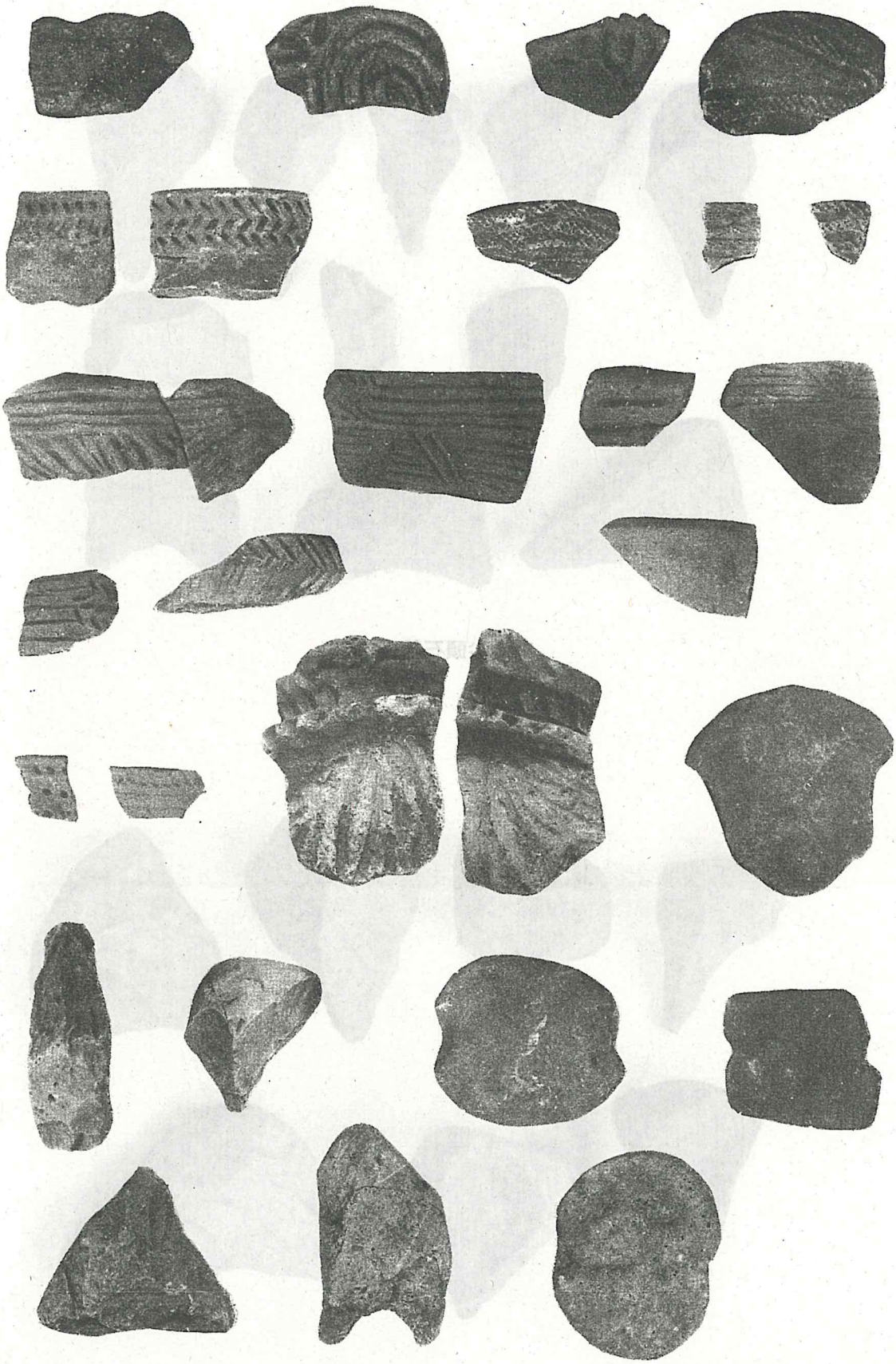


第一貝塚 貝層下



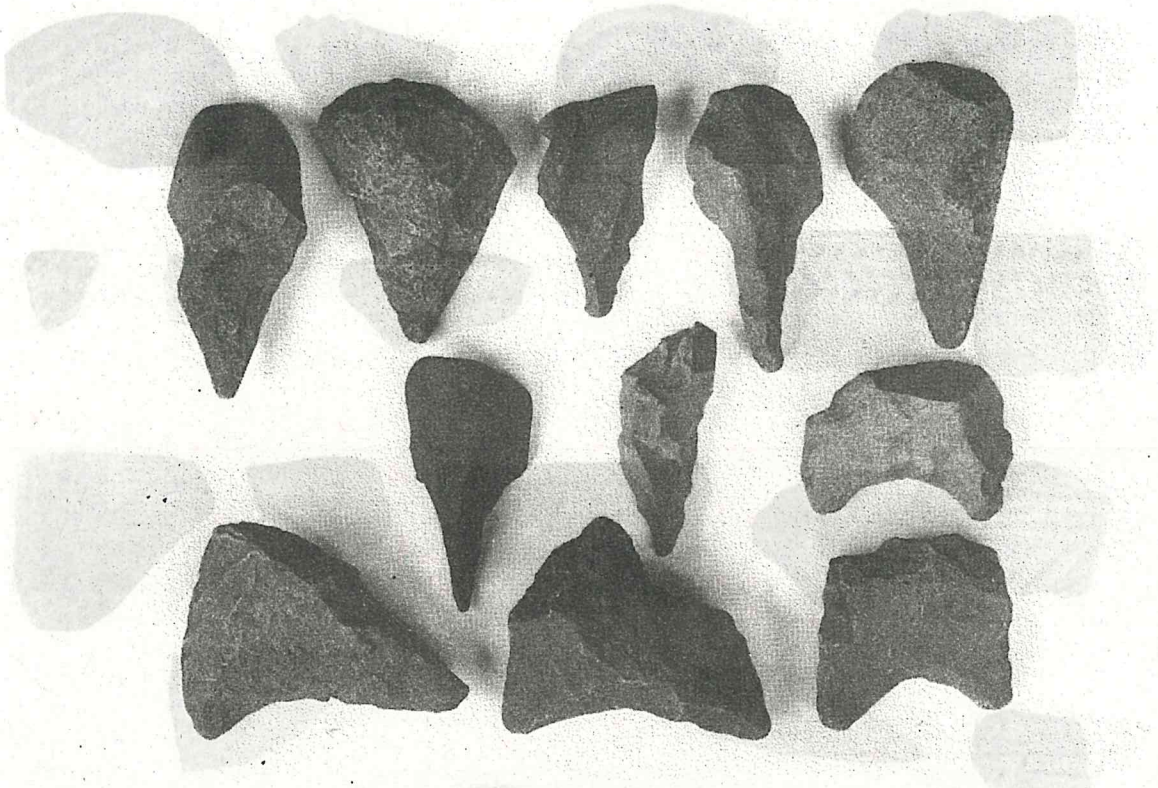
第二貝塚 貝層下

第20図　出土遺物17

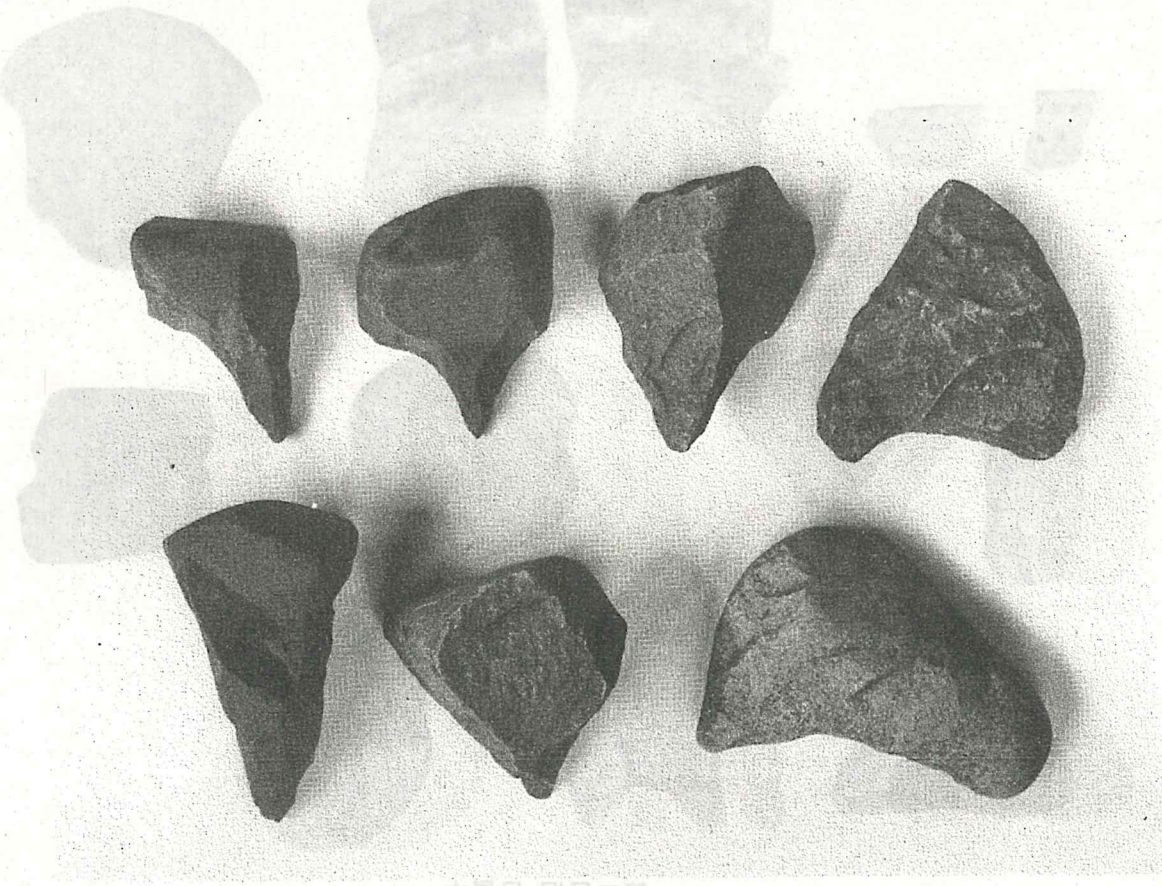


第二貝塚 貝層中

第21図　出土遺物18

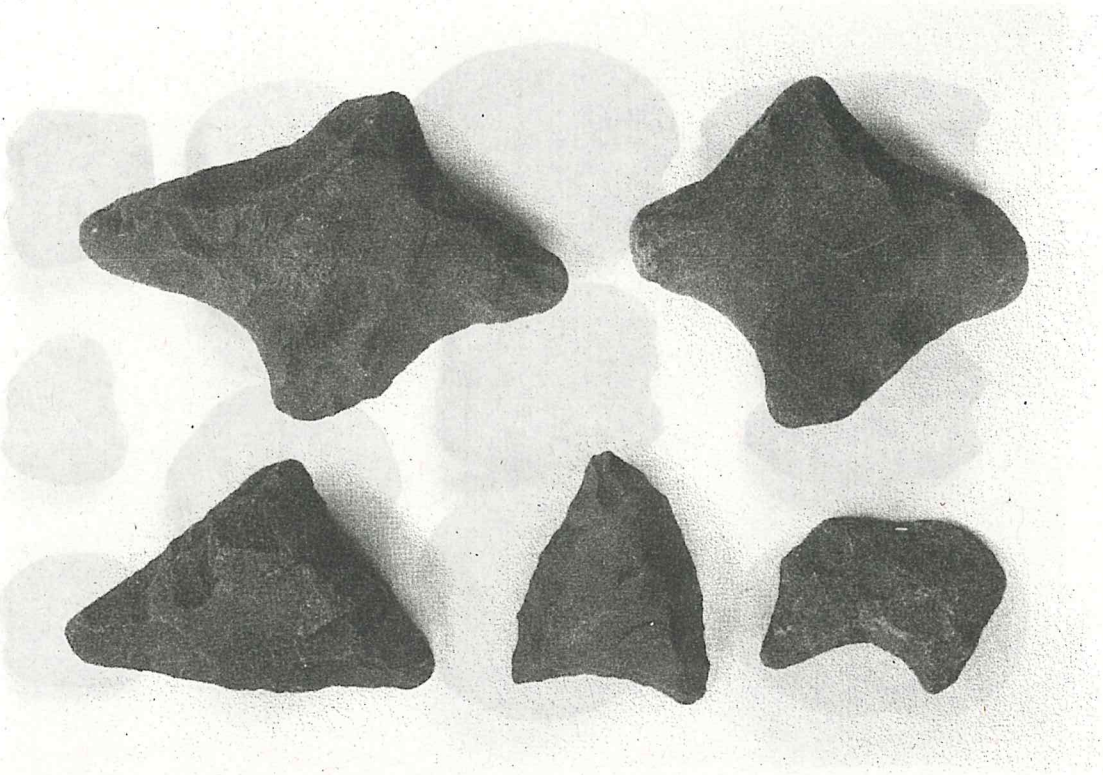


尖頭石器(各区)

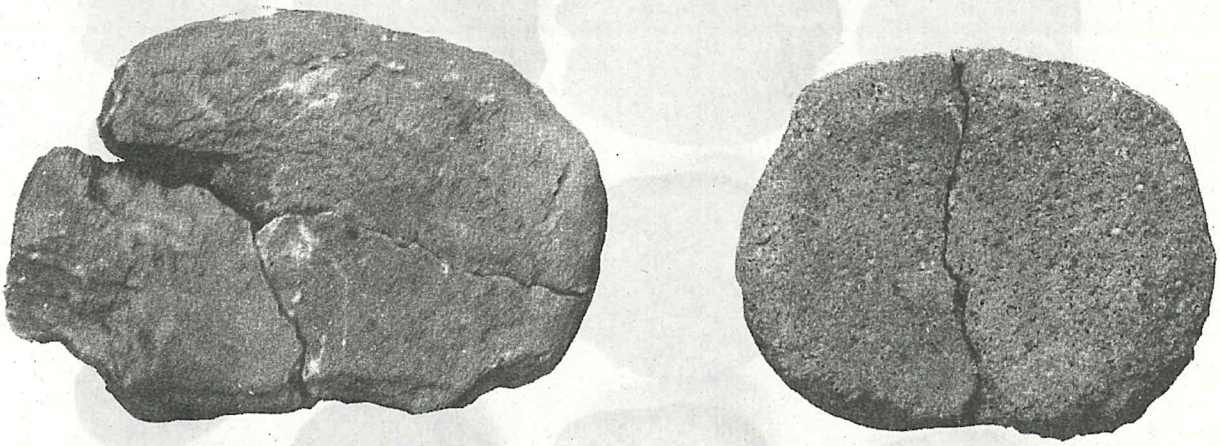


尖頭石器(各区)

第22図　出土遺物19

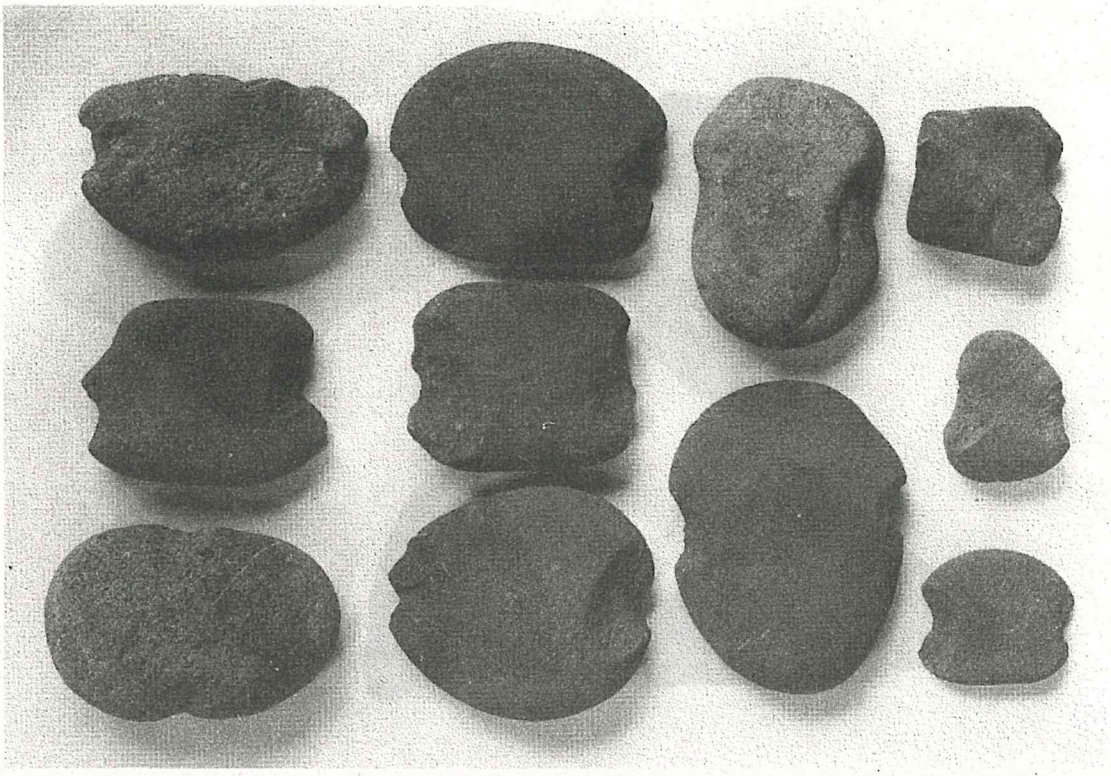


尖頭石器類(各区)

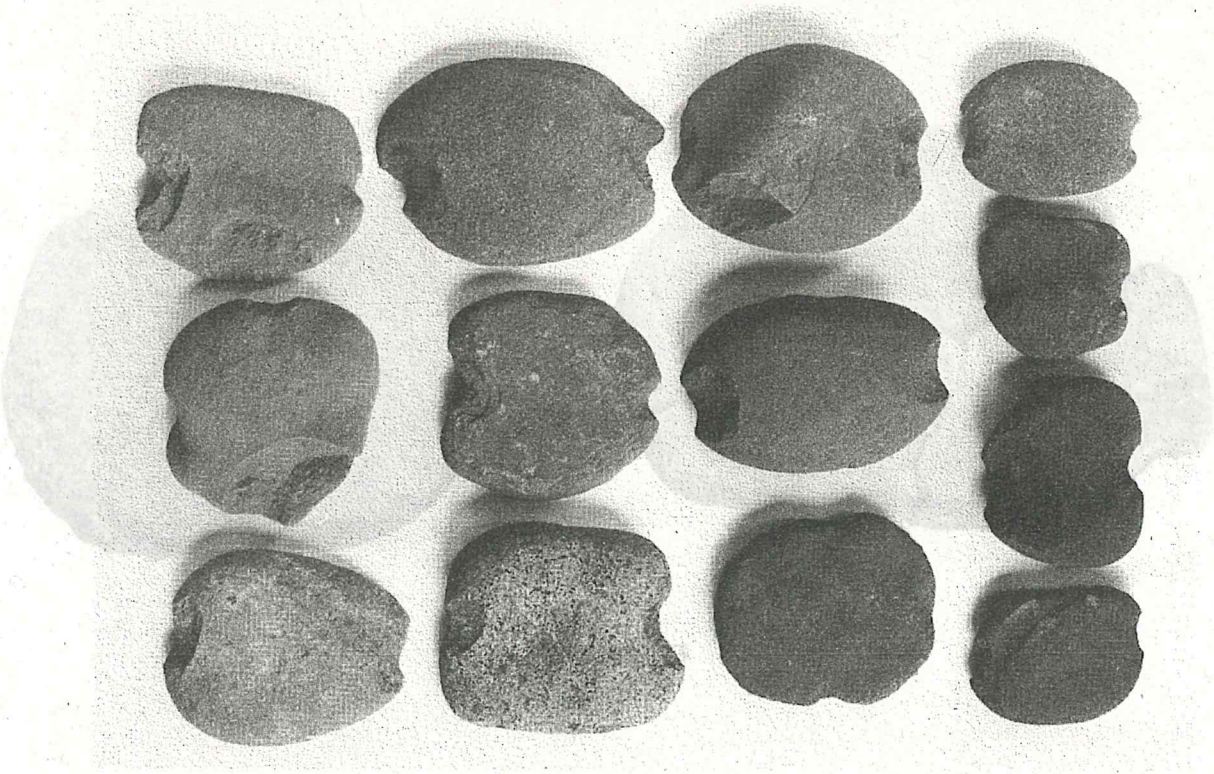


石　皿(各区)

第23図　出土遺物20

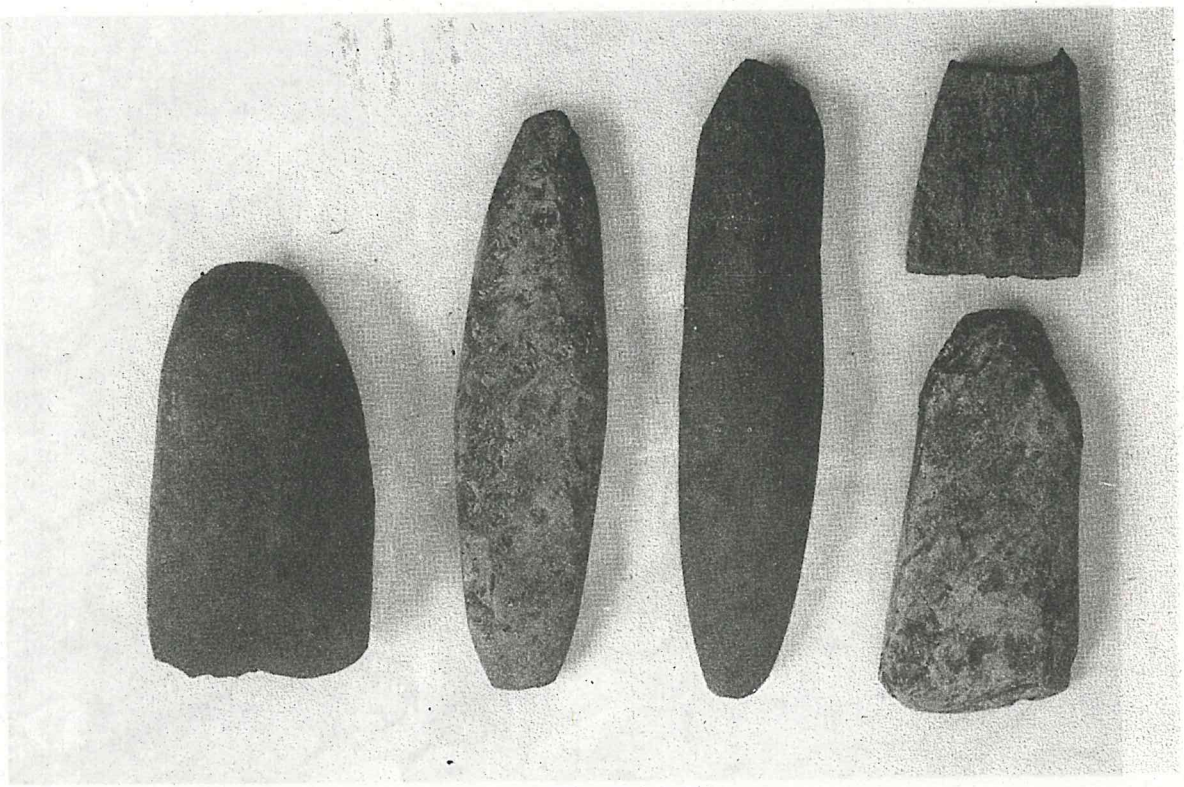


石　錘(各区)

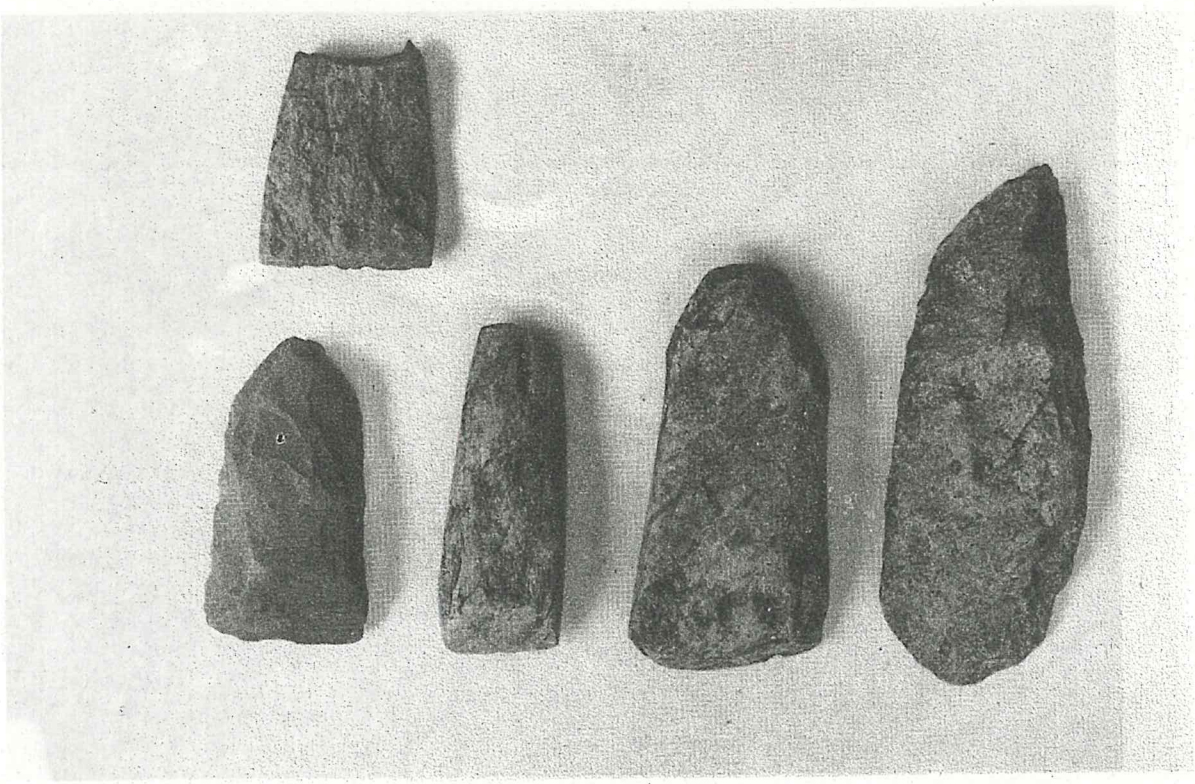


石　錘(各区)

第24図　出土遺物21

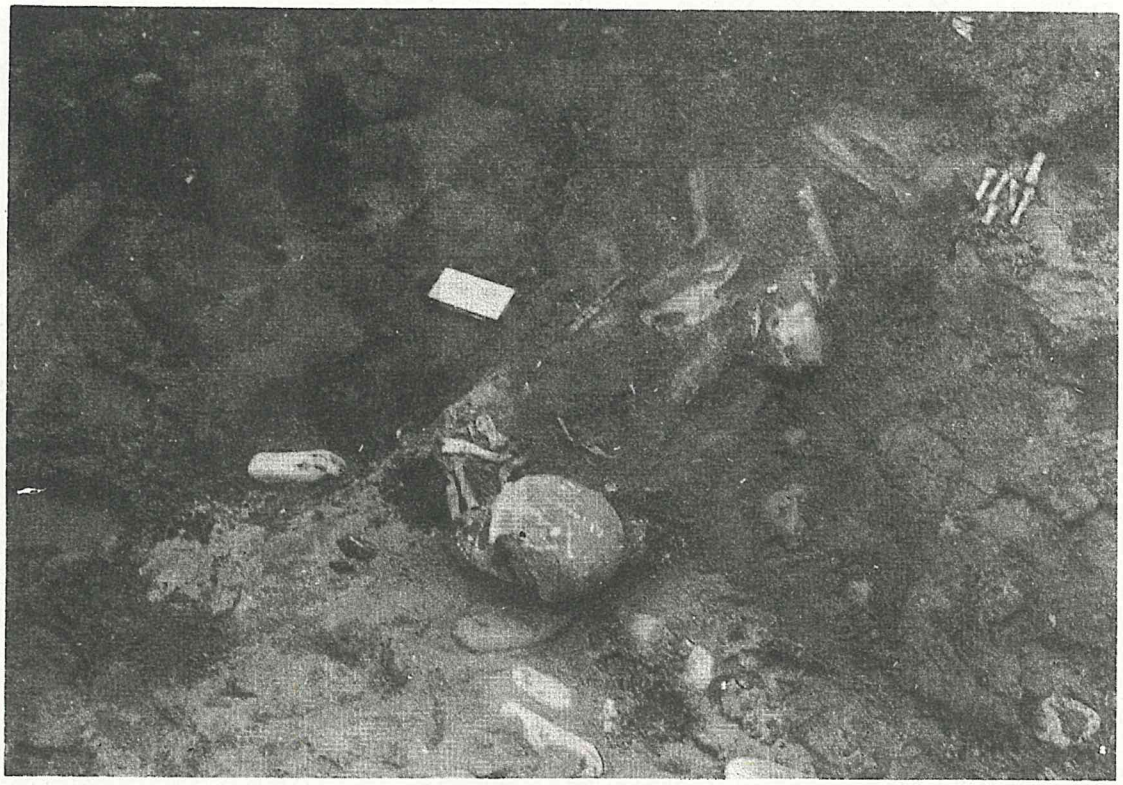


石　斧(各区)



石　斧(各区)

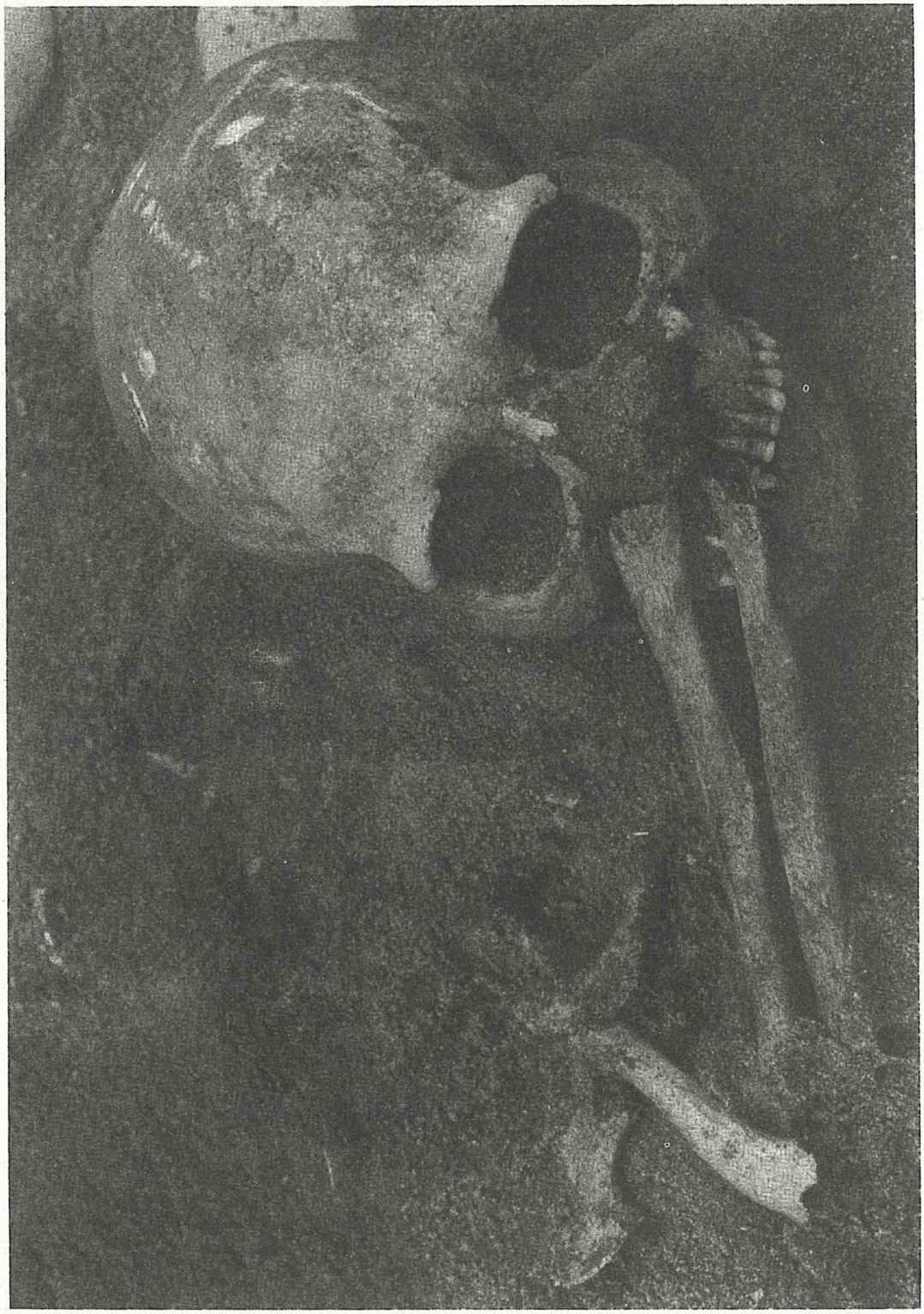
第25図　出土遺物22



1号人骨発見状況1

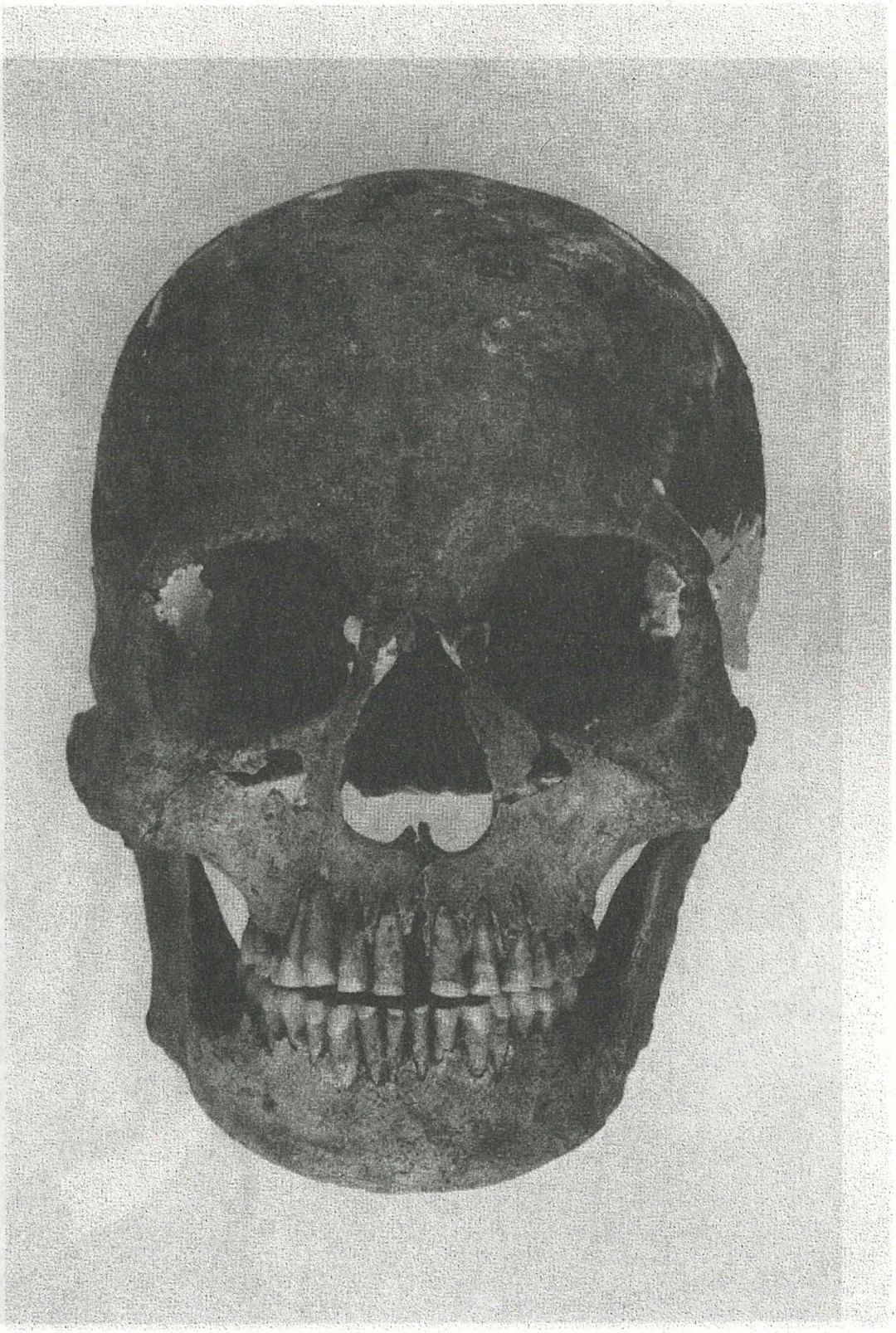
2号人骨発見状況

第26図　沖ノ原出土人骨1



1号人骨発見状況 2

第27図　沖ノ原出土人骨 2



1 号 人 骨

第28図　沖ノ原出土人骨 3

第５章　第４次調査（昭和48年）

付論　沖ノ原遺跡の人骨

長崎大学医学部解剖学　内藤芳篤

1．調査経緯（第１章第１図及び第５章内藤報文第１図）

通詞架橋の取付道路工事に伴なう事前の発掘調査で、昭和48年７月４日から８月８日まで、五和町が主体となって実施した発掘調査である。

調査は、まず道路予定地長さ506.14m 、幅5.75m （車道５m 、歩道0.75m ）にトレンチを設け、11カ所のトレンチを調査し、必要に応じてトレンチを拡張していった。調査対象の南にあたる国道 324号から遺跡の中心に向って約 230m は耕作土（厚さ約20～30cm）の下に暗褐色の土層（厚さ約20～30cm）があり、その下部は洪積層（粘質赤色土）になっている。この範囲内では耕作によってほとんどが攪乱をうけ、包含層は消滅しており、それ以北の範囲に遺物包含層が認められる。なお、11カ所のトレンチのうち、遺構・遺物が検出できたのは、第１．４．５トレンチである。

2．遺構・遺物の検出状況

遺構として検出できたのは、縄文時代後・晩期及び弥生時代前期の埋葬遺構である。人骨に関しては、別掲の「沖ノ原遺跡の人骨」(長崎大学医学部解剖第二教室　内藤芳篤教授）に述べられているので、ここでは遺構の検出状況について述べることにしたい。

第４トレンチ　　層序は第Ⅰ層表土（耕作土10～22cm)、第Ⅱ層黒褐色砂層（厚さ５～30cm)、第Ⅲ層黒色砂層（厚さ８～12cm)、それ以下は第Ⅳ層黄色砂層になっている。このトレンチから人骨16体（２号～10号、 2号～14号、17号～20号）が検出されたが、石棺や甕棺等は認められず、すべて土壙墓であり、土壙は第Ⅲ層からの掘りこみである。なお、土壙墓の周辺に礫を配した例がみられたので、ここでは埋葬施設が明瞭に確認できたもののうち主要なものについて述べたい。

２号ー長径75cm、短径44cm、深さ13cmのほぼ長方形の土壙で、周囲に４個の礫を配している。うち東側の１個は縦に立てており、板付Ⅱ式の壺１個を副葬していた。なお、土壙の南端から約30cmのところで縄文後期の甕型土器が検出された。

５号ー２号の北側約85cmのところ、長軸をほぼ南北にとる土壙で、長径104cm、短径52cm、深さ23cm、西側（頭部）がやや尖った楕円形を呈する。土壙の南側に10数個の偏平な礫を配し、西側や東北隅にも礫を配している。

６号ー５号の東側に接して17号、その一部をカットする状態で６号がある。５号からの距離約90cmである。長径102cm、短径78cm、深さ20cmの不正形を呈する。土壙をかこむような状態で礫がめぐっている。

７号ー６号の南西約 4.8m 、長軸を北西ー南東にとり、長さ141cm、幅74cm、深さ21cmの隅丸

長方形に近い。四周に大小の礫を配しているが、かなりまばらである。

10号ー第4トレンチの北端で検出された土壙である。長軸をほぼ東北にとり、長さ159cm、幅62cm、深さ約23cmの長円形を呈し、第4次調査で検出されたなかでは最大の規模である。

土壙の床面にはほぼ中央から西側にかけて幅約22～17cm、長さ85cm、厚さ11cmの板状石を敷き、土壙の四周にはかなり入念に礫を配している。土壙内の東端近くから頭骨片や下顎骨片が検出された。なお、中央からやや西寄りの所から双角石器1点を検出したが、副葬品かどうかは不明である。

11号ー10号の南東約250cmのところで検出した。長軸を北東ー西南にとり、長さ95cm、幅55cm、深さ約19cmの楕円形を呈する。四周に礫を配するが、人骨は検出していない。

第5トレンチ　このトレンチから10体の人骨が検出されたが、土壙墓の形態については内藤芳篤氏報告（「沖ノ原遺跡の人骨」）のとおりである。とくに注目すべき土壙墓は21号と22号である。

両遺構とも土壙の範囲を明確にすることはできなかったが、22号の南縁を一部切る状態で、21号が埋葬されていた。もともと22号は四周に礫を配していたとみられるが、21号寄りの部分は消失している。また22号の北側の礫群には北久根山式土器の鉢型土器（「沖ノ原遺跡の人骨」第6図7）をふせた状態で副葬し、これに接した状態で別個体の同様の土器片が検出された。

3．出土遺物（第5章内藤報文第6図）

出土遺物には少量の弥生式土器、多量の縄文式土器片及び同時代の骨角器類がある。

弥生式土器のうち3点は埋葬遺構に伴なう副葬品で、他は細片のため省略する。

1は、第3号人骨の頭部に接して副葬された壺形土器である。頸部のほぼ中央より上方が欠損し、現高10.7cm、最大径は胴部のほぼ中央で11.6cm、底部はやや上げ底で径5.0cmである。全体として、他の2点に比べると重心が下方にある感じである。器面は黄褐色を呈し、肩部の上方に1本、その下に2本の篦描き沈線を施している。

縄文式土器は埋葬遺構に伴なうもの4点、その他主要なものについて略述したい。4・5は第27号人骨に副葬された深鉢形土器である。

2は、第14号人骨の頭部に接して副葬された壺形土器である。口縁部から頸部まで欠損しており、現高14.4cm、最大径は胴部のほぼ中央で17.8cm、底部の径 5.8cmである。器面は褐色を呈し軽く篦磨きを施し、肩部から胴部にかけて4本、3本の篦描き沈線、その間に二重の重弧文を描いている。

3は、第18号人骨の頭部横に置かれた副葬品で、完形に復原できる壺形土器である。器高15.0cm、口縁径 8.0cm、外反した頸部の中央で径 5.9cm、胴部の最大径は中央よりやや上位に

あり径13.0cm、底部はやや上げ底で径 5.0cmである。器面は暗褐色を呈し、肩部より上方は軽く箆で磨き、それ以下は丁寧になでて調整している。肩部に２本の箆描き沈線を施している。

４は、波状口縁の頂点につまみあげた突起状の飾りを有する。突起の現存は１個であるが、復原すると４個と考えられる。高さ16.2cm、最大幅は口唇部で18.0cm、緩やかなＳ字の断面で底部に至る。底部は平底で径 8.0cm。なお、器面は褐色を呈し、無文である。

５は、脚台付きの鉢形土器で、高さ19.5cm、口縁は低い山形を呈し、やや肥厚した口縁部に二条の沈線を施している。最大幅は胴部の中央で17.2cm、脚部の下半部には一条の沈線と二重の弧線を描く。

６は、第26号人骨の副葬品の鉢形土器である。口縁部は低い山形を呈し、口縁部と胴の中央部寄りに梯子状の文様を描く。高さ17.0cm、最大幅は胴部中央で18.0cm、底部はやや上げ底で径 8.8cmである。器面は全面に箆で磨研している。なお、山形部に５点の刺突文を施してある。

７は、第22号人骨の副葬品で、埦形を呈する。平縁の口縁の４ヵ所に長さ約４cm、厚さ 1.5cm、中央部が凹んだ飾りを有する。高さ11.5cm、最大幅24.4cm、底部は 9.1cmの平底である。

別に、第13号人骨の横に歯の入った鉢形土器が検出されている。ほぼ完形であるが、口縁部付近は３分の１が残存するのみである。低い山形口縁で、胴部でややくの字に曲がる。高さ10.1cm、口縁径10.4cm、底部径 6.0cm、くの字より上部で胎土をたたきしめたとみられる。

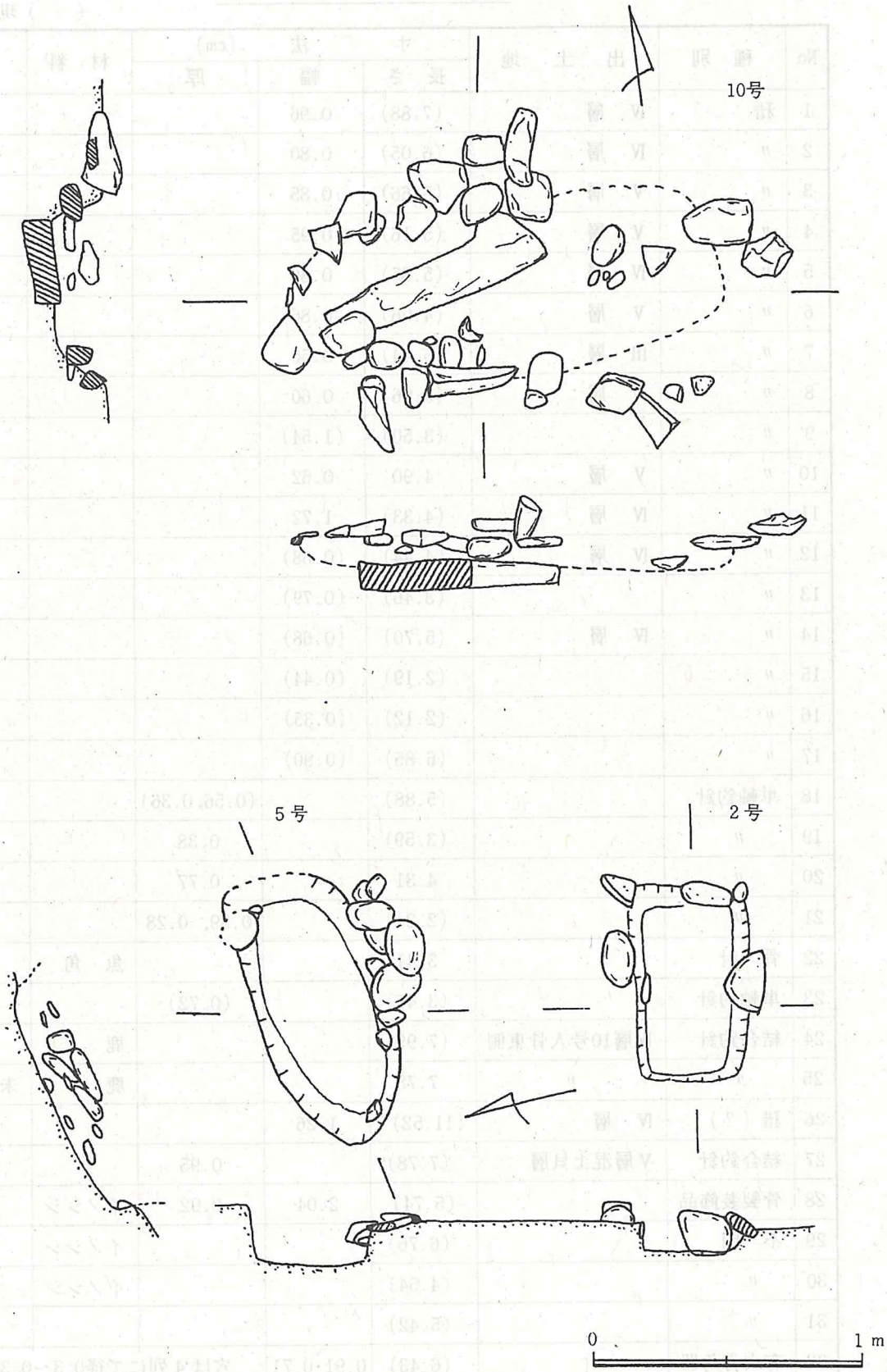
そのほかの縄文式土器は第３、４図に示すとおりである。第１次調査時に検出した曽畑式土器はみかけない。

骨角器類（第５、６図）は全部で34点検出された。名称・数値等は第１表のとおりである。針、釣針、稽装飾品など多種である。針は頭部に穿孔が認められる。釣針には大小あり、大形は結合式、小形は単針で、それぞれ糸との固定を容易にするためのえぐりが入っている。稽は柳葉形で刃部はするどく整形されている。

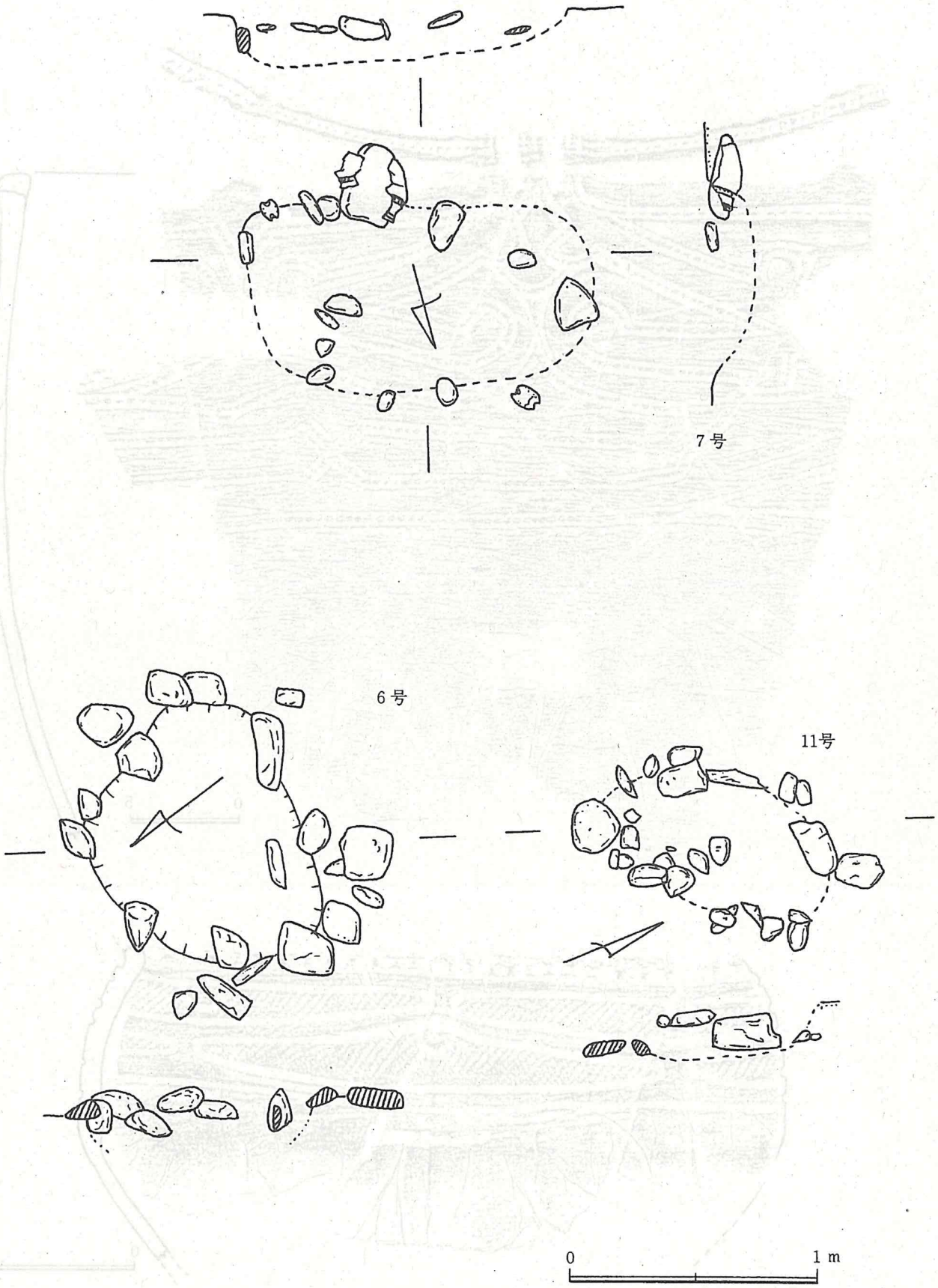
骨角器一覧表

（　　）現在の寸法

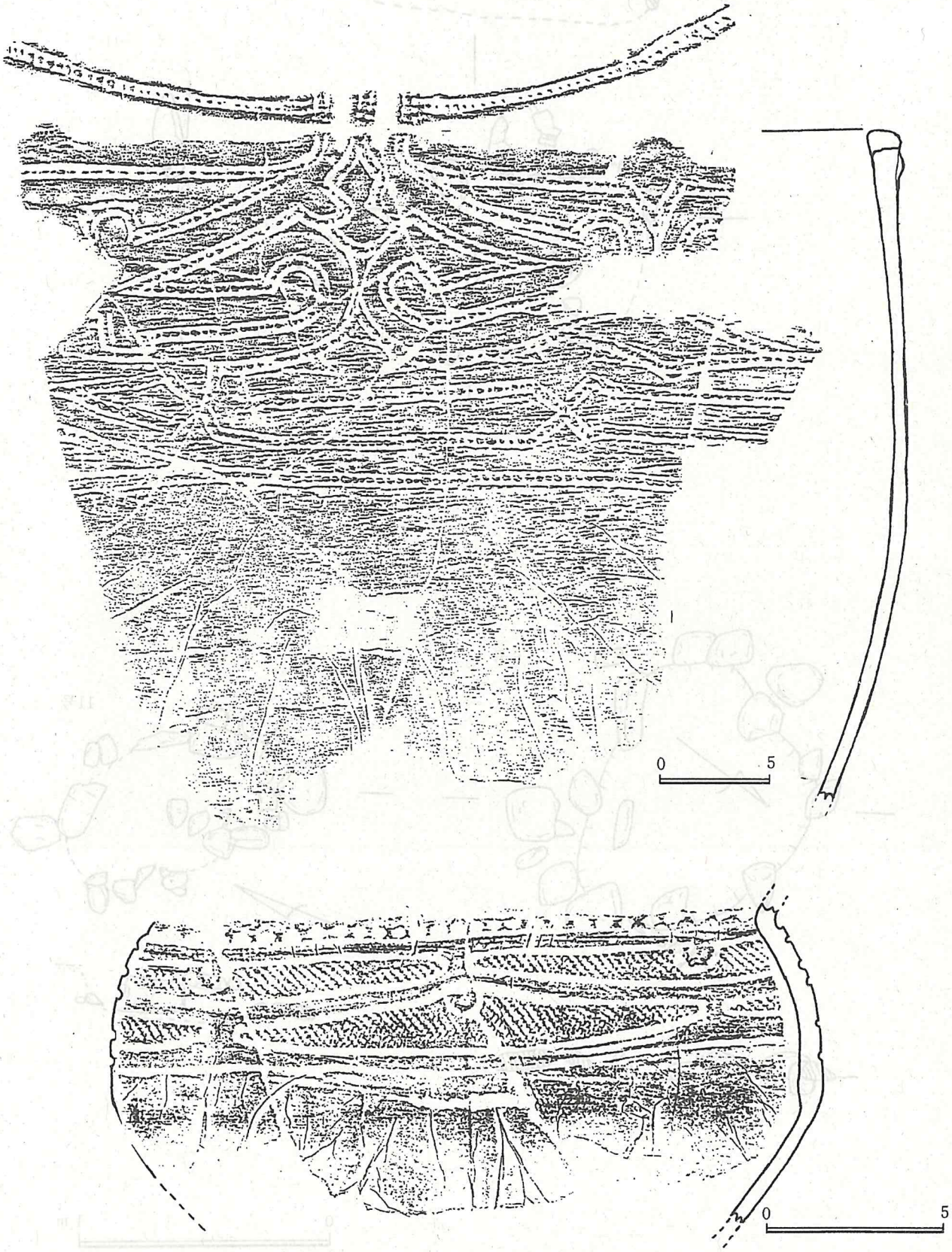
No.	種別	出土地	寸法 (cm) 長さ	幅	厚	材料	備考
1	稍	Ⅳ層	(7.88)	0.96			
2	〃	Ⅳ層	(6.05)	0.80			
3	〃	Ⅴ層	(5.66)	0.85			
4	〃	Ⅴ層	(5.16)	0.95			
5	〃	Ⅳ層	(5.85)	0.86			
6	〃	Ⅴ層	(4.96)	0.86			
7	〃	Ⅲ層	(5.44)	0.50			
8	〃	Ⅳ層	(3.96)	0.60			
9	〃		(3.50)	(1.54)			
10	〃	Ⅴ層	4.90	0.62			
11	〃	Ⅳ層	(4.33)	1.72			
12	〃	Ⅳ層	(4.44)	(0.68)			
13	〃		(3.46)	(0.79)			
14	〃	Ⅳ層	(5.70)	(0.68)			
15	〃		(2.19)	(0.44)			
16	〃		(2.12)	(0.35)			
17	〃		(6.85)	(0.90)			
18	単軸釣針		(5.88)		(0.56, 0.36)		
19	〃		(3.59)		0.38		
20	〃		4.31		0.77		
21	〃		(2.24)		0.39, 0.28		
22	骨針		3.41			魚角	
23	単軸釣針		(3.45)		(0.72)		
24	結合釣針	Ⅳ層10号人骨東側	(7.95)			鹿	
25	〃	〃	7.78			鹿	未製品？
26	稍（？）	Ⅳ層	(11.52)	1.26			
27	結合釣針	Ⅴ層混土貝層	(7.78)		0.95		
28	骨製装飾品		(5.74)	2.04	0.92	イノシシ	
29	不明		(6.76)			イノシシ	
30	〃		(4.54)			イノシシ	
31	〃		(5.42)				
32	有穴骨角器		(6.43)	0.91・0.71	穴は4列にて径0.3～0.35		
33	単軸釣針		(1.13)		1.12		
34	〃		(2.02)				



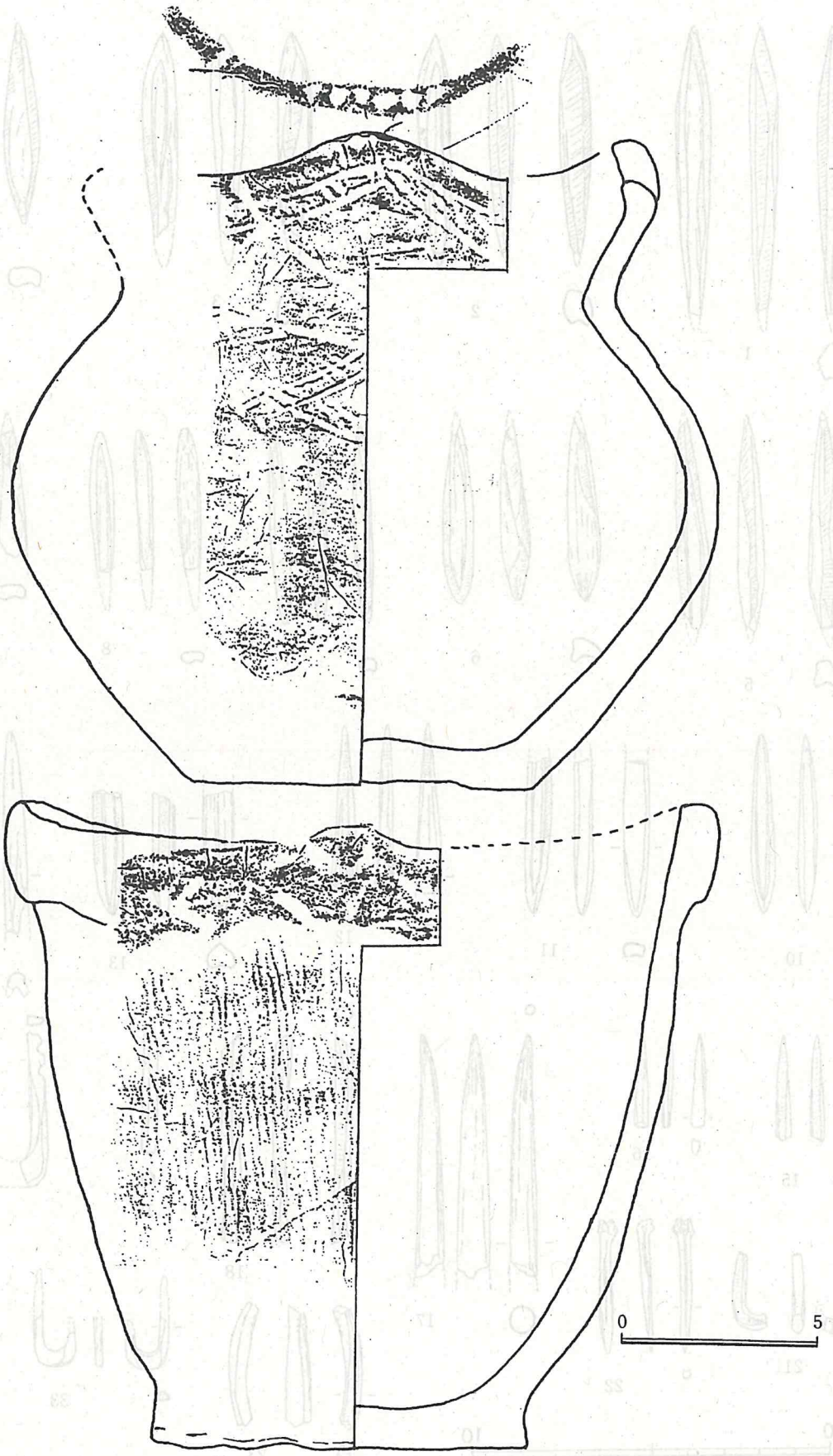
第１図　遺構実測図(1)



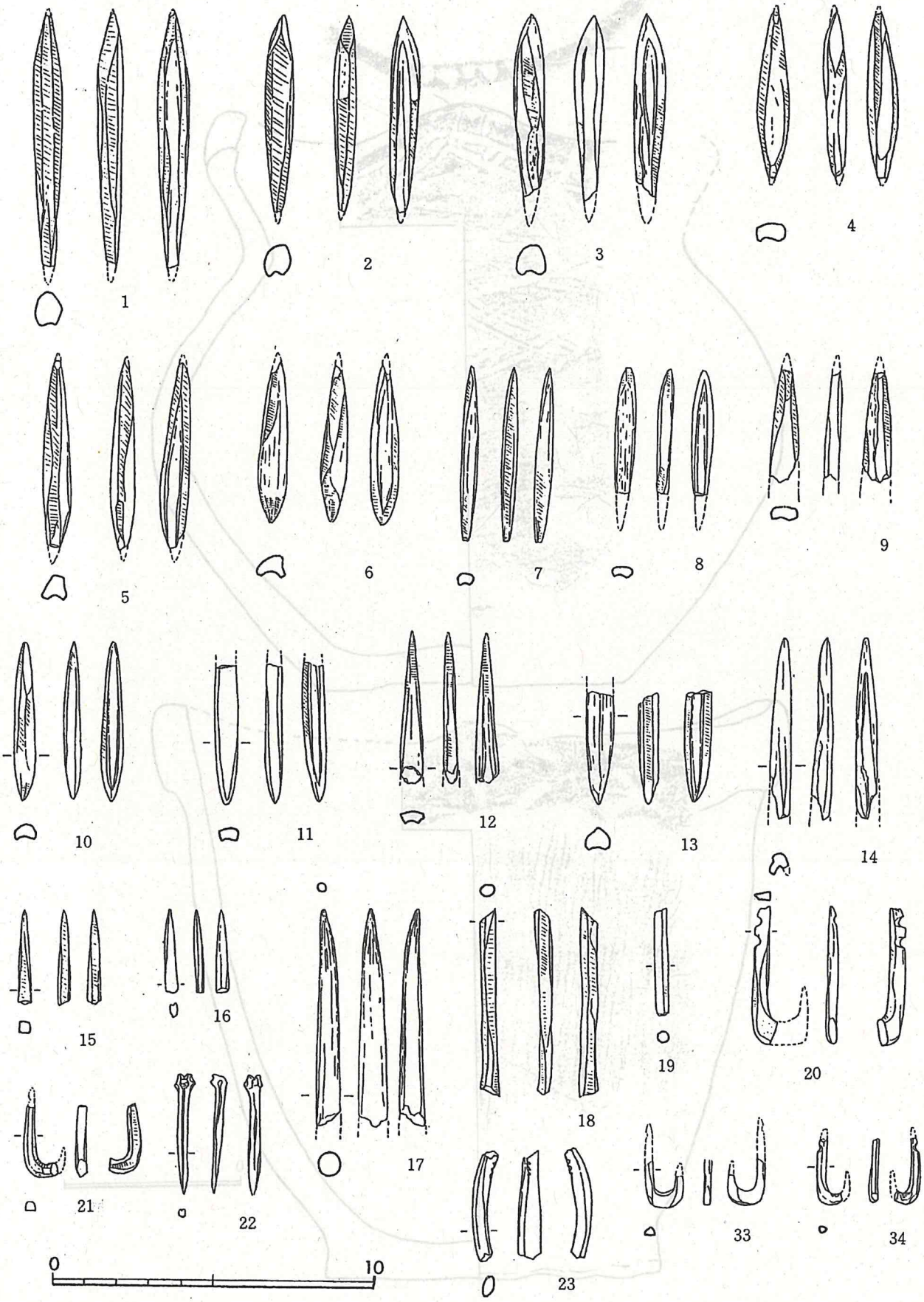
第2図　遺構実測図(2)



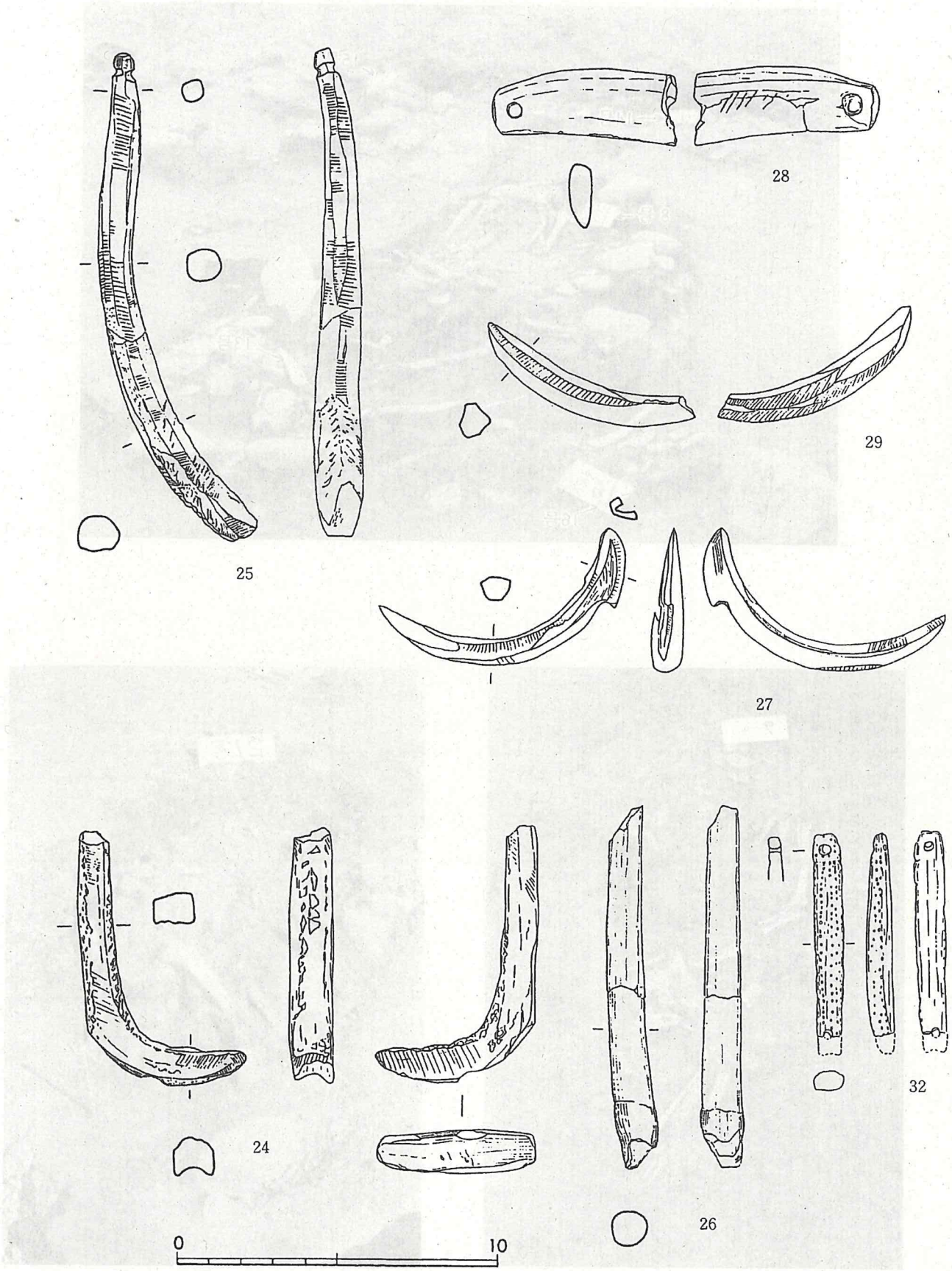
第3図　土器実測図(1)



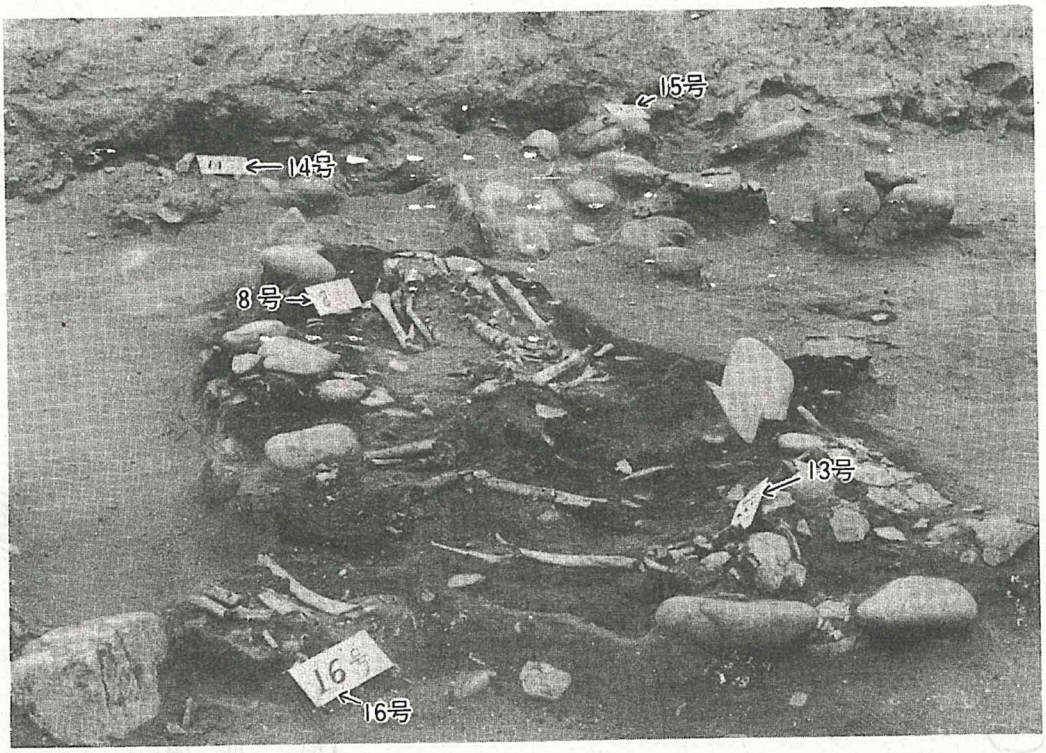
第 4 図　土器実測図 (2)

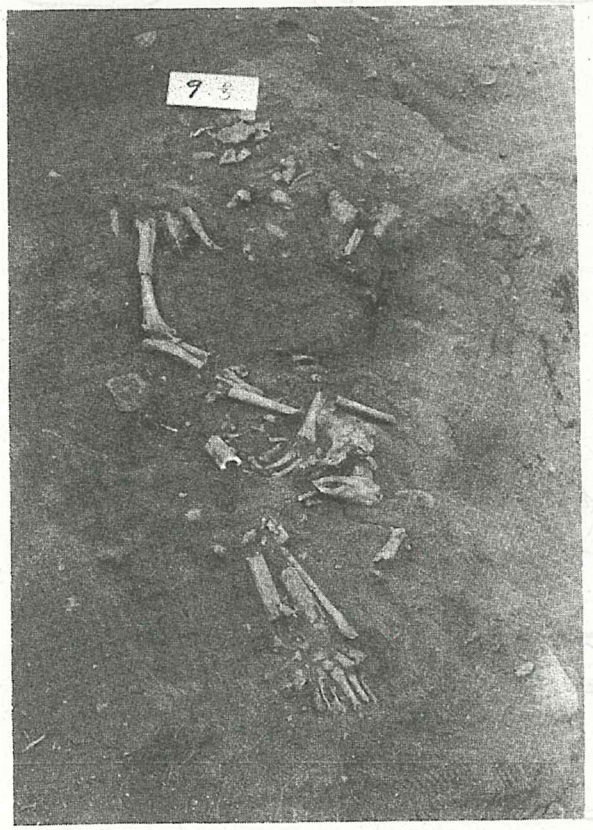


第5図　骨角器　(1)



第6図　骨角器 (2)

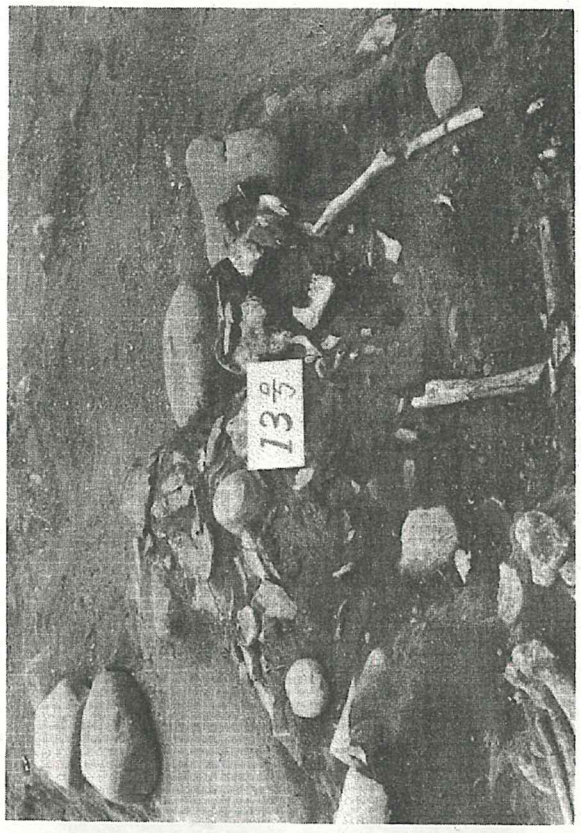




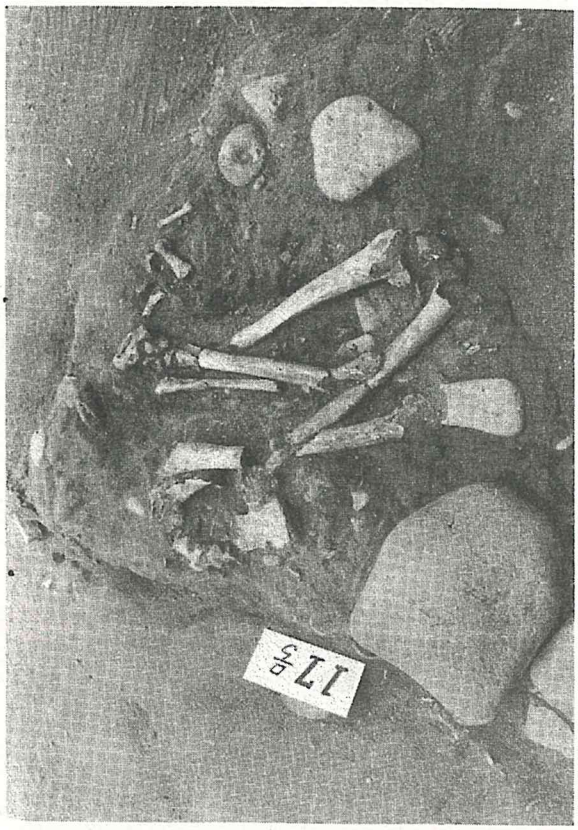
9号

21号

第1図版　遺構出土状況 (1)

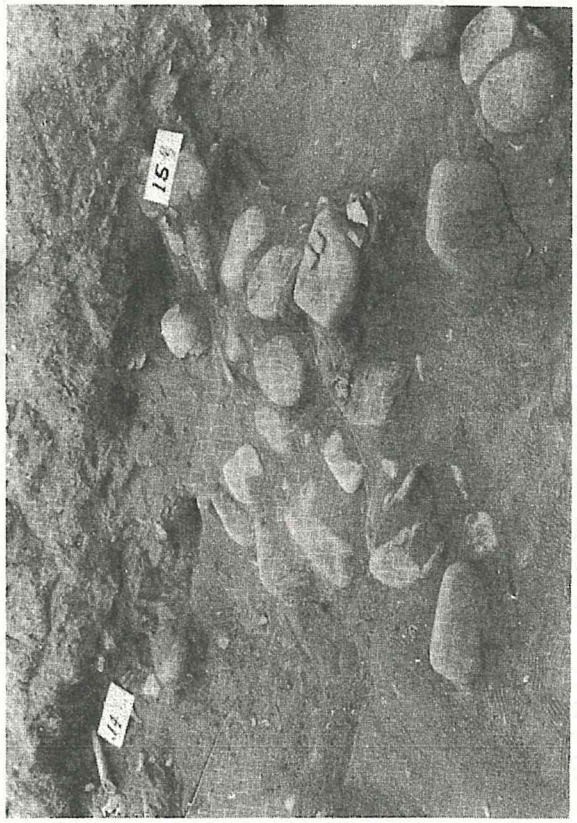


13号



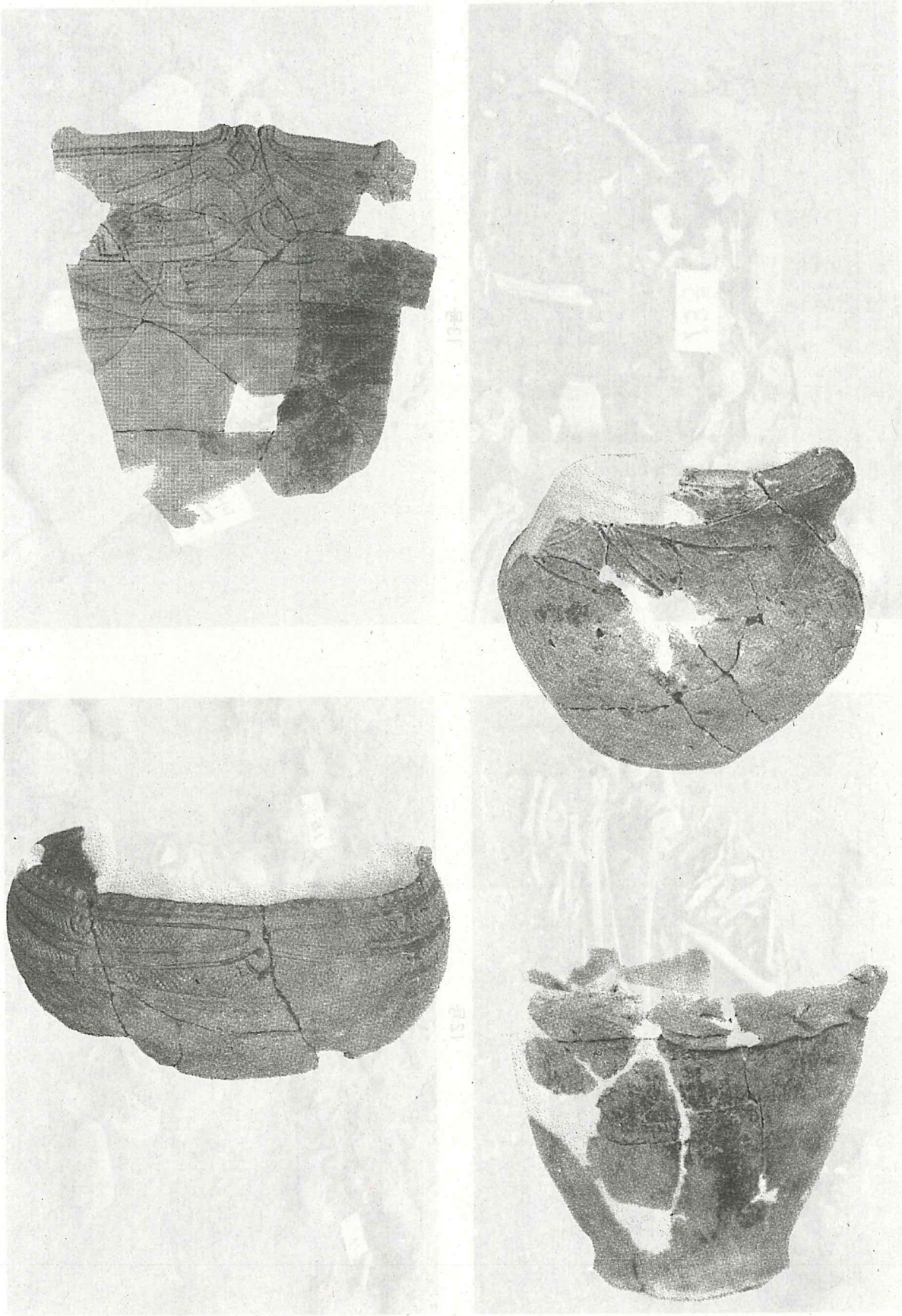
17号

12号



15号

第2図版　遺構出土状況 (2)



第 3 図版　遺物写真（縮尺不同）

沖ノ原遺跡の人骨

1 まえがき

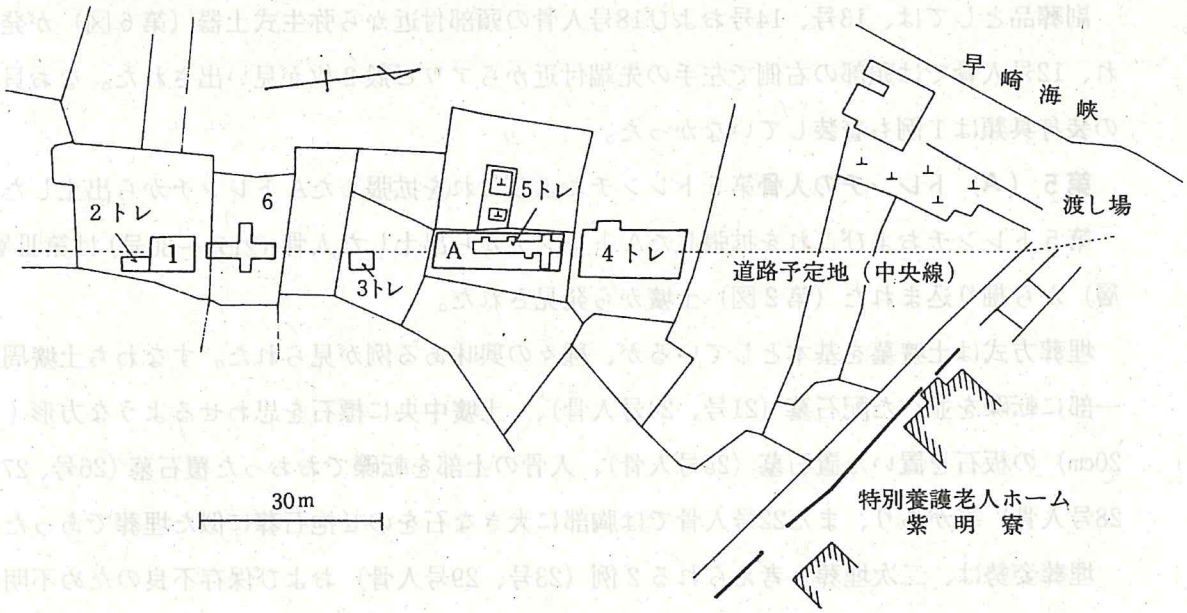
沖ノ原遺跡は、すでに過去3次（1959、'64、'69）にわたって発掘調査されているが、さらに今年7月より8月にかけて五和町教育委員会主催で第4次調査が実施された。調査中に、たまたま人骨が発見されたため熊本県教育委員会文化課を通じて長崎大学医学部解剖学教室に人骨発掘の依頼があった。本調査は8月2日をもって一応終了したが、最後に発掘された第5トレンチに接する地区（Aトレンチと仮称）にはなお人骨の出土が予測されたため、五和町教育委員会の協力を得て、当教室担当で引きつづき8日まで調査を継続した（第1図）。

出土した人骨は27体に及んだが、一般に保存状態は必ずしも良好ではない。しかしながら、あえて継続調査したのは同一遺跡から縄文式、弥生式両時代2群の人骨が出土したためであり、人類学的研究にはきわめて貴重な資料と信じたからである。

資料は現在当教室において精査中であるが、骨の接合復原には多少の日時を要するので、その群報は後日に譲り、ここでは人骨の年代を明らかにすると共に形質の概要を小報にまとめ、人類学担当者としての責を果たしたい。

人類学調査参加者

内藤芳篤（長崎大学医学部教授）、坂田邦洋（同　助手）、長崎　洋（同　助手）、加藤哲夫（同　助手）、吉村　淳（同　技官）、本田圭吾（同　技官）、稲福薫（長崎大学医学部学生）、井口俊二（同）、川富正弘（同）、西村修平（同）、森 宣（同）、山口一郎（同）、松尾辰樹（同）



第1図　第4次調査におけるトレンチの位置

紫明寮付近は第1次および第3次調査地点．第2次調査は第2トレンチの西方で行なわれた．

和田利徳（別府大学文学部学生）、松井孝之（同）、大城　慧（同）、中島哲郎（同）、町田利幸（同）、

2　人骨の出土状況

今次調査において合計27体の人骨が出土したが、これをトレンチ別に見ると、第１トレンチより１体、第４トレンチより16体、第５トレンチおよびこれを拡張したＡトレンチより10体である。以下これら人骨の出土状況について簡単に述べる（第１表）。

第１トレンチの人骨

御領式の深鉢形土器を利用した甕棺の近くから頭蓋の一部（１号人骨）が発見された。骨の周囲にはなんらの施設も見い出し得なかったが、頭蓋骨のみを埋葬したのか、あるいは四肢、軀幹骨などはすでに腐蝕してしまったのか判別できない。

第４トレンチ（第３図、第５図）

第４トレンチから出土した人骨16体（２号～10号、12号～14号、17号～20号）が埋葬されていた土壙は、第Ⅱ層からの掘り込み（第２図）であった。

埋葬方法はすべて土壙墓で、石棺や甕棺は使用していないが、土壙の周囲に転礫を並べた配石墓の例が見られた。転礫は人頭大で、６号、10号人骨の場合は土壙の全周に、その他の例では土壙周縁の一部に並べられていた。

埋葬姿勢は12号人骨のみは右側臥屈葬であったが、その他の人骨では確認できるものはいずれも仰臥屈葬であった。

また頭位については多くが東頭位あるいはこれに近い方位をとったほか、西頭位あるいはこれに近い方位のものもあった。

副葬品としては、13号、14号および18号人骨の頭部付近から弥生式土器（第６図）が発見され、12号人骨では頭部の右側で左手の先端付近からアワビ殻２枚が見い出された。なお貝釧等の装身具類は１例も着装していなかった。

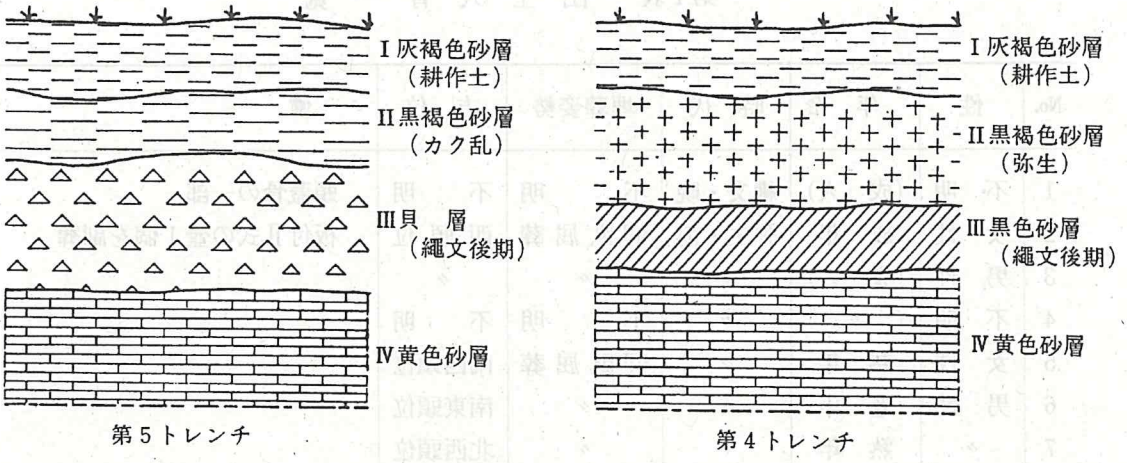
第５（Ａ）トレンチの人骨第５トレンチおよびこれを拡張したＡトレンチから出土した人骨

第５トレンチおよびこれを拡張したＡトレンチから出土した人骨（21号～30号）は第Ⅲ層（貝層）から掘り込まれた（第２図）土壙から発見された。

埋葬方式は土壙墓を基本としているが、種々の興味ある例が見られた。すなわち土壙周縁の一部に転礫を並べた配石墓（21号、24号人骨）、土壙中央に標石を思わせるような方形（30×20cm）の板石を置いた置石墓（25号人骨）、人骨の上部を転礫でおおった覆石墓（26号、27号、28号人骨）等があり、また22号人骨では胸部に大きな石をのせ抱石葬に似た埋葬であった。

埋葬姿勢は、二次埋葬と考えられる２例（23号、29号人骨）および保存不良のため不明であった１例（28号人骨）を除く他の７例はいずれも仰臥屈葬であった。また頭位については全例を通じて東頭位あるいはこれに近い方位をとっていた。

副葬品は、22号人骨の下肢付近に浅鉢が見られ、26号人骨では覆石の上に深鉢があり、また27号人骨では覆石の上および上肢付近にそれぞれ深鉢が発見された。これらの副葬された土器は、第Ⅲ層（貝層）から出土したものと同一型式のものであり、いずれも北久根山式土器（第6図）であった。



第3図 地　層　図 1/20

3　人骨の編年

このたび出土した27体の人骨は、第1トレンチ、第4トレンチおよび第5（A）トレンチの3地点から発掘されているが、ここではこれら3群の人骨についてその年代を明らかにしてみたい（第6図）。

第1トレンチの人骨

第1トレンチからは1体（1号人骨）のみが発見されているが、人骨は縄文式時代晩期の包含層の中から現われ、しかも人骨の近くから御領式の深鉢形の甕棺2個が見いだされており、第1トレンチ付近は縄文式時代晩期に営まれた墓地と考えられる。

したがって1号人骨は同時期のものと考えてさしつかえあるまい。

第4トレンチの人骨

第4トレンチからは16体（2号～10号、12号～14号、17号～20号人骨）の人骨が出土しているが、これらのうち10号人骨のみはトレンチの北側で、やや離れた地点に埋葬されていたが、他の15体はトレンチ中央より南側から一群をなして出土し、中には重なり合っていた例も見られ、また埋葬方式もすでに述べられているように類似したものであった。幸い3号、14号および18号人骨の頭部付近から副葬土器が見いだされたので、これらの土器について述べることにする。

No.1　3号人骨の頭部付近に立っていたが、口縁部は埋葬時にすでに打ちかかれていたようである。土器の高さ（現存）は12.0cm、胴部の直径は13.4cmであった。黒褐色を呈し、胎土に

砂粒を多く含んでいる。胴部は細くて浅い3本の平行沈線をめぐらしている。

この土器は板付1式土器の特徴をとどめてはいるが、板付Ⅱa式相当の土器とするのが妥当

第1表　出土人骨一覧

No.	性	年令	時代	埋葬姿勢	方位	備考
1	不明	(成人)	縄文・晩	不明	不明	頭蓋骨の一部
2	女性	成年	弥生・前	仰臥屈葬	西頭位	板付Ⅱ式の壺1個を副葬
3	男性	(成人)	〃	〃	〃	
4	不明	(〃)	〃	不明	不明	
5	女性	熟年	〃	仰臥屈葬	南西頭位	
6	男性	老年	〃	〃	南東頭位	
7	〃	熟年	〃	〃	北西頭位	
8	〃	壮年	〃	〃	西頭位	第2腰椎に石鏃篏入
9	男性	(成人)	弥生・前	仰臥屈葬	南西頭位	
10	不明	不明	〃	不明	不明	
1						人骨なし　墓地？
12	女性	壮年	〃	右側臥屈葬	北頭位	アワビ2枚
13	〃	熟年	〃	仰臥屈葬	東頭位	
14	男性	〃	〃	〃	西頭位	板付Ⅱ式の壺1個を副葬
15						取り消し
16						20号人骨と同一個体
17	男性	(成人)	〃	仰臥屈葬	東頭位	
18	〃	(〃)	〃	〃	南東頭位	板付Ⅱ式の壺1個を副葬
19	女性	熟年	〃	〃	東頭位	
20	〃	〃	〃	〃	北頭位	
21	〃	壮年	縄文・後	〃	北東頭位	
22	〃	熟年	〃	〃	〃	北久根山式の浅鉢1個を副葬、抜歯
23	男性	(成人)	〃	不明	不明	二次埋葬、抜歯
24	不明	(〃)	〃	仰臥屈葬	北東頭位	
25	男性	壮年	〃	〃	東頭位	抜歯
26	〃	熟年	〃	〃	〃	北久根山式の深鉢1個を副葬、外耳道骨腫
27	女性	〃	〃	〃	南東頭位	北久根山式の深鉢2個を副葬
28	不明	小児	〃	不明	不明	7才位
29	女性	(成人)	〃	〃	〃	二次埋葬
30	〃	熟年	〃	仰臥屈葬	南東頭位	

であろう。

No.2　14号人骨の頭部左側に口縁部は頭蓋側に向け、やや傾いて立っていた。口縁部は埋葬時すでに打ちかかれていたものであろう。胴部は強く張り出し、底部には板付１式の伝統がなお残っているように思われる。胴部は貝描重弧文を重ねていて、その上と下に３本の平行沈線をめぐらしている。土器の高さ（現存）は13.5cm、胴部の直径は16.6cmであった。黒褐色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。この土器は板付Ⅱａ式からⅡｂ式ごろのものと考えられる。

No.3　18号人骨の頭部付近に口縁部を頭蓋側に向けて倒れていた。土器の高さは15.5cm、口縁部の直径は8.2cm、胴部の直径は11.8cmであった。茶褐色を呈しているが、風化のため器表面がややもろくなっている。胴部には２本の平行沈線文をめぐらしている。

この土器は板付Ⅰ式の特徴をとどめてはいるが、おそらく板付Ⅱａ式相当のものと思われる。

以上述べたように、副葬されていた土器は板付Ⅱａ式からⅡｂ式ごろのものであり、したがって第４トレンチ出土の人骨群は弥生式時代前期中ごろから前期後半ごろのものと推定される。

第５（Ａ）トレンチの人骨

第５（Ａ）トレンチから出土した10体（21号～30号人骨）の人骨は、トレンチ西側からまとまって現われたが、その土壙はいずれも第Ⅲ層（貝層）からの掘り込みであった。この貝層からは縄文式時代後期の北久根山式とその共伴遺物が出土したが、ここでも22号、26号および27号人骨に土器が副葬されて発見された。以下これらの副葬土器について述べる。

No.7　22号人骨の下肢付近にふせて置かれていた。口縁部は４ケ所だけが小さく突き出て、その部分にヘラ先による短かい平行線がつけられている。土器の高さは10.5cm、口縁部の直径は26.0cmであった。この土器は、器形および文様が一見南福寺式土器に似ているが、ヘラ先で軽くはねるような施文方法は北久根山式土器の深鉢の口縁につけられているヘラ先沈線文と同じ手法であり、本資料は北久根山式土器に共伴する浅鉢の１例と思われる。

No.6　26号人骨は人頭大の転礫でおおわれていたが、この土器は覆石のほぼ中央に立てて置かれていた。口縁部は２本の沈線文を波状口縁にそって走らせ、沈線の間に疑似縄文をめぐらしている。胴部も同じく２本の沈線を単位として波頂部の下に文様が描かれていた。また沈線の起始あるいは停止のいずれかに刺突がついていた。器高15cm、口径18cm、この土器は以上述べたように北久根山式土器の施文の特徴をよく現わした資料である。

No.4・5　27号人骨は大形の転礫でおおわれ、No.4は覆石の上に立てて置かれ、No.5は下肢付近に底部側を近づけ、口縁部は人骨体軸とほぼ直角に東方を向いて倒れていた。

No.4は波状の口縁で、西平的な形態を示している。土器の高さは18.5cm、口縁部の直径は16.0cmであった。黒褐色を呈し、器表面には大きなヘラ痕がついていた。

この土器は西平式土器の特徴をもった北久根山式土器共伴の深鉢形土器の１例と考えられる。

No.5はほぼ完全に近い深鉢で、波頂部のみが見いだせなかったが、おそらく逆W字の粘土を

はりつけていたものと思われる。底部は台付で、重弧文が描かれている。土器の高さ（推定）は29.0cm、口縁部の直径は24.0cmであった。

この土器は勿論北久根山式土器に属するものである。

以上述べたように副葬土器は第Ⅱ層（貝層）出土のそれと同じように北久根山式土器であり、したがって第5（A）トレンチから得られた人骨群は縄文式時代後期に編年できるものである。

なお弥生式土器に関する所見は小田富士雄別府大学文学部助教授のご教示によるものである（坂田邦洋）。

4　沖ノ原人骨について

弥生式時代人骨は、九州の本土、あるいは山口県下の遺跡などからかなり多数の資料が発掘され、全国の出土資料の大部分が当地方から得られたものであるが、その特徴が漸次明らかにされるにつれて当時すでに北九州、南九州あるいは西九州弥生人の間にそれぞれ形質差が存在していたこともある。程度知られるようになってきた。ところが縄文式時代人骨は、全国では多くの資料が出土しているにもかかわらず、九州地方からの出土例はきわめて少ない現状である。九州弥生人の形質、あるいは地域差の由来を知るためには、まず当地方における縄文人のそれを明らかにせねばならない。著者らが縄文式時代人骨の収集を急いでいるゆえんでもある。

ところで、沖ノ原遺跡からは、すでに第1次、第3次の調査で計7体の縄文人骨が発掘され、その一部は北条、緒方両氏（1970）によって学会報告がなされている。このたびの調査によって27体（縄文人骨11体、弥生人骨16体）の人骨が見いだされた。骨の保存状態は必ずしも良好ではなく、骨格の一部を残しているにすぎない例もあり、とくに弥生人骨群の頭蓋骨破損が著しいが、同一遺跡から縄文、弥生両時代人骨のある数が得られたことは、両者を比較する上に地域差を否定できるものとして貴重な一資料と考えられる。

資　料

縄文式時代人骨11体のうち、後期10体、晩期1体で、後期人骨の中には小児骨1体が含まれている。弥生式時代人骨は前期に属するもので16体、合計27体であるが、その詳細は第2表に示すとおりである。

第2表　人　骨　資　料

時　代（時　期）	成人			幼・小児	計
	男　性	女　性	不　明		
縄文時代（後期）	3	5	1	1	10
縄文時代（晩期）			1		1
弥生時代（前期）	8	6	2		16
計	11	11	4	1	27

なお、この他に埋葬施設以外の７ケ所から骨格の一部が見いだされた。後世の耕作等による破砕と思われ、これらの骨片は大部分は27体の一部分であろうが、その中に幼小児骨の一部や乳歯なども含まれており、明らかに別個体と考えられる例もあった。

骨格の形質（第７図、第８図）

頭蓋骨　縄文人では、骨壁が厚く頑丈で、主縫合は単純である。脳頭蓋の諸径は一般に大きく、大頭で、とくに頭幅が広いために短頭の傾向が現われている。頭型としては中頭ないし短頭型に属するものであろう。

顔面頭蓋では脳蓋では脳頭蓋に比してやや小さい感じであるが、とくに高径が低く、その割りには頬骨弓が左右に張り、上顎骨の発達が良好で、幅径は比較的大きい。したがって顔型としては低・広顔の傾向が強い。

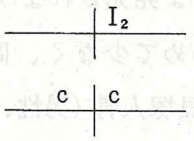
弥生人については、脳頭蓋では縄文人とよく近似し、頭幅がかなり広く、短頭の傾向が認められる。

顔面頭蓋についてはとくに両時代群の比較に主要な部分であるが、弥生人骨では破損がひどく、良い資料がない。ただ残存している部分を観察した限りでは、低・広顔性が強く、縄文人と著しい差異は見られないようである。

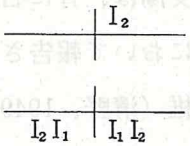
なお、縄文人骨の１例（男性、熟年）に両側性の外耳道骨腫が見いだされた。

歯　牙　縄文人の咬合型はすべて鉗子状咬合で、一般に推定年令に比して磨耗の度がひどい。また下顎骨両側の内、側切歯および第１小臼歯より第２大臼歯にかけて舌側より頬、唇側に向って強く磨り減った例も見られた。

また後期人骨10体中に４例の風習的抜歯の痕跡が認められたが、その型式は次のとおりである。



（女性，壮年）



（男性，壮年）

（女性，熟年）

（男性、成人）

弥生人では観察可能なものの大部分は鉗子状咬合であったが、２例においては鋏状咬合を示していた。磨耗の程度はひどく、縄文人に見られたような過耗部分をもつ例もあったが、残存していた資料中には抜歯例は見いだし得なかった。

上肢骨　縄文人の上腕骨は著しく太くて頑丈で、扁平性に富み、三角筋粗面は強く膨隆し、橈骨神経溝は深い。とくに骨頭および遠位骨端幅が大きい。著しく太い割りには短かく、長厚示数はきわめて大きい値を示している。尺骨についても太くて、扁平で骨間縁が鋭く張り出している。また上腕骨の遠位骨端に相応して尺骨の肘頭、鈎状突起も大きく、尺骨粗面の発達も良好である。

弥生人の上腕骨、尺骨などは男性に関しては縄文人のそれとよく近似し、著しく太くて頑丈で、短かい。ところが女性では、縄文人の場合、男性と並行して比較的太いのに反し、弥生人の場合は細くて丸く、長厚示数においても現代人のそれより小さい値を示している。

下肢骨　縄文人の大腿骨は中位の太さで、彎曲が強く、骨体上部の扁平性が見られ、後面には骨稜が隆起した柱状大腿骨である。脛骨も扁平性が著しく強く、後面に一稜を形成している例が多い。腓骨も比較的大きい。弥生人の下肢骨においても大腿骨の彎曲、扁平性、柱状形成あるいは脛骨の扁平性などを認め得るが、縄文人に比して一般にその程度弱いようである。また上肢骨に見られたような著しい男女差は認め得なかった。

推定身長値

大腿骨を用いてPearsonの式より身長値を算出したが、弥生人男性の例で159.5cm、女性例ではそれぞれ152.6cm、148.7cm、145.8cmなどであった。縄文人では完全な大腿骨がないため、他の四肢骨を用いて両時代人の身長値をそれぞれ算出してみたが、両時代人の間に明らかな差は見られなかった。

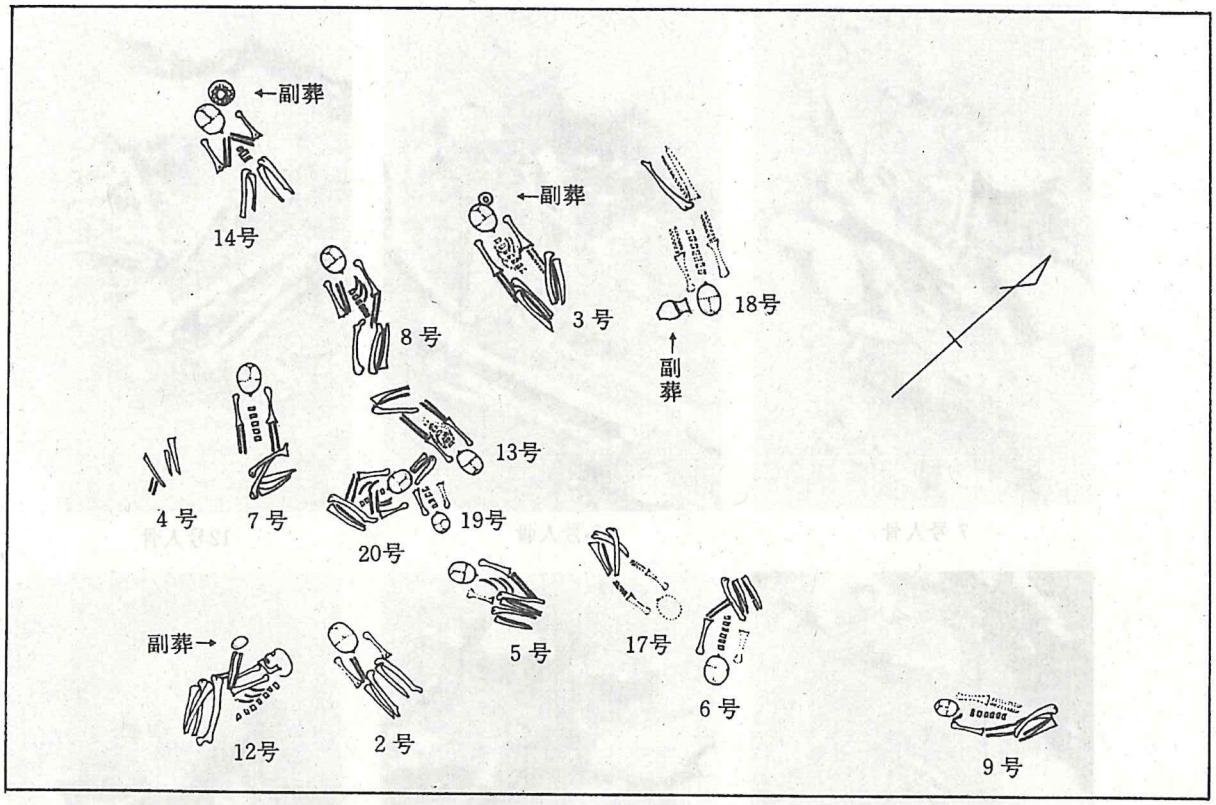
石鏃嵌入した弥生人腰椎（第9図）

弥生人の1例（8号人骨、男性、壮年）に第2腰椎の椎体右側面でやや上面に近く、石鏃1個が嵌入したままの状態で発見された。石鏃は水平に基部まで射入されている。

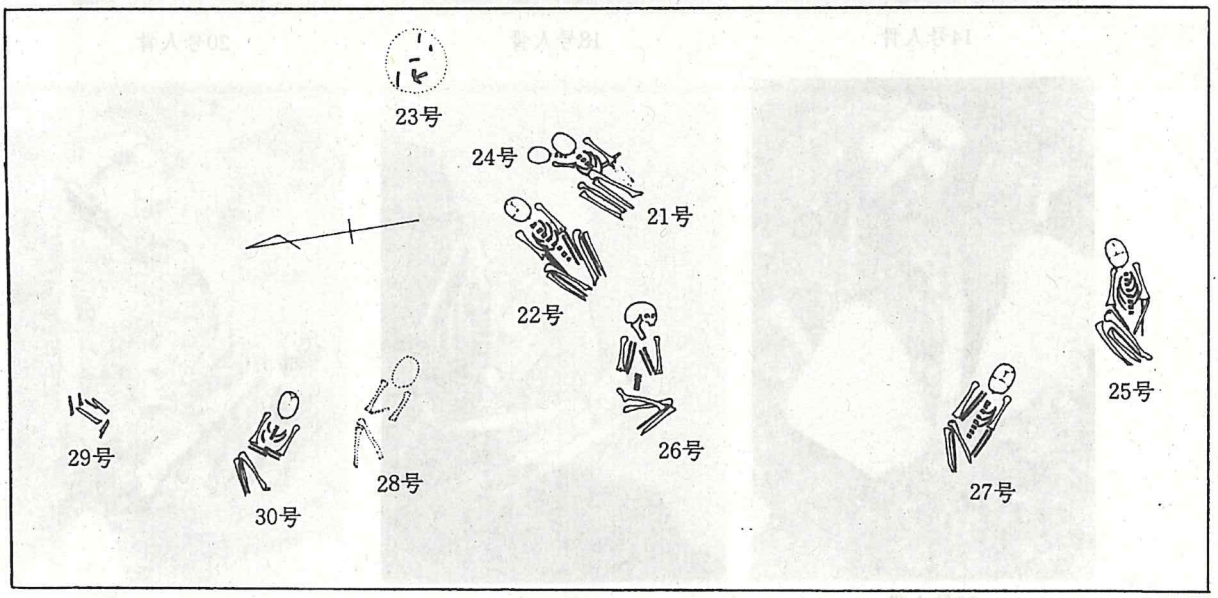
骨の創傷部には治癒桟転が全く見られず、嵌入している石鏃基部の中央あたりに骨のごく小さい破損が見られるのは矢柄の先端による受傷であろう。

本例の場合、死後に射込まれたとは考えがたいので、直接の死因が何であるかは別として、矢による受傷の直後に死亡したものであろう。当然軟部組織を貫通して、しかも椎体に矢がこれだけ完全に突き刺さっているので、弓矢の力は想像以上に強いものであったと考えられる。

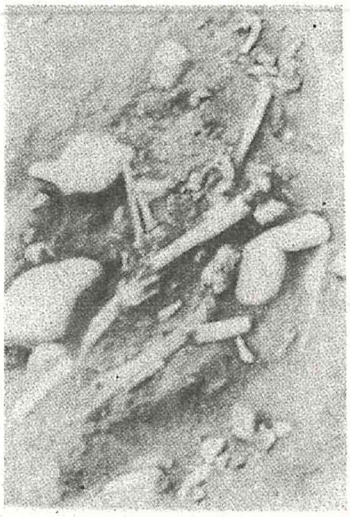
一般に弓矢による骨の受傷は、骨に石鏃が嵌入されたまま発見されなければその証明にはならないので、従来わが国において報告されている例もきわめて少なく、岡山県粒江貝塚人骨（男性、老年）の第3胸椎（清野、1949）、愛知県伊川津貝塚人骨（男性、成年）の右尺骨（鈴木、1938）および福島県三貫地貝塚人骨（男性、熟年）の右寛骨（鈴木、1958）等を見るに過ぎない。本例は弓矢による骨損傷のまれな1例を追加できたものである。



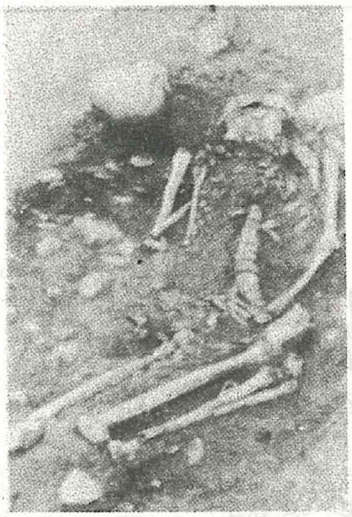
第3図　第4トレンチにおける弥生人骨の出土状況 1/60



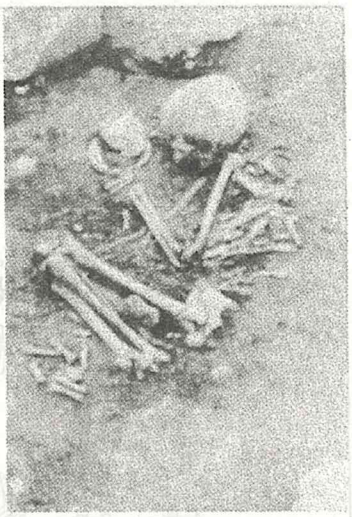
第4図　第5トレンチにおける縄文人骨の出土状況 1/70



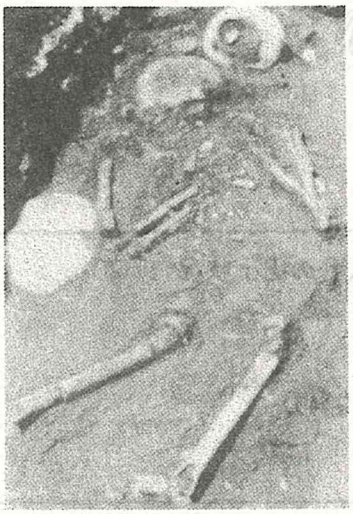
7号人骨



8号人骨



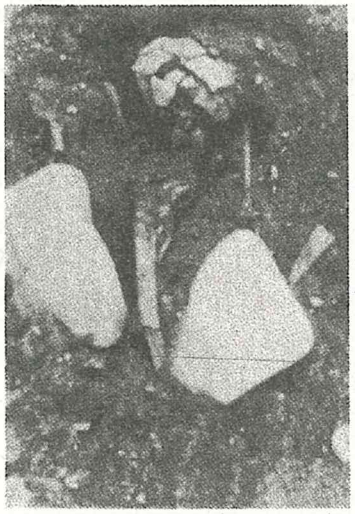
12号人骨



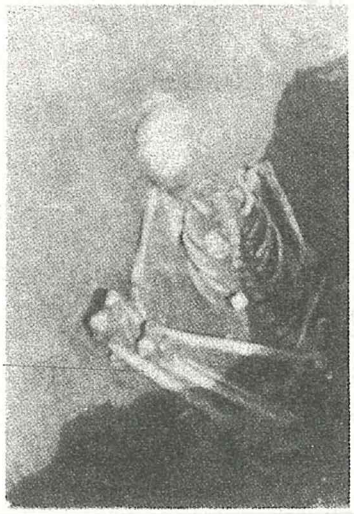
14号人骨

18号人骨

20号人骨



22号人骨

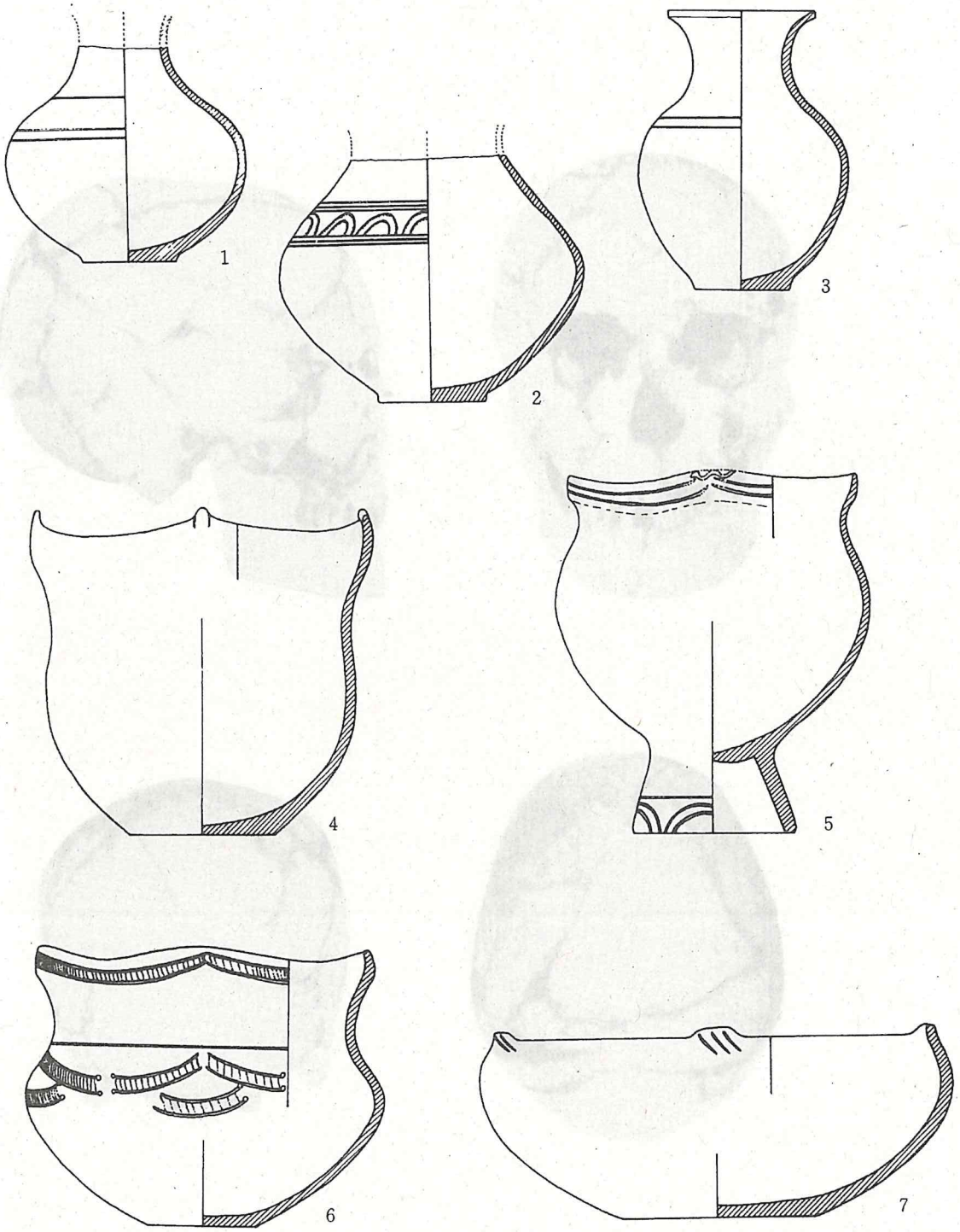


25号人骨

27号人骨

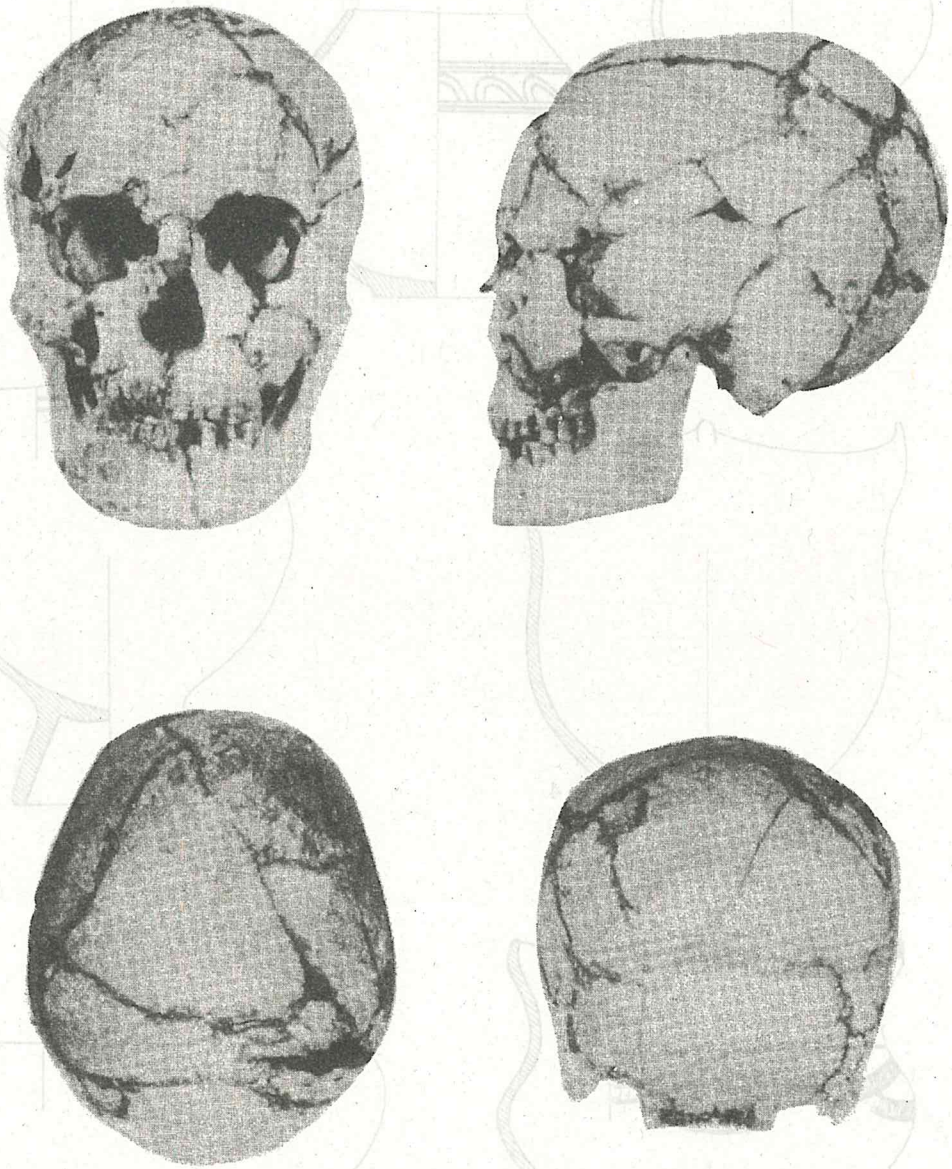
第5図　人骨の出土状況

弥生人骨（7，8，12，14，18，20号人骨）．縄文人骨（22，25，27号人骨）

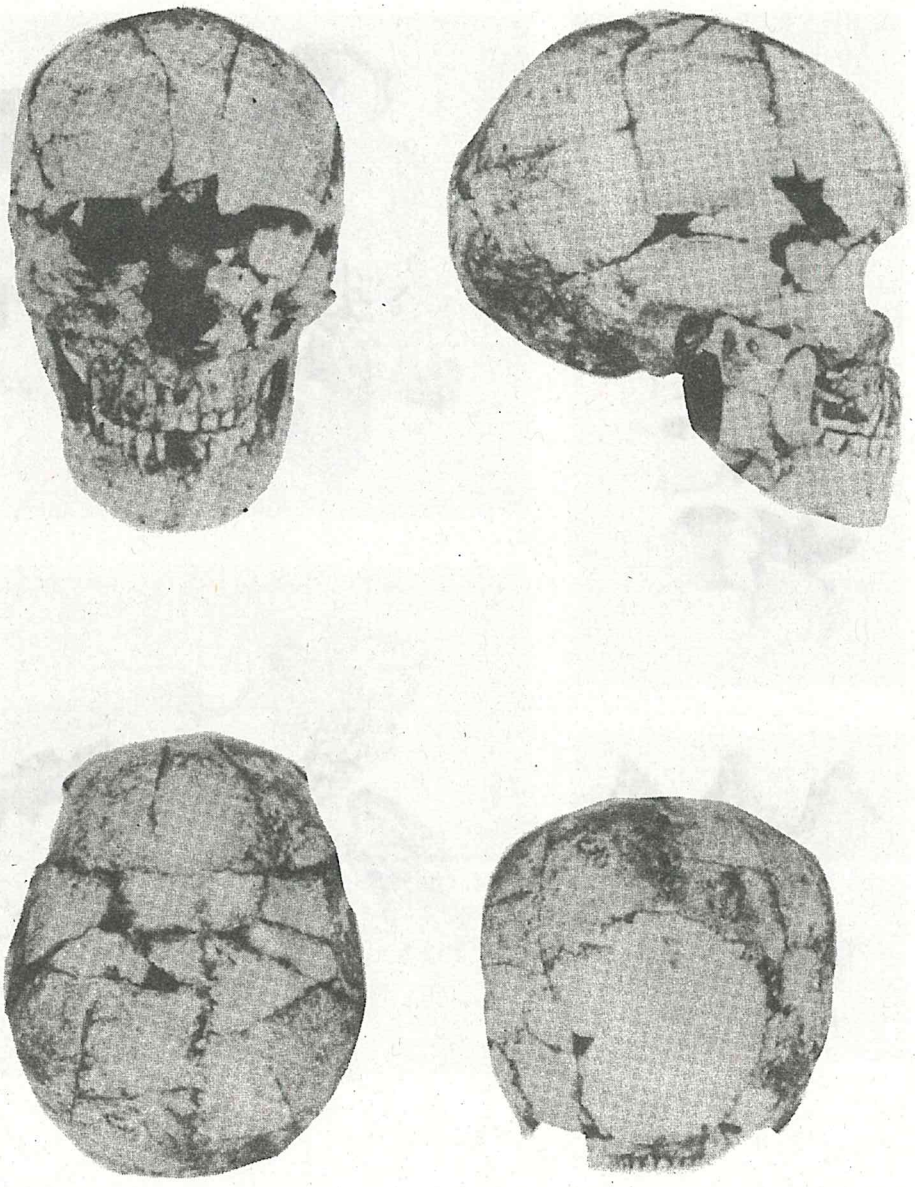


第6図　副葬の土器

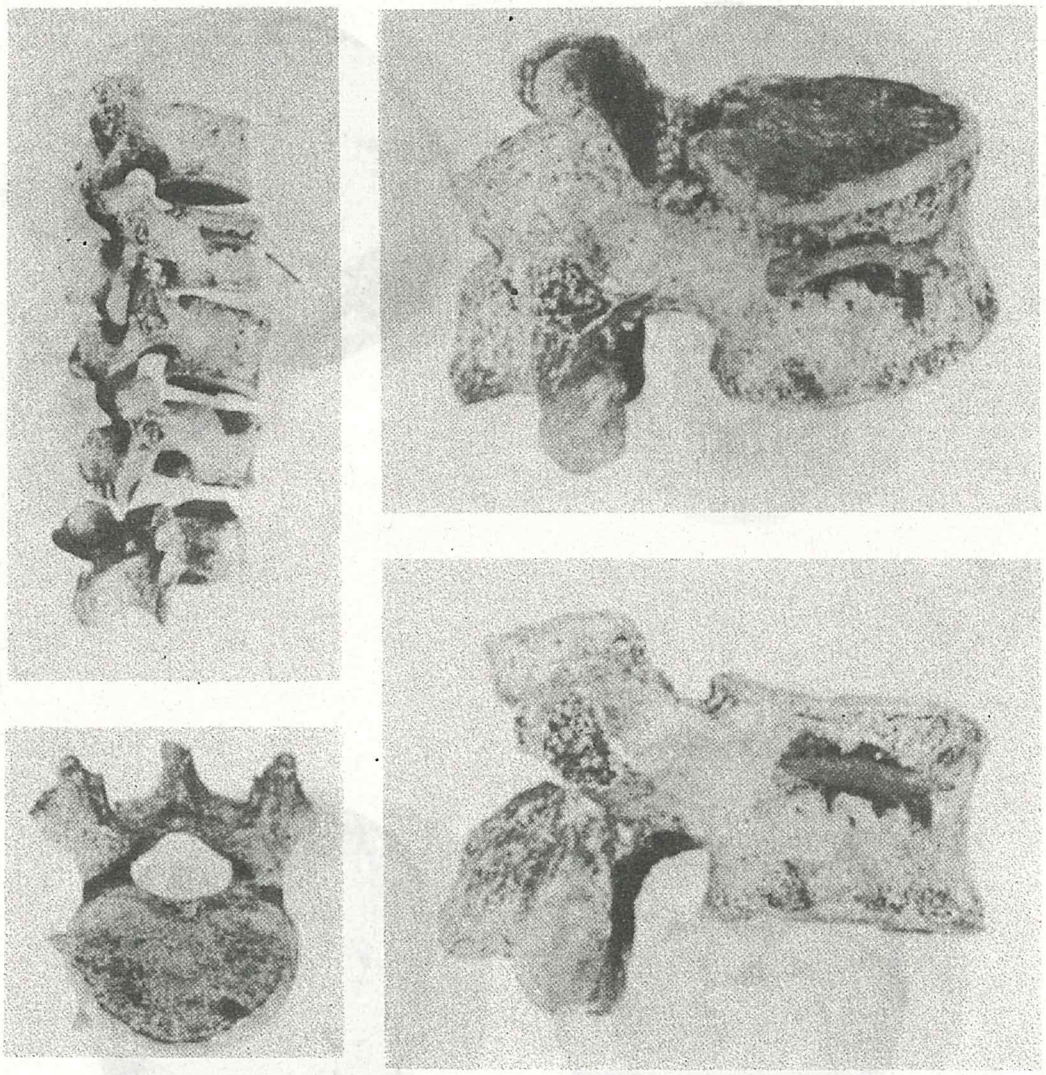
No.1　3号人骨，　No.2　14号人骨，No.3　18号人骨，
No.4・5　27号人骨，　No.6　26号人骨，No.7　22号人骨．



第７図　縄 文 人 頭 蓋 骨（26号人骨，男性熟年）



第8図　縄文人頭蓋骨（27号人骨，女性熟年）



第9図　石鏃が嵌入した弥生人腰椎（8号人骨，男性壮年）

On the Human Skeletons Excavated at the Okinoharu Site of Amakusa-gun, Kumamoto Prefecture

Yoshiatsu NAITO

Second Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

In the fourth excavation carried out in summer of year 1973, twenty-seven human skeletal remains were taken from the Okinoharu site in Amakusashimojima. Among the collected human skeletons, eleven individuals can be definitely to Late and Later Jomon periods and sixteen to Early Yayoi period.

Most of the skeletons excavated were found in a flexed position and were lying on their backs. The bones were not in a good condition of preservation. The author, however, was interested in these materials, because the two skeleton groups of Jomon and Yayoi were discovered from the same site.

The characteristics of these skeletons can be summarized as follows :

1) In regard to the skulls of Jomon people, the cranial dimensions are generally large, and they are mesocephalic or brachycephalic in both sexes.

As compared to the Yayoi people, the Jomon people are about the same in cranial dimensions and cephalic index in both sexes.

2) The facial skulls of Jomon people are more or less small in proportion to the cranial skulls.

The facial measurements of them are broad in transverse dimensions and are short in total and superior facial height in both sexes. Consequently, their total facial index and superior facial index are small.

The facial skulls of Yayoi people were found in bad comdition of preservation, making observation almost impossible.

3) There are four examples of ritual tooth-extraction in Jomon skulls.

4) One example of aural exostosis in both sides are found in skull of Jomon an adult male.

5) The humeri of the Jomon people, in both sexes, are remarkably stick and stout, but their lengths are relatively short. Consequently, the caliber index of Jomon people are considerably large.

As to male, the humeri of the Jomon people are similar to those of the Yayoi people in circumference and length.

In female, the humeri of Yayoi people are fairly slender. In caliber index, the Yayoi people are smaller than the Jomon people and even modern Japanese.

6) The femurs of the Jomon people are very flat at the upper part of their shafts, and marked in their pilasters in both sexes.

The tibias are notable for their flatness and marked in the developed creast on their

posterior surface in both sexes.

The Yayoi people, in both sexes, are slightly smaller than Jomon people in platymetric index and pilaster index.

7) The maximum length of the femurs, as determined by Pearson's method, suggests that the Yayoi male must have averaged 159.5 cm. in height and the females 152.6 cm., 148.7 cm. and 145.8 cm. respectively.

8) The second lumbar vertebra of Yayoi skeleton of an adult male was penetrated by an arrow head coming from a right lateral direction. There are no any bony reaction around the wound. It suggests that the death followed soon after he was injured.

乙益重隆　田中昭策　坂本経堯　松岡　史　田添夏喜　杉村彰一　隈　昭志　田辺哲夫

（第一次調査スナップ）

あとがき

第１次調査から25年、第４次調査からでもすでに10年の歳月が流れた。これまでに五和町では何度か報告書刊行に努力をくりかえされたが、遺物の整理が進まず中断していた。しかし、昭和54年以来主な遺物の整理に着手され、その一部が収録できることになった。遺物の整理は熊本県文化財収蔵庫で行い、上野辰男、山城仁恵の両氏に負うところが大きい。また骨角器の実測は島津義昭氏の協力をうけた。ここに記して謝意を表したい。

近藤義郎、内藤芳篤の両先生には、既発表の報文転載を心よく承諾していただき、本書の体裁を整えることができ、本当に感謝にたえない。

最後に、五和町御当局の永年にわたる御尽力に敬意を表するとともに、各論の刊行が一日も早く完成することを念じたい。

（田辺哲夫、隈　昭志）

昭和34年の第一次調査以来本報告書を刊行するまでの、五和町関係者は下記のとおりである。

○町長

宮崎武之　昭30.5.20～昭38.5.19（死亡）

葦原浩二　昭38.5.20～昭50.5.19

松岡増行　昭50.5.20～昭58.5.19

中村正人　昭58.5.20～現在

○助役

宮崎秀雄　昭30.7.3～昭34.7.2（死亡）

葦原浩二　昭36.7.17～昭38.3.15

松岡増行　昭38.11.3～昭50.2.28

佐々木春美　昭51.4.1～昭58.5.19

○教育長

山崎義盛　昭30.7.1～昭35.9.30（死亡）

喜多久雄　昭35.10.10～昭47.4.11（死亡）

池崎圭吾　昭47.4.21～昭50.9.30

荒木秀年　昭50.10.1～昭53.9.30

田口清人　昭53.10.1～昭56.9.30

荒木秀年　昭56.10.2～現在

○中央公民館長

田中一男　昭35.4.1～昭45.5.30

長島福正　昭45.6.1～昭51.5.30（死亡）

荒木秀年　昭51.6.9～昭52.3.31

山崎敏夫　昭52.4.1～現在

沖ノ原遺跡

昭和59年３月30日
第二刷　平成元年11月１日
編集
発行　五和町教育委員会

印刷　コロニー印刷
熊本市二本木３丁目12－37